

平成29年度

文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

調査研究テーマ	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導や評価の在り方に関する調査研究
調査研究課題	必要感に基づく体験を通して数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚を育むための指導と評価

平成30年3月

名古屋市教育委員会

## はじめに

名古屋市立幼稚園の各園では、学校教育の始まりとしての役割を自覚し、幼稚園教育要領の内容を基に地域の実情に応じながら幼児期にふさわしい教育を進めるよう努めています。

この度の、幼稚園教育要領の改訂で新たに加わりました「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、これまでも5領域のねらい及び内容に基づいた指導を通して育まれたものが具体的な姿として示されたものです。そこで、名古屋市立幼稚園の教育において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がどのように育まれていくのかを実践事例の検証を通して明らかにすることで、「幼稚園教育要領」が施行される平成30年度からの教育内容が一層充実することを目指して、この調査研究に応募、委託を受けることとなりました。

調査研究の方法として、「(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」を窓口、「幼児のごく日常の姿からていねいに読み取る」ことを意識し、実行委員である園長、主任、担任がそれぞれの立場で実践事例と向き合い、多面的に読み取ることが心掛けました。研究途上では、学識経験者や教育関係者の先生方から貴重な御指導御助言をいただく中で多くの試行錯誤を重ね、一人一人の幼児が、自らの興味や関心から環境に働き掛け、遊びや生活を充実させていく姿、関心・感覚を豊かにしていく育ちを具体的に明らかにすることができました。さらに、関心・感覚を育むために必要な環境や援助の在り方、幼児理解に基づいた評価の在り方についても方向を示すことができました。

この調査研究の成果や研究に携わった先生方が学んだことを基にして、今後も名古屋市立幼稚園の教育内容の充実に向けて一層努力し、名古屋市の質の高い幼児教育の推進役となることを願っております。

## 目 次

はじめに

I	事業計画の概要及び具体的な調査研究計画	1
1	事業計画の概要	1
	(1) 事業の背景	
	(2) 名古屋市における幼児期の教育	
2	具体的な調査研究計画	2
	(1) 調査研究の目的	
	(2) 調査研究実行委員会の設置	
	(3) 研究協力園及び実践事例研究部会における研究内容	
	○ 研究協力園における実践事例の集積	
	○ 実践事例研究部会における分析・検証	
	(4) 研究成果の「名古屋市 教育・保育に関する全体的な計画・指導計画（参考）」への位置づけ	
	(5) 成果の普及と啓発	
II	調査研究体制について	4
1	調査研究体制	4
2	研究協力園	5
III	調査研究の内容 事例分析	6
1	事例の分析方法	6
2	3年保育3歳児	8
	(1) 5月 「これなあに？」	
	(2) 5月 「だって、ボコボコってならないもん」	
	(3) 9月 「『えき』って書いて」	
	(4) 9月 「これはお父さん恐竜の歯だ」	
	(5) 10月 「わたし、クレープが作りたい」	
	(6) 11月 「こんなに長いよ」	
	(7) 11月 「これ滑り台屋根！」	
	(8) 11月 「『かえるさんへ』って書いて。『大好きだよ』って書いて」	
	(9) 2月 「このくらいにしておくことにした！ちょっと長すぎかも」	





# I 事業計画の概要及び具体的な調査研究計画

## 1 事業計画の概要

### (1) 事業の背景

平成29年3月に新しい小学校学習指導要領や幼稚園教育要領等が告示された。それらの改訂の背景には、情報化やグローバル化など、今後の急激な社会的変化の中でも、学校教育では、子供たちが変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決したり、様々な情報を新たな価値につなげたりしながら、一人一人が新たな社会の創り手として前向きに生きていくことができる力を身につけさせていく必要があげられている。つまり、幼児期の教育においても、学校教育の始まりとして、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められている。

幼児期の教育は、各教科等の内容を教科書などの教材を用いて学習する小学校以降の教育と異なり、主体的な活動としての遊びを中心とした直接的な体験を重ね、一人一人に応じた総合的な指導を通して、生涯にわたる人格形成の基礎を培うことを基本としている。

新しい幼稚園教育要領では、5領域を相互に関連させながら幼児を総合的に育てるという考え方は引き継ぎつつ、新たに幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5領域のねらい及び内容に基づいて、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に修了時、5歳児後半にみられるようになる具体的な姿である。これらの姿は、到達目標ではなく、保育者が遊びの中で幼児が発達していく姿を、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められている。

### (2) 名古屋市における幼児期の教育

本市においても、この幼稚園教育要領の実施に向け、今年度は各園の教育課程を中心とした全体的な計画や指導計画作成の参考となる「名古屋市幼稚園 教育課程 指導計画(参考)」の見直しを行っている。(平成29年度は「名古屋市 教育・保育に関する全体的な計画・指導計画(参考)」と名称変更する予定) 幼児教育において育みたい資質・能力の三つの柱を、遊びを通した総合的な指導を行う中で一体的に育みつつ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい

姿」を窓口に、3歳児から小学校就学までの幼児期の発達や学びの過程を捉え、「社会に開かれた教育課程」として改善を図りたいと考えている。

この調査研究では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである「(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に視点をあてて取り組みを進める。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目は、一つ一つを別々に指導するものではない。しかし、視点を絞った研究を進めることでより深く幼児の発達を理解し、指導の在り方を明らかにすることができ、他の項目との関連についても見えてくることがあると考える。

幼児は生活の中で身近な環境と関わる中で、数量や図形、標識や文字などに対しても、幼児なりの感覚を通して様々な「見方・考え方」をしている。この「見方・考え方」は、幼児にとって無自覚的なものであるが、保育者は、幼児一人一人の「見方・考え方」から数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚を捉え、発達や学びを見通した指導を行うことが重要である。幼児は生活や遊びの中で、自分なりの必要感に基づき、数を数えたり、大きさや形を見比べ組み合わせたり、文字の機能を使ったりするなど、多様な体験をする。保育者はその体験や学びの意味を見逃さずに捉えるとともに、その感覚をより豊かにする幼児期にふさわしい指導を行うことが必要である。しかし、これまでの名古屋市立幼稚園の実践においては、幼児の数量や図形、標識や文字などへの興味・関心の読み取りはしてきたものの、感覚の育ちを捉えた幼児の姿の見通しが十分であったとは言えない。

本調査研究は、幼児が身近な環境に主体的に関わり諸感覚を働かせて抱く「見方・考え方」に潜む学びの姿を分析し、その発達の過程を見通すことで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を具体化するとともに、その姿を踏まえた幼児期にふさわしい指導の在り方や教材の工夫、幼児理解に基づく評価の在り方を明らかにし、平成30年度から実施する新「幼稚園教育要領」の理念に沿った確実な実践に資するものとした。

## 2 具体的な調査研究計画

### (1) 調査研究の目的

本調査研究では、幼児が発達に応じて、数量や図形、標識や文字などにどのように親しみ、必要感に基づいて活用したり、興味や関心をもったりして、感覚を豊かにしていくのか具体的な姿を通して明らかにしていく。そして、教材の工夫を含めた指導の在り方、小学校教育を見通した教育課程の編成や指導計画の作成、さらには、カリキュラム・マネジメントの視点から幼児の発達の姿に基づいた妥当性の高い評価の在り方についても調査研究を進めていく。

また、研究成果については公立・私立、及び幼稚園・保育所等の区別なく、名古屋市を中心とした幼児教育施設に向けた報告会と報告書の配布を通して発信し、全ての施設における幼児期の教育の質の確保と向上を図る一環とする。

## (2) 調査研究実行委員会の設置

学識経験者（愛知教育大学教授野田敦敬氏、鳴門教育大学教授木下光二氏、名古屋学芸大学教授津金美智子氏、岡崎女子大学非常勤講師和田直子氏）や研究協力園の担当者、教育委員会関係者（名古屋市教育委員会算数・数学担当指導主事、教育課程担当指導主事等）による調査研究実行委員会を設置する。調査研究実行委員会では、本調査研究の目的について共通理解を図るとともに、研究協力園の研究や実践についての分析・検証を行う。調査研究の方向性や内容等について、より妥当性、信頼性の高い研究成果となるよう、学識経験者や教育関係者による指導・助言を踏まえ、分析内容の見直しや成果報告に向けた検討を行う。

## (3) 研究協力園及び実践事例研究部会における研究

### ○ 研究協力園における実践事例の集積

本調査研究では、研究協力園を指定し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである「数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚」を育む実践研究に取り組む。研究協力園では、幼児が遊びや生活の中で必要感に基づいた体験を通して、数量や図形、標識や文字などに親しんだり、活用したり、感覚を豊かにしたりしていると思われる姿の実践事例を集積する。集積した実践事例は、各園の実践事例検討会において、幼児の言動や変容などの姿を丁寧に読み取る。そして、「幼児の必要感に基づく体験を通じた数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚」の育ちや、その育ちのきっかけとなる幼児の必要感とはどのようなことなのかを考える。また、その育ちと「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連についても捉える。

### ○ 実践事例研究部会における分析・検証

研究協力園で集積した実践事例は、研究協力園の担当者と学識経験者による実践事例研究部会（3・4・5歳児部会）において、幼児の気持ちや考えなどについて更に考察を深め、幼児がどのような興味・関心を抱きどのような育ちがみられるのか、その背景にはどのようなことがあるのかなど丁寧に読み取っていく。そして、そこから幼児期における数量や図形、標識や文字などに関わる育ちと相互に関わり合いながら育つ「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても分析する。

そのうえで、幼児期の発達の過程で数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚がどのように育っていくのか、その育ちを支える幼児の必要感に基づく体験とはどのようなことであるかを読み取る。そして、そこに必要な幼児期にふさわしい援助の在り方や教材の工夫、幼児一人一人の理解に基づく評価の在り方についても探る。

#### (4) 研究成果の「名古屋市 教育・保育に関する全体的な計画・指導計画（参考）」への位置づけ

実践事例の読み取りや分析から分かった、幼児期において数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の育ちやそのために必要な環境や指導の在り方を、名古屋市教育委員会が編成・作成する「名古屋市 教育・保育に関する全体的な計画・指導計画（参考）」に反映させる。

この「名古屋市 教育・保育に関する全体的な計画・指導計画（参考）」は、市内の幼稚園、認定こども園、保育所に配布する。そして、各園におけるカリキュラム・マネジメントや幼児理解に基づいた指導の過程の評価、改善に生かすことができるよう、現在設置を検討している幼児教育センター（仮称）の研修等でも資料として活用していく。

#### (5) 成果の普及と啓発

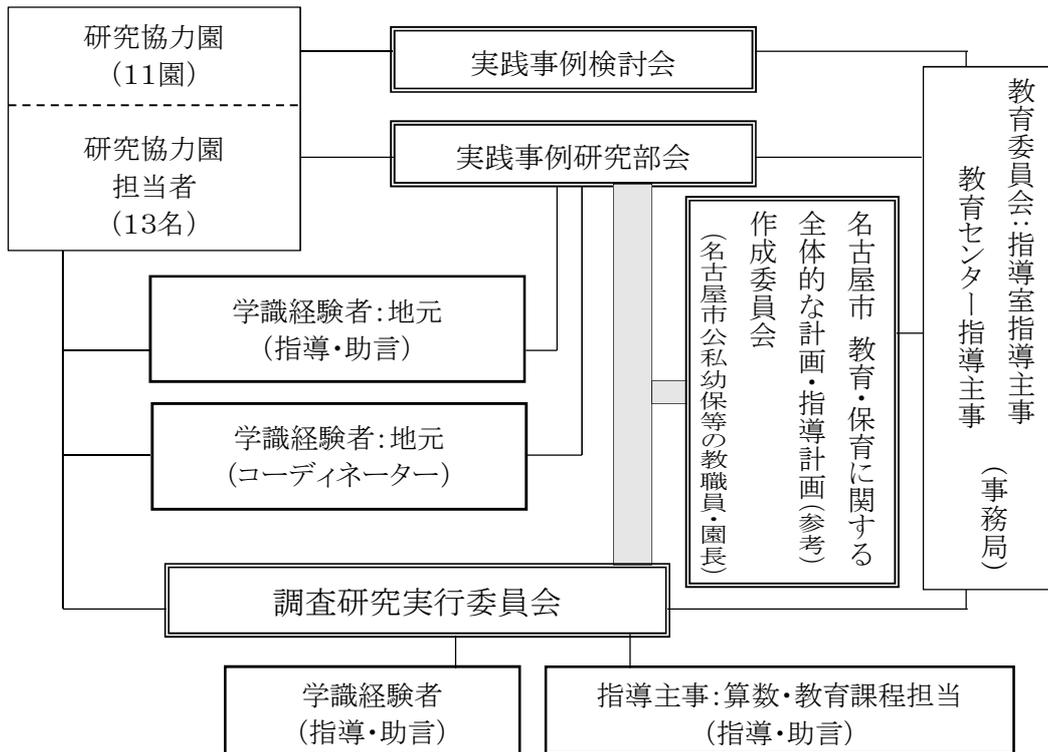
本研究の成果は、報告書にまとめ、「名古屋市教育・保育に関する全体的な計画・指導計画（参考）」とともに配布するとともに説明・報告会を実施し、成果の普及を図る。

## Ⅱ 調査研究体制について

### 1 調査研究体制

本調査研究では、研究協力園とその担当者を指定し、研究協力園による「実践事例検討会」、研究協力園の担当者と地元講師2名、事務局による「実践事例研究部会」、研究協力園担当者と学識経験者や教育関係者による「調査研究実行委員会」を設置し、組織的に研究内容を検討する。

《調査研究体制図》



## 2 研究協力園

本調査研究は、次の11園の協力の下、進めてきた。

研究協力園	3歳児学級数	4歳児学級数	5歳児学級数	学級数合計
名古屋市立桶狭間幼稚園	2	2	2	6
名古屋市立吹上幼稚園	1	1	1	3
名古屋市立二城幼稚園	2	2	2	6
名古屋市立神の倉幼稚園	1	1	2	4
名古屋市立猪高幼稚園	2	2	2	6
名古屋市立鳴子幼稚園	2	2	2	6
名古屋市立西山台幼稚園	2	2	2	6
名古屋市立第二幼稚園	2	2	2	6
名古屋市立第一幼稚園	2	2	2	6
名古屋市立大幸幼稚園	1	2	2	5
名古屋市立報徳幼稚園	1	1	1	3

### Ⅲ 調査研究の内容 事例分析

#### 1 事例の分析方法

実践事例の記載、読み取り、分析については、点線の吹き出しのように行った。

3年保育3歳児 5月 「これなあに？」

1期〈ねらい〉「新しい環境が分かったり、保育者に親しみを感じたりして安心して過ごす」

「名古屋市幼稚園教育課程・指導計画（参考）」を参考に作成した、各園の教育課程の発達の期と期のねらいを記載した。

「名古屋市幼稚園教育課程・指導計画（参考）」における期  
3歳児：第1期～第3期  
4歳児：第4期～第7期  
5歳児：第8期～第11期

#### 実践事例

A児は大人といることで安心するようで、保育者のそばでままごとをしたり他の幼児のすることを見たりすることが多かった。片付けや身の回りの始末などは、自分でしようとしていた。

A児・B児は、ままごとコーナーでプラスチック製のおにぎり、ハンバーガー、果物などを皿に並べて、㊦保育者に「どうぞ」と食べてもらっていた。

㊧A児がおにぎりの裏に「り」と書かれているのを見付けた。㊨A「これなあに？」T「りんご組のおにぎりですよっていうこと。りんご組のりだね」と言うと、㊩A児はたくさんあるプラスチック製の食べ物を一つずつ裏を向けたり、裏に書いていないと向きを変えたりして、「り」を探し始めた。……

#### 《実践事例》

実践の中の幼児や保育者の表情や言動を記載し、読み取りに  
関係する部分に下線を引いた。

#### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

㊦ A児は、今日も保育者が一緒だったので、その安心感から遊び出すことができたと考える。また、心を寄せることができるようになった相手だから、ごちそうを食べてもらいたいと思ったのだろう。「どうぞ」と自分から差し出している姿から、安心感をもちながら少しずつ自分で動き出した姿と捉えた。

㊨ おにぎりの裏に「り」と書かれているのを偶然に見付け、不思議に思ってすぐに保育者に尋ねることができたのは、知りたい欲求と共に、保育者には思ったことを言葉で表せばすぐに応えてくれると感じているからだろう。

㊩ A児は、おもちゃに文字が書かれているのを家庭では見たことがなかったと思う。そこで、「り」と文字が書いてあることが不思議だったし、その文字が「りんご組のものである」と示すということを知り更に興味がわき、「他の食べ物にも書いてあるかな？」と次々に確かめたくなったのだろう。

#### 《幼児の姿の読み取り》

実践事例から読み取ったことを記載した。その中で、幼児の育ちにつながっていると  
思われる部分に、読み取りの要素として  
波線を引いた。

読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊦ 安心感を持ち、自分のしたいことを楽しむ  
心を寄せる保育者に関わってもらい安心感を持ちながら好きなおもちゃで遊んでいる。

健康な心と体

自立心

㊧ 不思議に思ったことを言葉に出して尋ねようとする  
心を寄せる保育者になら、自分が不思議に思ったことを尋ねることができるようになってきた。

思考力の芽生え

㊨ おもちゃに書かれた文字の意味に気付く  
おもちゃに書かれていた一文字は「りんご組のもの」という意味であるを知って、たくさんあるおもちゃ（食べ物）にも書かれているかどうかを確かめようとする。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

「りんご組のもの」ということなら他のおもちゃにも書いてあるかなと思い、一つ確かめようとするのは、表示としての文字の役割に気付いていると捉えた。

言葉による伝え合い

《読み取りのポイント》  
幼児の姿の読み取りから、育ちのポイントを短い文章でまとめ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関わりを線で結び示した。

点線の囲みの中には、上の《読み取りのポイント》を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関わっていると捉えた根拠の説明を示した。

必要感に基づく体験を通した数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は園での生活に安心感を持ち、興味をもったおもちゃでしたいようにして遊び、そのおもちゃに親しみが増してくると・・・・・・  
保育者や周りの幼児たちとの毎日の生活を通して、その子なりにクラスに親しみ所属意識が芽生えてくることと、おもちゃで楽しく遊ぶようになることが幼児の中でつながると「クラス表示」が幼児にとって意味あるものとなっていく。・・・・・・

本市の調査研究課題である、幼児の「必要感に基づく体験」と「数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚の育ち」について分析し、記載した。

育ちに必要と思われる環境と援助

幼児が上記下線のような育ちをしていくためには、心を寄せることができる温かい保育者の支えにしながら、自分のクラスで居場所を見付け、・・・・・・

上の数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の育ちに必要と思われる環境の構成や保育者の援助について記載した。

## 2 3年保育3歳児

### 3年保育3歳児(1) 5月 「これなあに？」

1期(くねらい)「新しい環境が分かったり、保育者に親しみを感じたりして安心して過ごす」

#### 実践事例

A児は大人といることで安心するようで、保育者のそばでままごとをしたり他の幼児のすることを見たりしていることが多かった。片付けや身の回りの始末などは、自分でしようとしていた。

A児・B児は、ままごとコーナーでプラスチック製のおにぎり、ハンバーガー、果物などを皿に並べて、⑦保育者に「どうぞ」と食べてもらっていた。

④A児がおにぎりの裏に「り」と書かれているのを見付けた。⑦A「これなあに？」T「りんご組のおにぎりですよっていうこと。りんご組のりだね」と言うと、④A児はたくさんあるプラスチック製の食べ物を一つずつ裏を向けたり、裏に書いていないと向きを変えたりして、「り」を探し始めた。保育者は、見終わったものを他の容器に入れながら、A児が見せる食べ物一つ一つに書いてある通りに読んでいった。「み」と書かれた食べ物が出てきた。

④A「これなあに？」T「これは、みかん組のみだね。みかん組の食べ物が混じっていたね」と言うと、A児は一人でみかん組にごちそうを返しに行った。続けて次々に食べ物を裏返したりくるりと回して見たりした。「ぶ」と書いたものも出てきた。

保育者が「これはぶどう組のぶだね」と言うと、また、一人でぶどう組に返しに行った。その他「りんごぐみ」とフルで書いたものも出てきた。「これは？」とA児が尋ね、保育者が「これは、りんごぐみって全部書いてあったね」と伝えて、④A児は、やり取りを楽しみながら、数十個ある食べ物を全部見終わるまで続けた。そして、④A児は「み」と「ぶ」が見付かる度に、自分からみかん組とぶどう組に渡しに行った。

#### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児は、今日も保育者が一緒だったので、その安心感から遊び出すことができたと考える。また、心を寄せることができるようになった相手だから、ごちそうを食べてもらいたいと思ったのだろう。「どうぞ」と自分から差し出している姿から、安心感をもちながら少しずつ自分で動き出した姿と捉えた。
- ④ A児は保育者のそばで遊ぶことを楽しむようになってきた。そこで、“先生にどれを食べてもらおうかな”と、じっくりと選ぶことを楽しんでいるうちに、ふと表示が目に入り、家との違いに気付く、不思議に感じたのではないかと。A児が、安心感をもって遊ぶようになってきたことがここからも伺える。それが今まで気付かなかったほんの小さなひと文字にも着目する好奇心を後押ししていると思われる。
- ⑦ おにぎりの裏に「り」と書かれているのを偶然に見付け、不思議に思ってすぐに保育者に尋ねることができたのは、知りたい欲求と共に、保育者には思ったことを言葉で表せばすぐに応えてくれると感じているからだろう。
- ④ A児は、おもちゃに文字が書かれているのを家庭では見たことがなかったと思う。そこで、「り」と文字が書いてあることが不思議だったし、その文字が「りんご組のものである」と示すということを知り更に興味がわき、“他の食べ物にも書いてあるかな？”と次々に確かめたくなったのだろう。
- ④ A児は身の回りをきちんと整えたり片付けを進んだりして几帳面なところがある。それで、りんご組のものには「り」と書いてあり、おもちゃには所属があると分かったために、「み」が出てきたらあるべきところがないと何となく気持ちが悪かったのではないかと。それで“みかん組のものだから返しに行かなくてはい！”と思ったのだろう。自分にとっては必要なことだから、自分一人でみかん組へ返しに行ったのだろう。
- ⑦ 「み」「ぶ」「りんごぐみ」など、探す度に様々な表示方がされていることが分かり、“次は何と書いてあるのかな？”と楽しみにしながら次々に聞いていったのだろう。その都度必ず保育者が「○○だね」と応えてくれるので、やりとりすることと、様々な表示を見付けることの両方を楽しんだと思われる。
- ④ A児は、「み」と「ぶ」が見付かる度に、自分から一人でみかん組やぶどう組に食べ物のおもちゃを返しに行っていた。きっと行く度にみかん組・ぶどう組に「ありがどう」を言ってもらいうれしかったのではないかと。今まで保育者と一緒に行動していたA児にとって、一人で行動する喜びを味わう経験だったと思われる。

## 読み取りのポイント

## 育てほしい姿との関連

## 幼児期の終わりまでに 育てほしい姿

㊦ 安心感をもち、自分のしたいことを楽しむ  
心を寄せる保育者に関わってもらい安心感をもちながら好きなおもちゃで遊んでいる。

㊧ 好きなおもちゃに書かれた文字に気付き不思議に思う  
安心感をもち自分のペースで遊びを楽しむことで、今まで気付かなかったおもちゃ（おにぎり）に書かれた「り」の文字に気付く。

㊨ 不思議に思ったことを言葉に出して尋ねようとする  
心を寄せる保育者になら、自分が不思議に思ったことを尋ねることができるようになってきた。

㊩ おもちゃに書かれた文字の意味に気付く  
おもちゃに書かれていた一文字は「りんご組のもの」という意味であるを知って、たくさんあるおもちゃ（食べ物）にも書かれているかどうかを確かめようとする。

「りんご組のもの」ということなら他のおもちゃにも書いてあるかなと思い、一つずつ確かめようとするのは、表示としての文字の役割に気付き始めていると捉えた。

㊪ 自分なりの必要感から自分で動き始める  
「自分はりんご組の子」「だから他の組のおもちゃは使わない」「他の組のものは、その組に返さなくては」といったA児なりの必要感から誰に言われなくても一人で返しに行こうとする。

今まで、保育者と一緒に過ごしていたA児が、自分で動き出すきっかけとなっていると捉えた。

㊫ 様々な表示の仕方があることに気付き親しむ  
「り」「りんごくみ」など、同じ意味でも違う表し方があることを知って、面白がって確かめようとする。

㊬ 自分で考えて行動する心地よさを味わう  
みかん組ぶどう組におもちゃを返しに行き、喜んでもらったことで、一人で行動することに弾みがついたと思われる。

健康な心と体

自立心

思考力の  
芽生え

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

## 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は園での生活に安心感をもち、興味をもったおもちゃでいたいようにして遊び、そのおもちゃに親しみが増してくると選んだりよく見たりして関わり方や扱い方も変化してくる。保育者や周りの幼児たちとの毎日の生活を通して、その子なりにクラスに親しみ所属意識が芽生えてくることと、おもちゃで楽しく遊ぶようになることが幼児の中でつながると「クラス表示」が幼児にとって意味あるものとなっていく。そして、遊びや生活を通して様々な表示に触れたり意味を知ったりしていくことにより、表示のもつ役割にも気付いていくと思われる。

## 育ちに必要と思われる環境と援助

幼児が上記下線のような育ちをしていくためには、心を寄せることができる温かい保育者との関係を支えにしながら、自分のクラスで居場所を見付け、面白そうなおもちゃでいたいようにして遊び愛着を感じるようになることが必要である。

また、その表示が何を意味するかを知ることは、その子の世界を広げていくことにもつながる。小さな表示一つにも幼児の発達や興味を踏まえて環境に取り入れるようにしていきたい。

実践事例

A児、B児はプランターや花壇、地面など⑦いろいろなところにジョロで何度も水をまいていた。側溝の隙間の穴を見付けると、今度はそこにジョロで水を入れ始めた。穴にどんどん水が入っていき、A児は⑧「のどが渴いたって」と言いながら何度も水を汲み、B児と二人で⑨「ジャーッ」と言いながら何度も穴に水を入れた。保育者はA児、B児が汲んでいるたらいに水を足しながら「本当だね。のどが渴いたんだね」と声を掛けると、⑩二人はまた何度もたらいから水を汲んでは、穴に水を入れていた。

しばらくすると、A児が「もっとお水欲しい」と言いに来た。保育者が「まだ、お水入ってるみたいよ」と言うと、B児が⑪「だって、ボコボコってならないもん」と言った。たらいの中の水が足りず、ジョロに水を入れても「ボコボコ」と泡がでないことを言っているようだった。A児も⑫「Aもボコボコがいい」と言うので、保育者は「そうか、ボコボコしたいよね」と言いながらたらいの水を足した。水がいっぱいになると、A児、B児は⑬ジョロを力強く水に押し入れた。「ボコボコ」という音がして水が入ると、⑭A児は「わあ」と声をあげ、B児は体を揺らして喜んだ。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児、B児は、水に触れる気持ちよさを味わいながら、プランターや花壇など水をまいてもよきような場所から側溝の穴にまで入れ始めていて、自分の思うままにできる楽しさを感じていると思われる。



- ⑧ A児、B児は、いろいろなところに水をまいたが、特に側溝の穴にはどんどん水が入っていくので面白くてたまらなかったのだろう。また、それを自分と重ねて「のどが渴いた」と表現したのだろう。
- ⑨ A児、B児は自分たちが水を流すと勢いよく流れる様子を動きと言葉の両方で楽しんでいるのだろう。
- ⑩ A児、B児は自分たちが楽しんでいることを保育者に受け止めてもらうことで、思い切りしたいことを楽しむことができたのだろう。
- ⑪ B児は何度もたらいから水を入れて流すことを繰り返す中で、たらいに水がたくさん入っているとジョロを沈めたときに「ボコボコ」と泡や音が出ることに気付いていたのだろう。「ボコボコってならない」という言葉で水をもっと入れてほしい理由を言っているのだろう。また、B児は、「ボコボコ」と水が入っていく面白さをもっと楽しみたい気持ちがあるのだろう。
- ⑫ A児も、B児と一緒に遊んでいて同じように空気が漏れる音や面白さを感じていたのだろう。B児が「ボコボコってならない」とぴったりの言葉で言ったので、同じように「ボコボコがいい」と言ったのだろう。
- ⑬ 今まで繰り返し楽しむ中で、A児、B児はたくさん水の中に空のジョロを力強くぐっと押し入れると水が入ることに気付いていると思われる。
- ⑭ A児、B児は、思った通り「ボコボコ」と鳴ったことがうれしくて、喜びを声や体で表現したのだろう。

読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊦ したいことを思うままにできる楽しさを感じる

水に触れる気持ちよさを味わいながら、自分がしたいことで思うままに遊ぶことを楽しんでいる。

㊧ 目の前の様子を自分なりに表現する

穴に水がどんどん吸い込まれていく様子を自分に置き換えて表現している。

㊨ 水が勢いよく流れる様子を動きと言葉で楽しむ

水が勢いよく流れるのがうれしくて、「ジャーッ」と言っは水を流すことを楽しんでいる。

㊩ 安心して、したいことを繰り返し楽しむ

保育者に楽しんでいることを受け止めてもらい、安心してしたいことを何度も繰り返し楽しんでいる。

自分なりに気持ちよさや面白さを感じながら、思う存分水に関わって楽しむ姿は、興味をもったことに自分から働き掛けていると捉えられる

㊪ 自分なりの言葉で理由を言う

たらいに水がたくさん入っていると、「ボコボコ」と泡や音が出ることから、水を入れてほしい理由を「ボコボコってならない」と言い表している。

繰り返して遊ぶ経験から、水の量や深さとそれに伴う現象（泡が出る、ジョロにたくさん水が入る等）を結びつけて捉えているため、そのことを理由として伝えようとしている。

㊫ 友達の言葉をぴったりだと思い、自分も同じように言う

同じように感じていた音や面白さを友達が「ボコボコ」とぴったりという言葉で言い、自分も同じように言う。

㊬ 力強く押し入れると水が入ることに気付いている

空気が入っているジョロを、たくさんの水の中に力強くぐっと押し入れると水がたくさん入ることに気付いている。

㊭ 音がして水が入ったことがうれしくて、声や体で表わす

自分の思った通り「ボコボコ」と音がして水が入ったことがうれしくて、声をあげたり、体を揺らしたりして表わしている。

健康な心と体

自立心

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現



### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は、自分がしたいことを保育者に受け止めてもらい安心感をもつと、自分から身近な環境に興味や関心をもち、繰り返し関わるようになる。そして、自分なりに面白いと感じたことを何度も繰り返す中で、幼児は諸感覚を通して様々なことを感じ取る。特に、水や砂・泥との関わりでは、遊び方や使う道具などによっても感じ取ることが異なり、幼児一人一人でも様々である。

この事例でも、幼児は、ジョロに水を入れたり水を流したりして、水に触れていたいことを思う存分にする気持ちよさや楽しさを味わう中で、水の量や様子、聞こえる音、手に伝わってくる力強さや重さなど、様々なことを感じ取っている。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

この時期の幼児は、自分の思いや要求を表情やしぐさ、自分なりの言葉で表すことが多い。そのため保育者は、幼児が水や砂、泥に触れて思う存分遊ぶ中で、諸感覚を通して何を楽しんだり感じたりし、どのような経験をしているのかを推測しながら、一人一人に応じた受け止めをしていくことが大切である。また、保育者は、幼児が水や砂、泥に触れていたいことを十分できるように遊具や道具の量を十分に用意し、一人一人の思いを満たすことができるようにすることが大切である。



実践事例

A児は、段ボール箱でできた電車の中に⑦友達と二人で入り込み、にこにこしながら走っていた。A児は、①「ガタンガタン、ガタンガタン」と言いながらそのリズムで調子をとって歩き、一緒に乗っている友達と体を揺らしながら進んでいた。

一緒に乗っていた友達が降りると、A児は、②「乗ってくださーい」と大きな声で言った。すると、近くにいたB、C、D児が3人で手をつないで「乗せて」とやって来た。A児は3人を見て③「にっこりしたが、そんなに入れないよ」とつぶやいた。そこで、保育者は「運転手さん、ここで待っていたら乗れますか？」と聞き、「なんだかここ、駅みたいだね」とわくわくするような雰囲気の中で声をかけた。すると、A児は④「あっ、『えき』とつぶやき、『先生、『えき』って書いて」と保育者に言った。保育者は「そうか、みんなに分かるものね。いいね、『えき』って書くね」と言って、紙に「えき」と書いて壁に貼ってA児に見せた。A児は「うんうん」とうなずき、⑤小走りですいを取りに行った。A児はいすを並べ終わると大きな声で⑥「ここでお待ちください」と言って、B児を電車に乗せてにこにこして出発していった。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児は友達と小さな段ボール箱の電車に二人で入り込み、体を触れ合わせながら、一緒に走る楽しさを感じているのだろう。
- ① A児は後ろに乗っている友達と一緒に「ガタンガタン」という言葉やリズムの面白さを感じながら体を揺らし、運転することを楽しんでいるのだろう。
- ② 友達と一緒に乗ったらとても楽しかったから、もっと他の友達にも乗ってほしくなったのだろう。
- ③ A児は友達が乗りに来てくれてうれしくてみんなを乗せたかったが、自分の電車にそんなには入らないだろうと感じ、「どうしよう。乗れるかな」と心配になったのだろう。
- ④ 保育者はA児がみんなを乗せたいと思っていることを何とかしたいと思い、「ここで待っていたら乗れますか」と聞いてみた。また、「なんだかここ、駅みたいだね」とわくわくするような雰囲気の中で声をかけた。A児は、そんな保育者の「えき」という言葉を聞いて、みんなが電車を待っていてくれる場所という「駅」のイメージが浮かんだのだと思われる。

駅には、文字で駅名が表示されていて、それぞれ異なるが、3歳児のA児には、それがどれも「えき」を示していると思っているのかもしれない。そのため、「名古屋って書いて！」ではなく「『えき』って書いて」と言ったのではないか。
- ⑤ A児は「えき」と書いた紙を貼ってもらえたことで、その場所が、友達が集まって来たり、自分の電車を待ってもらったりする場となることを何となく感じ、自分でいすを並べようと動き出したのだろう。
- ⑥ 友達に待っていて乗ってもらいたいという思いから、うれしそうに友達に声を掛けたのだろう。

㊦ 友達と触れ合いながら、したいことをして遊ぶ楽しさを感じる

友達と二人で体を寄せ合って一緒に動く楽しさを感じながら、電車に乗っている気分でしたい遊びを楽しんでいる。

㊧ 友達と一緒に言葉や動きのリズムを楽しむ

友達と同じように「ガタンガタン」とリズムよく言ったり、体を揺らしたりする楽しさを感じている。

㊨ 友達と一緒に乗ってほしい気持ちを言葉にする

電車に友達と一緒に入って動く楽しさを感じたことから、友達と一緒に乗ってほしいと思い、大きな声で言葉にしている。

㊩ 友達の数と電車の広さを比べる

友達が来てくれてみんな乗せたいが、実際に電車に出入りして広さを捉えているので、そんなには入らないと感じている。

自分で段ボールの電車を運転したり出入りしたり、友達と一緒に入ったりすることで、感覚的に電車の広さを捉えている。

㊪ 自分の知っている駅をイメージし、保育者に表示を書いてもらう

保育者の言葉を聞いて、自分の思う駅のイメージが浮かび、文字で駅名が表示されていることを思い付いている。A児は文字が「えき」を示していると捉え、「『えき』と書いて」と言っている。

友達と一緒に遊びたいという思いから、「えき」ということを友達に知らせようとして、文字で表示することを思い付き、書いてもらう。

㊫ 友達に待ってもらえる場所ができたと感じ、自分から動き出す

保育者に「えき」と書いて貼ってもらい、友達に待ってもらえる場所ができたと感じ、自分からいすを並べて動き出している。

㊬ 友達とこんなふうに遊びたいという思いをもち、自分で声を掛ける

友達に駅で待ってもらって乗せようと思って、うれしそうに友達に声をかけている。

健康な心と体

自立心

協同性

社会生活との  
関わり

思考力の  
芽生え

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな  
感性と表現



### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

A児は友達と二人で電車に入り込んで一緒に動く楽しさを感じたり、やって来た友達みんなは自分の電車に入れないと感じたりする中で、人数や広さを感じ取っていると思われる。幼児は、友達と触れ合いながらしたいことをして遊び、実際に見たり、動いたりする中で数や広さなどを感じ取っていると思われる。

また、A児は自分の電車に乗ってもらいたいという気持ちから、保育者に「えき」と書いた紙を貼ってもらうことで、その場所が自分の思う「駅」のイメージと重なり、“誰かが待っていてくれる”、“自分の電車に乗ってくれる”と人が自分の遊びに関心をもってくれる場となったうれしさを感じている。幼児はこのような経験から、文字や標識が何かを表し人に伝わっていくことを感じていくと思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

保育者は、幼児がやってみたいと感じ、自分から関わっていくことができるような環境を用意して、“～している気分”や友達と触れ合ううれしさを温かく受け止めることが大切である。そして、芽生え始めた友達への興味や関心をその幼児なりに表そうとしたり、文字や標識なども使って友達に伝えようとしたりする姿に寄り添って、してほしいことをかなえていくことが大切である。

また、3歳児には文字や表示はまだ難しいだろうと考え、表示には絵（簡単なイラストや写真）を使うことが多いが、幼児は生活の中で周囲にある文字による表示にも興味を向け始めている。保育者は、このような幼児の興味や関心を意識して、掲示物や表示などの環境を整えることが大切である。



実践事例

A児が「〇〇(絵本の好きなキャラクター)いるかな?」とロール芯を二つ付けた望遠鏡をのぞきながら保育者や友達と一緒に園庭を探していると、足の長い蜘蛛のような虫を見つけた。A児は「これは何だ?」と言いながら望遠鏡でのぞいて、⑦「これは恐竜だ! 恐竜がいた!」と大きな声で叫んだ。保育者が「恐竜かな!」と言うと、周りにいた友達は「これ恐竜なんだって」と驚いた。A児は⑧「みんなこっち来て、恐竜がいたよ!」と保育室へ走って呼びに行った。A児の声を聞いて幼児が次々と保育室から出てきた。A児がそこに戻ると、虫はいなくなっていた。恐竜好きのB児が⑨「どこ行ったの?ぼくも見つかった」ときよろきよろ周りを探し始めた。保育者も「どこ行ったかな?こっちかな?」と探すと、⑩周りにいた幼児たちは望遠鏡をのぞいたり辺りを見渡したりして恐竜を探し始めた。するとC児が「あっ、これ見て!」と手のひらいっぱいぐらいの大きさの尖った石を手にとって⑪「これはお父さん恐竜の歯だ!」と言った。保育者は「わあ!お父さん恐竜の大きな歯が見つかったね」と喜んだ。それを聞いていたB児は三角の形のごつごつした両手でやっと持てるぐらいの大きな石のかたまりを見つけて⑫「恐竜のとげとげがあった!」と満面の笑みで言い、「恐竜どこ行っちゃったんだろう?」と恐竜を探した。周りにいた幼児も石を見つけて「歯だ!歯があった」と言って探し続けた。D児は足元にあった小さな石を拾って手のひらにのせて保育者に見せた。保育者は「いい物見つけたね」と受け止め言葉をかけた。隣にいたE児が「これは赤ちゃんの歯じゃない?」言ったので、保育者も「赤ちゃんかもだね」と答えた。それを聞いて⑬D児はぎゅっとその石を握って微笑んだ。

幼児の姿の読み取り

波線:読み取りの要素

- ⑦ A児は前日から園庭のどこかに本当に絵本の好きなキャラクターがいて、探すことを楽しんでた。この日も望遠鏡をのぞきながら探していると、急に見たことのない虫が目に入り、その形が恐竜の形に見えたのだろう。それを本当に恐竜と思い「恐竜がいた!」と言ったのだろう。
- ⑧ A児は本当に恐竜がいて、発見した驚きを親しみを感じているクラスの友達に伝えたいと思ったのだろう。
- ⑨ 恐竜が大好きなB児はA児の話を聞いて自分のよく知っている本物の恐竜が園庭にいたと思い「ぼくも見たい」と探し始めたのだろう。
- ⑩ 保育者やA児、B児の雰囲気から、周りにいた幼児たちも自分も見たいとワクワクした気持ちになり恐竜を探そうと思ったのではないか。
- ⑪ 幼児たちは本物の恐竜が園庭にいたと思い、それぞれに恐竜を見付けたいと思っていたので、園庭に落ちていた石の大きさや形などから本物の恐竜のお父さんの歯と思ったのだろう。
- ⑫ B児は大好きな本物の恐竜を探していたが、C児が歯を見つけたことから、他にも恐竜の何かがあるかもしれないと思い、探したのだろう。そして、大きな石を見付け、ごつごつした感触や見た目の形から恐竜の背中にあるとげと思いうれしくなったのだろう。
- ⑬ D児は恐竜のことはよく分からないけれど保育者や友達の楽しそうな雰囲気にワクワクした気持ちで一緒に過ごしたり、友達が見つけた物を見たりすることを楽しんでたのではないかと思う。そして自分の見つけた石を保育者に見せて、うれしさを受け止めてもらったり、友達に「赤ちゃんの歯」と言ってもらったりして、自分も見付けられたうれしさを感じたのではないか。

㊦ 遊びの世界に入り込み、発見した喜びを感じる

作った望遠鏡をのぞいて見ている、見たことのない虫の形を本当の恐竜だと思い、恐竜を発見した喜びを感じる。

㊧ 発見したことを友達に伝えようとする

本物の恐竜を見つけたという驚きを、親しみのあるクラスの友達に伝えようとしている。

㊨ 友達に刺激を受け、自分も見付けようと動く

B児は友達の話を聞いて“恐竜を見付けたい”という思いをもち、自分のよく知っている本物の恐竜を探し始める。

㊩ 保育者や友達の楽しい雰囲気を感じ、同じように動く

保育者や友達の雰囲気から、恐竜を“自分も見てみたい”というワクワクした気持ちになり、自分も恐竜を探そうとする。

周りの友達や保育者と一緒に、ワクワクしながら恐竜を探したり見付けたりする楽しさを味わっている。

㊪ 形や大きさ、感触からイメージする

“本物の恐竜を見付けたい”と思い、色々な物を自分で見付けて手に取ったり見たりする中で、形や大きさ、感触などから恐竜のどの部分なのかを思い浮かべている。

見つけた物を実際に手に取り、形や大きさを見たり感触を感じたりして、どんな恐竜のどの部分なのかを思い浮かべている。

㊫ 見つけた物を友達に受け止めてもらううれしさを感じる

D児は先生や友達の楽しそうな雰囲気を感じて同じように動く中で、自分で見つけた小さな石を友達に「赤ちゃんの歯じゃない？」と言ってもらい、うれしさを感じている。

健康な心と体

自立心

協同性

自然との関わり・生命尊重

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現



### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は遊びの世界に入り込み、保育者や友達と同じように探したり、見付けたり、見立てを楽しみながらイメージを膨らませたりしている。そして、見つけた物を実際に見たり触ったりする中で、“尖っているからとげかな”“大きいからお父さんの歯かな”と自分なりにイメージすることを楽しんでいる。このように身近な物の形を様々な物に見立てながら遊ぶ中で、形や大きさの感覚を豊かにしていくと思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

保育者は幼児が“恐竜が本当にいる”と思っている世界と一緒にどっぷりと浸かり、その世界を一緒にワクワクドキドキしながら楽しんでいくことが大切である。恐竜を探して、形や大きさを自分の目で捉えたり、感触を感じたりする中で、どのようなことを思っているのか、何を楽しんでいるのかなどを読み取りながら、一人一人に応じた関わりをすることが大切である。

また、園庭にあった誰もが見付けてすぐに手に取ることのできる自然物は、その感触や形から幼児が様々なものに見立てて楽しみ、幼児の興味を引き出すことにつながる。保育者自身も豊かな感性で身の回りにある自然物を捉えることが大切である。



3期(ねらい)「身の回りのいろいろなことに心を動かし、保育者や気に入った友達と一緒に自分のしたい遊びを楽しむ」

### 実践事例

木製遊具をジェットコースターに見立てて、保育者と4名ほどの幼児が遊んでいた。保育者が遊園地の人になったつもりで「チケットください」と言うと、A児が近くに⑦落ちていたイチヨウの葉を拾って「どうぞ」と渡す。すると、その姿を見て、他の幼児も⑧落ちていたイチヨウやクス、ナシなどの葉を拾い、チケットにして保育者に渡す。「はい、チケットです」「出発しまーす」など、⑨保育者や周り

にいる友達と歓声を上げながら、繰り返しジェットコースターのつもりを楽しんでいた。

しばらくすると、A児がイチヨウの葉を手にして⑩「私、クレープがつくりたい」と言い、センダンの実を拾ってイチヨウの葉に包み、⑪「ブルーベリー味ね」とクレープづくりを始めた。保育者もA児に「ブルーベリーがいっぱい入っておいしそう!」「先生も食べたいな」などと受け止めた。すると、近くでその様子を見ていた⑫B、C児らもセンダンや若い銀杏を拾ってイチヨウの葉に包み、「イチゴ味」「バナナとチョコ」と言ってクレープをつくり始めた。そして、クレープができると、自分でうれしそうに食べたり保育者に「甘くておいしいよ」「チョコレートいっぱいだよ」など食べてもらうことを喜んだりして遊んだ。

後日、大きめの⑬トチの葉をパンに見立て、同じくらいの大

### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ 園庭には多くの樹木があり、幼児たちは木陰で過ごしたり葉や花のにおいをかいだりし、いつもそこにある樹木との関わりを重ねてきた。保育者の「チケット」という言葉に、A児がイチヨウの葉を見立てて「どうぞ」と渡す姿は、いつも身近にあるイチヨウに親しみを感じて自分から関わっている姿ではないか。
- ⑧ 保育者は、「チケットください」と言いつつも、手のひらをタッチするだけでもよいと思っていた。しかし、A児がイチヨウの葉を渡す姿を周りで見ている幼児は、その姿に刺激を受けてそれぞれが気に入った葉を拾って渡すようになった。友達のことを気にしたり一緒に過ごす楽しさを感じたりしているからこそ、自分もやってみようと感じたのではないか。
- ⑨ A児たちは、保育者や友達と並んだり体を密着させながら遊具を滑り降りたりしてジェットコースターの遊びを繰り返し楽しんでいた。また、友達と同じように葉っぱのチケットを保育者に渡すことで、友達とつながるうれしさを一層感じる事ができたと思われる。
- ⑩⑪ A児は、イチヨウの葉をチケットに見立てて遊ぶ中で、イチヨウの葉の扇形、黄色くなりかけた葉の色、イチヨウの葉を丸めると円錐形になることからクレープをイメージしたのだろう。また、これまでに砂や木の実などを使ったごちそうづくりを楽しんだ経験が、センダンの木の実をジャムや果物に見立て、イチヨウの葉のクレープに包んでみようという思いつきにつながったと思われる。
- ⑫ B児やC児らは、A児がクレープをつくる姿や保育者に受け止めてもらう様子を見て、“自分もつくってみたい” “自分も先生に受け止めてほしい”と感じ、自分なりにイメージに合う木の実を見立てたり様々なクレープをイメージしたりして作り始めたのではないか。
- ⑬ イチヨウの形からクレープをイメージし、つくったり食べたりする楽しさを味わったA児らは、後日もクレープやサンドイッチをつかって遊んでいた。見立てて遊ぶ楽しさを味わいながら、大きさや形の合う2枚の葉を探し、具になる葉っぱや木の枝、木の実などを挟む中で、自然物の色や手触り、形や大きさなどを感じていると思われる。

読み取りのポイント

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㊦ 落ち葉をチケットに見立てる

保育者の言葉に乗り物に乗るにはチケットが必要と感じ、身近で日ごろから親しんでいるイチョウの葉をチケットに見立てて遊びに使う。

㊧ 友達の姿に刺激を受け、自分もやってみようとする

A児がイチョウの葉をチケットにして保育者に渡す姿から、新たな方法に気づき、自分も同じようにしてみようとする。

㊨ 保育者や友達と触れ合い共に過ごす心地よさを感じる

友達と同じようにチケットを渡したり、保育者や友達とつながっているうれしさを感じながら木製遊具で繰り返し遊んだりする。

㊩㊪ 葉の形や色、構造などからクレージュを連想し、葉や木の  
実を使ってクレージュづくりをする

イチョウの扇形の形やクリーム色、巻くと円錐形になる葉のつくりなどからクレージュに似ていると感じ、クレージュづくりを始める。これまでの経験から、木の実をジャムや果物に見立て、クレージュに包み込むことを思いつく。

遊びに使っている木の葉の形や木の葉を丸めると円錐になることなどを感じ取る経験は、ものの形やつくり、平面や立体などの感覚を豊かにしていく。

㊫ 自分なりにイメージするクレージュをつくったり、保育者に  
受け止めてもらうことを喜んだりする

A児の姿を見て自分なりにイメージしたクレージュをつくり、保育者に伝えて食べてもらったり自分で食べたりするうれしさを味わう。

友達のアイディアに触れ、様々な自然物と関わりながら自分なりにイメージしてつくったものを認めてもらう喜びを感じる。

㊬ 自然物の大きさや形、色や手触りなどを感じながら遊ぶ

楽しかった経験を生かして自ら他のものをつくることを楽しむ中で、イメージに合った形や大きさのものを探したり、探しながら諸感覚を働かせたりする。

健康な心と体

協同性

社会生活との  
関わり

思考力の  
芽生え

自然との関わり・  
生命尊重

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな  
感性と表現



### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

この時期の幼児は、落ち葉や木の実などの自然を始め、身の回りの様々な物に触れて遊ぶ中で、様々な感じ方や発想をする。また、保育者や気に入った友達と一緒に遊ぼうとしたり同じようなことをしようとしたりもする。

保育者や友達と触れ合う楽しさを感じ始めているからこそ、友達がしている楽しそうなことや興味をもったことを遊びに取り入れようとし、そこでは、諸感覚を通じたその幼児なりの多様な関わり方をする。そして、繰り返し関わって遊びながらものとの関わりを深めていくことにより、幼児なりにその大きさや形、特性などを感じたり捉えたりしていくと思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

身近な自然は幼児にとって、その手触りや色、形や大きさなどから見立てがしやすく、自分のイメージとぴったり合うものを見付けやすい。そのため、保育者は、幼児が自然物に多様に関わる中で自然物の特性を遊びに取り入れ十分に親しめるように、時期を逃さず環境に取り入れていくことが必要である。

また、幼児の驚きや発想、イメージや動きなどに共感し、保育者自身も感覚を研ぎ澄まして幼児と一緒に遊ぶことが大切であり、その姿は周りの幼児の気付きや意欲にもつながっていく。



実践事例

A児は毎日のように繰り返し、広告を丸めて作った20cmくらいの棒を貼ったりつないだりして遊んでいた。

ある日、A児は⑦棒を1本とってはセロファンテープで貼ってつなぐことを繰り返していた。自分の座っていたところから机の端まで④5本つなげて貼ると、つなげた棒を持ち上げて保育者に「見て、こんなに長いよ」と言った。保育者が「Aちゃんの長いね！どれくらい長いかな？」と言うと、⑨A児はそれを立てて手に持って立ちあがり「こんなに長いよ」と言った。保育者が「すごいね！Aちゃんの背の高さと同じくらいだね」と驚きながら言うと、⑩棒を自分の前に手に持って立てて笑顔でうれしそうにその棒を見た。

B児はA児と保育者のやりとりを見て、⑪「ぼくもAちゃんみたいにする」と言って製作コーナーへ行き、棒をつなぎ始めた。⑫棒を5本つなぐと、B児はそれを手に持って立ち、「ぼくも同じくらい」とうれしそうに自分の前に立てた。保育者は「BちゃんのもAちゃんと同じくらい長いね」と言葉をかけた。それを見てA児が⑬「どっちが長い？」と言ってB児の棒の側に差し出した。⑭B児が「同じくらい！」とびっくりしたように言い、A児も「同じくらいだね」と言って二人は顔を見合わせてにっこり微笑んだ。近くにいた保育者に「見て、同じくらいだった」とうれしそうに棒を見せた。「同じくらいだね。うれしいね。AちゃんとBちゃん仲良しさんだね」と言葉をかけてうれしさに共感した。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児は自分で思うようにセロファンテープで貼ったりつなげたりできるうれしさから、広告棒をつないで遊ぶことを楽しんでいたのだと思われる。
- ① 自分が座っていたところから、机の上に広告棒を置きながら貼り、机の端まで5本貼ると、棒が思ったように長くなったことを感じ、うれしくなって棒を保育者に見せたくなったのだと思われる。
- ⑦ A児は保育者に「どれくらい長いかな？」と聞かれ、長さを見せようと立ち上がって自分の前に棒を立てているのだろう。
- ⑨ A児が笑顔でうれしそうにその棒を立てて見たのは、保育者が「Aちゃんの背の高さと同じくらいだね」と言葉をかけたことで、自分の背の高さと比較して、同じくらい長いということを実感したのではないか。
- ⑩ A児とB児は好きな遊びが同じことから互いに気になるようになってきていた。B児はそんなA児が持っていた棒だからこそ同じ物がほしくなったのではないか。
- ⑫ B児はA児の持っていた棒と同じ本数で作ってきた。これまでもB児は好きなブロックで遊ぶ中で友達が使っている部品を見て、同じ部品をほしがったり同じような物を作ったりしていた。ほしい物やいいなと思う物はよく見ている。B児はA児が持っていた棒を見て、大体4、5本つなげれば同じくらいになると感じて作ったのではないか。
- ⑬ A児が「どっちが長い？」とB児の棒の側に差し出して並べたのは、長さだけを比べようとしたわけではなく、B児が自分をまねして作ったことがうれしくて、棒を近くに寄せて比べてみたくなったからではないか。同じような棒ができたことが、触れ合うきっかけになっているのだろう。
- ⑭ A児とB児にとっての「同じくらい」は長さがぴったりで同じということではなく、気になる友達と同じくらいになったうれしさから出た言葉ではないかと思われる。またそのうれしさを保育者に伝えたくなり、見せたのではないか。

読み取りのポイント

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㊦ 繰り返ししたいことをして遊ぶ

毎日同じように使いたい材料がある安心感やできたものを受け止めてくれる保育者との信頼関係をもとにしたい遊びを楽しんでいる。

㊧ 自分の思ったように長くなったうれしさを表わす

5本つなぐと、棒が思ったように長くなり、うれしい気持ちを保育者に「こんなに長いよ」と表現して伝えている。

長くしたいと思い、広告を丸めた棒を5本貼ってつなぎ、思うように長くなったことを感じている。

㊨ 長さを見せようと、立ち上がって自分の前に立てる

保育者に「どれぐらい長い？」と聞かれ、長さを見せようと、立ち上がって自分の前に立てている。

㊩ 自分の背の高さと比較する

保育者がA児の背の高さと同じぐらいと言ったことで、自分の背と比べ同じぐらい長いということを実感している。

㊪ 気になる友達と同じ物をほしくなる

B児は気になるA児が持っていた棒と同じ物がほしくなった。

㊫ 同じ物を同じ数使って作ると、同じような長さの物ができると感じる

同じ長さの棒を作るには同じぐらいの数つなげたらいいと、感覚的に捉えている。

㊬ 気になる友達との触れ合いを心地よく感じる

A児はB児が自分と同じような棒を作ったのを見てうれしくなり、棒を側に差し出し比べてみている。

㊭ 気になる友達と同じようにできたうれしさを伝える

A児もB児も同じぐらいの長さの棒ができたことがうれしくなり、言葉にしている。

自分が気に入っているものと同じようなものをうれしそうに友達が作ったり持ったりしていることが、気になる友達との触れ合いを心地よく感じるきっかけになっている。

健康な心と体

自立心

協同性

思考力の  
芽生え

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな  
感性と表現



### 必要感に基づく体験を通した数量などへの関心・感覚の育ち

繰り返し広告を丸めた棒をつないで遊ぶ中で、A児は棒を長くしたいという思いをもち、5本貼って思うように長くなると、「こんなに長いよ」と言ってうれしさを表わしている。また、棒の長さを自分の背の高さと比較して捉えることで、長さをより実感していると思われる。幼児は、自分のしたいように自由につないだり、長くしたりして繰り返し遊びを楽しむ中で、長さ、数などを自分なりに捉え、数量などに対する感覚を豊かにしていくと思われる。

また、友達のしていることや持っているものに興味をもったり、同じものがほしいと感じたりすることが、友達が使っている物の数や形などを幼児がよく見たり捉えたりすることにつながっていくと思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

自由につないだり長くしたりするなど、したいことを繰り返し十分に楽しみ、自分なりの思いで遊ぶことができるように扱いやすい材料や場を用意することが必要である。そして、保育者は幼児が楽しんでいることやうれしい気持ちを読み取り、受け止めることが大切である。また、長さを感じる、比べるなど感覚的にしていることを「どれぐらい長いかな」「〇〇ぐらいになったね」と、より長さを実感できるような分かりやすい言葉を使って表したりうれしさに共感したりすることが大切である。

“同じような物がほしい”“同じことがしたい”と周りの友達に興味をもち始めているときにはその思いが満たされるような材料の数量や置き場所などの工夫が必要である。幼児が感じている“同じ”“一緒”などのうれしさや心地よさに寄り添い受け止める援助が大切である。



3期(ねらい)「自分なりの思いをもってしたい遊びを楽しみながら、気になる友達と触れ合って遊ぶ心地よさを感じる」

実践事例

A児、B児はやわらかい積み木で囲ってあるところに二人で入り、積み木を次々に運んでいた。保育者が「何か素敵なものができてきたね」と言うと、⑦A児は「かっこいいおうちなんだ」と言い、B児も「かっこいいおうちなんだ」と笑いながら言った。A児はうちの入り口の両側2か所に積み木を積んでいった。それから、A児は「屋根作ろう」とつぶやいて、板積み木を持ってきて、少し高さの違う2か所の積み木の上に載せた。A児は⑧板が斜めに傾いているのを見て何か考えているような表情になった。それから、A児は立方体の積み木を持ってきて低い方に載せようとした。⑨A児は保育者に「ここ、持ってて」と言って、屋根にした板を持たせた。保育者が積み木を載せやすいように板の端を持ちあげると、⑩A児は積み木を低い方に載せた。今度は、反対側に板積み木が傾いた。A児は前から見て、「積み木持ってこよう」とつぶやいた。また、⑪立方体の積み木を持ってきて、反対側の低い方に載せたが、また傾き、「あれっ？」という表情になった。もう一度積み木を運んできて載せたが、また反対側に傾いた。A児はそれを見て、⑫「うん。これ滑り台屋根！」とにっこりして言った。うちの中で積み木を積んでいた⑬B児も屋根を見て、「滑り台！」と言って笑った。それを聞くと、⑭A児はミニカーを持ってきて、屋根の上を走らせ始めた。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児、B児は、同じような物を作ったり、一緒の場で遊んだりするようになってきた。A児、B児は囲ってある場所に一緒にいる楽しさを感じているから、A児が「かっこいいおうちなんだ」と言ったのを聞いて、B児も「かっこいいおうちなんだ」と同じように言っているのだろう。
- ⑧ A児は板積み木を置き、屋根ができてうれしかったが、まっすぐ横になると思っていた板が水平にはならず、「どうしてかな」と考えているのだろう。
- ⑨ A児は保育者が近くにいてくれることで、安心して手伝ってほしいことを伝えながら、自分の思うようにしているのだろう。
- ⑩⑪ A児は低い方に積み木を置くと板がまっすぐ横になるのではないかと感じているようだ。上に積める大きさには気付いていて立方体を持ってきているが、どの高さの積み木を載せると水平になるのかは気付いていないようだ。立方体の積み木を低い方に何度も積んだが、板は反対の方向に斜めに傾いた。何度も低い方に積み木を積んでみたが、板が斜めに傾くことを、不思議に思っているのだろう。
- ⑫ A児は何回か積み木を積んでいるうちに、斜めに傾いている屋根を見て、普段遊んでいる滑り台みたいだと思い付き、楽しくなったのだろう。
- ⑬ B児は、A児の言葉から斜めに傾いている板を見て、同じようにイメージし、滑り台だと思いき、楽しくなったのだろう。
- ⑭ A児は「滑り台」という言葉から何かを滑らせたくなくなったのだろう。そして、これまでに遊んだことのあるミニカーを思い付き、すぐにミニカーを持ってきて屋根の上を走らせ始めたのだろう。

読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊦ 気になる友達と一緒にいる楽しさを感じ、友達と同じように言う

気になる友達と一緒にいる楽しさを感じ、友達と同じように「かっこいいおうち」という言葉を使う楽しさを感じている。

㊧ 自分の思ったようにならず、どうしてかなと考える

屋根を作ろうと板積み木を置き、「できた」と思ったが、見てみると斜めに傾いていたので、どうしてかなと考えている。

㊨ 保育者がいることで安心して、自分の思うようにしてみる

板を水平になるようにしようと積み木を持ってきて、保育者にしてほしいことを伝えて、思うように置いてみようとしている。

保育者は自分のしてほしいことに応じてくれるという安心感から、して欲しいことを保育者に言って手伝ってもらいながら何回もしてみようとする。

㊩㊪ 予想したようにならず、不思議に思って繰り返す

感覚的に低い方に積み木を置けば、載っている板が水平になると感じ、立方体の積み木を何度も低い方へ積んでいくが、板が水平にならないことを不思議に思っている。

板を水平にしたいと、実際に積み木を選んだり積んだりすることをくり返す中で、形、大小、高低などの感覚が育まれている。

㊫ 形から身近なものをイメージする

斜めに傾いている板から、よく遊んでいる滑り台みたいだと思いついて、言葉にして表す。

㊬ 友達の言葉を聞いて、同じようにイメージする

友達の作った屋根を見たり、言った言葉を聞いたりして、よく遊ぶ滑り台が同じように思い浮かび楽しくなって同じように言う。

㊭ 新しい遊び方を思い付き、やってみようとする

滑り台が思い浮かび、「滑り台屋根」の上で身近にあったミニカーを滑らそうとしている。

健康な心と体

自立心

協同性

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現



### 必要感に基づく体験を通した数量などへの関心・感覚の育ち

A児は、積み木のうちの入り口に屋根を作りたい気持ちから、渡した板を水平にしようとして、立方体の積み木を運んでは低い方に積んでいった。積み木が低い方に必要であることは感じていたが、どの高さの積み木を上を積み上げれば水平になるのかまでは意識せず、立方体の積み木を運んでいると思われる。幼児はこのように遊ぶ中で、積み木の高さを揃えようと、自分の手で何回も積んだり、自分の目で見て確認したりしている。こうした経験を通して、大きさ、形、高さなどを感じ取っていくと考えられる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

幼児が自分の思うように積み木を積んだり確認したりして、繰り返し取り組む時間や場を十分保障するようにしたい。また、新たな遊びを思い付き、しようとする時に、遊具や材料等をすぐに使えるようにしておくことが大切である。

保育者は、幼児が安心して自分の思うようにして試みることができるように、幼児の求めに応じいつでも手助けしたり、幼児が不思議に思ったり、大きさ、形、高さなどを自分で感じたりしていることを感じ取りながら見守ったりすることが大切である。

また、気になる友達と同じ場にいる心地よさを感じながら、それぞれがしたいことをする中で、友達のしていることを見たり聞いたりして友達とつながっているうれしさを感じられるように保育者が気にして見守ったり、イメージや思いを受け止めながら関わったりしていくことが大切である。



3年保育3歳児(8) 11月 『かえるさんへ』って書いて。『大好きだよ』って書いて」  
3期〈ねらい〉「気に入った友達や先生と触れ合って遊ぶ心地よさを感じる」

波線：読み  
取りの要素

### 実践事例

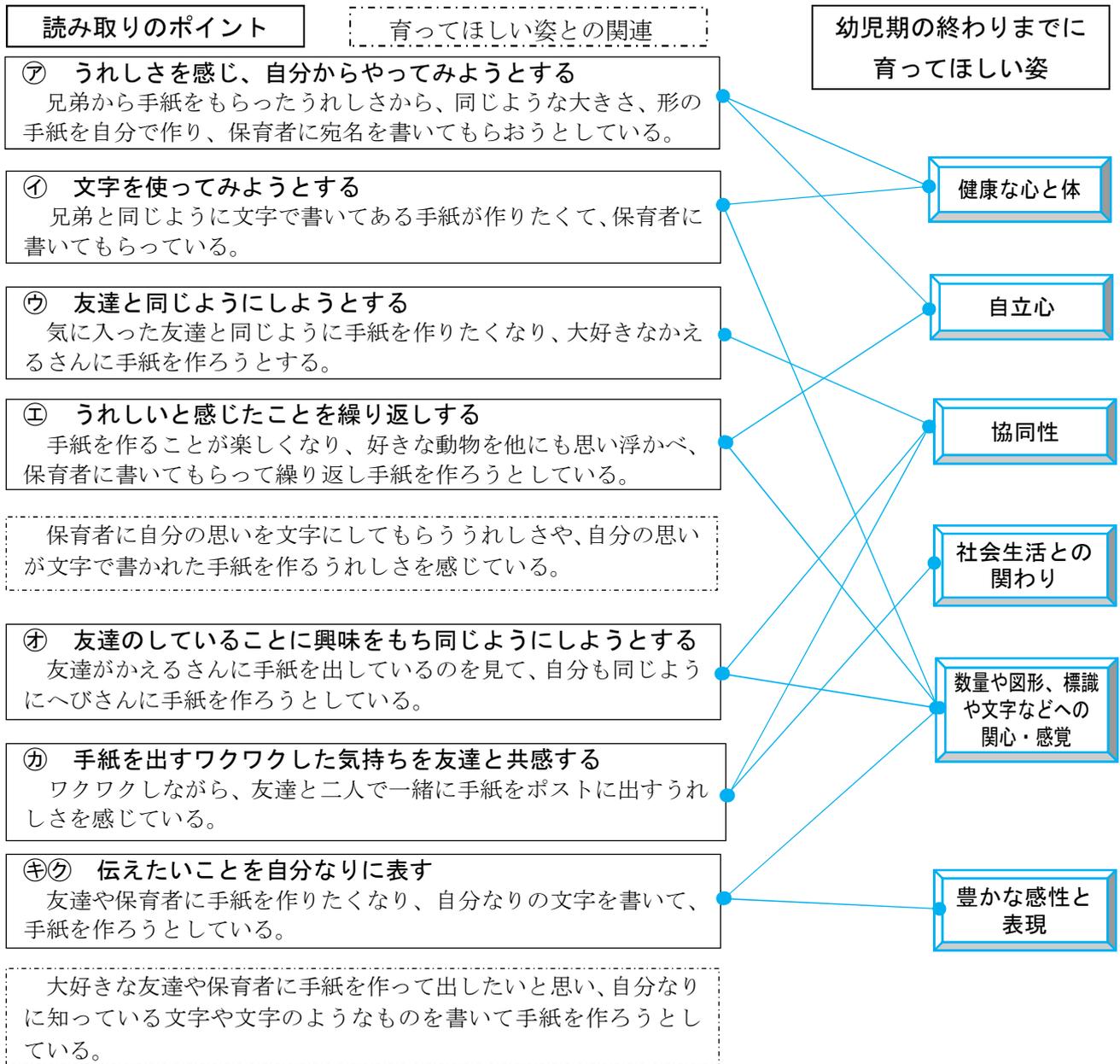
年長児が「郵便です。先生！Aちゃん！」  
と言って学級の友達が書いた手紙を配達  
しに来た。保育者は『先生大好きだよ』  
って書いてある。うれしい」と言って手紙  
を読んだ。A児には年上の兄弟からだっ  
た。A児が「読んで」と言ったので、『A  
ちゃんへ。どの〇〇(テレビに登場するキ  
ャラクター)がすきですか』だって」と読  
んだ。A児は手紙を見て聞いていたが、読  
み終わると⑦正方形の紙を半分になり、  
『おにいちゃん』って書いて」と言って  
保育者に渡した。保育者が「どの〇〇が好  
きななの？」と聞くと⑧『△△(キャラ  
クターの一つ)です』って書いて」と言い、  
保育者が平仮名で書くと、じっと見てい  
た。それを見ていたB児は、「ぼくも書いて  
」と言って紙を持ってきた。保育者が「何  
て書く？」と聞くと⑨『かえるさんへ』  
って書いて。『大好きだよ』って書いて」  
と言ったので保育者が平仮名で書いた。B  
児は⑩「もう1個書く。『かえるさんへ。  
きりんさん、らいおんさんも好きだよ』  
って書いて」と言い、保育者が書くのをにこ  
にこしながら見ていた。今度はA児が⑪  
「ぼくも『へびさん』って書いて」と言っ  
て紙を持ってきたので、保育者が「いいね。  
『へびさん』ね」と言って書いた。A、B  
児は保育者と一緒に年長組のポストに⑫  
「ふふっ」と笑い合っ手紙を入れた。

翌日、B児は保育者に『かえるさんへ。  
とまと、ねぎ、おちゃも好きだよ』って書  
いて」と言った。保育者が書くと、「お手  
紙出す」と言い、保育室にも作っておいた  
ポストに入れに行った。C児は⑬紙にぐに  
やぐにゃの線のようなものを書いた手紙  
をポストに入れ、仲良しのD児に「お手紙  
きたよ」と言った。C児はD児が取り出す  
のをにこにこしながら見ていた。E児は⑭  
「し」「つ」など自分の書ける字とぐにゃ  
ぐにゃを書いて「先生、お手紙だよ」と保  
育者に持ってきた。保育者は「わあ、お手  
紙！うれしい。どんなことが書いてあるの  
かな」と言うと、『先生、大好き』って書  
いてあるよ」と言った。保育者は「うれし  
いよ」と言って、E児をぎゅっと抱きしめ  
た。

### 幼児の姿の読み取り

- ⑦ A児は兄弟から手紙をもらったことがうれしかったので、自分で紙を切り、思うような形(兄弟からもらったのと同じくらいの大きさや形)にしてすぐに返事を作りたかったのだろう。
- ⑧ 兄弟からの手紙が文字で書いてあったので、自分でも文字で書いた手紙が出したいと思ったのだろう。
- ⑨ A児が保育者に手紙を書いてもらっているのを見て、B児は自分もA児と同じように手紙を作りたくなったようだ。誰に出そうかと考えた時に、B児は自分のロッカーのマークで身近で大好きなかえるさんに手紙を出そうと思ったようだ。
- ⑩ 手紙を作るのが楽しくて、他にも好きなものを思い浮かべてかえるさんへもう1枚手紙を作ろうとしているのだろう。
- ⑪ A児は兄弟への手紙を書いてもらったが、B児がかえるさんへの手紙を書いてもらっているのを見て自分も他の誰かに手紙を出したくなったのだろう。
- ⑫ 年長組のポストに手紙を出すワクワクした気持ちを感じているのだろう。二人で一緒に出すこともうれしいのだろう。
- ⑬⑭ C児、E児はB児が手紙を作っているのを見て、仲良しの友達や大好きな先生に手紙を作って出したいくなり、文字のようなものを書いたのだろう。





**必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち**

年長児のしている郵便ごっこの手紙に刺激を受けて、幼児は年長児と同じように文字で書いた手紙を作りたいと感じ、身近で大好きな人や動物に手紙で自分の思いを伝えようとしている。  
 保育者に文字を書いてもらったり、自分なりに文字のようなものを書いたりして手紙を作る中で、思いや気持ちを文字でも伝えることができることを感じ取っていると思われる。

**育ちに必要と思われる環境と援助**

3歳児のこの時期には、他学年の幼児からの手紙や郵便ごっこ等の刺激を受けたり、周りの友達がしていることに興味をもったりして、自分も同じようにしたくなることも多い。同じようにしていても、しようとしていることや文字への興味や関心は一人一人異なっているため、保育者は、幼児一人一人のしたいことにしっかりと向き合いながら、満足できるように根気よく付き合っていくことが必要である。  
 また、幼児がしてみたいと思った時に、すぐに使ったり作ったりすることができるような扱いやすい材料や用具を十分用意しておくことも大切である。

### 実践事例

前日に年長組がリボン棒を手に持って踊っていたのを、夢中になって見ていた幼児がいたので、同じようにリボン棒を作ってショーができるようにと思い、紙テープを数色出しておいた。それまでにも紙テープは出してはいたが、幼児が使いやすいだろうと思われる長さに切って出していた。今回は、自分で長さを決めて切ること、大事に使うことを知ってほしいと思い、切らずに出しておき、「みんな大きくなったから、使いたい長さに切って使ってね」と声をかけておいた。

㊦ A児は、気に入った色の紙テープを思い切り引っ張り出してから切り、残りの紙テープが引っ張り出されたままになっていた。㊧ それを見たB児が「先生！先生が言ったのに、こんなに出していたんだよ」と言い、紙テープをくるくる巻いて戻していた。㊨ C、D、E、F、G、H、I児たちもぐるぐると引っ張り出してから切って、広告棒に付けてリボン棒を作り、うれしそうだった。保育者は、自分で長さに気付いてほしいと思い「これだとどうかなあ、長いと絡まりそう」とつぶやきながら見守った。

踊ろうとすると、上手にテープがひらひらと動かなかったり、からまったりした。㊩ C児は「わたしこのくらいにしておくことにした！ちょっと長すぎかも」と言い、自分のリボン棒の紙テープを手でちぎった。㊪ D児も「わたしもこのくらい！」と言ってテープをちぎった。自分で思うような長さになると、ショーを始めた。

### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素



- ㊦ A児は紙テープを自分で好きなだけ出すことができるようになったことがうれしかったのだろう。年長組のように長くしたい気持ちとぐるぐると出すことも面白くてたくさん出したと思われる。
- ㊧ B児は、引っ張り出されたままの紙テープを見て、保育者の言ったことを思い出し、“使わない分は戻さなくては”と考えたのだろう。
- ㊨ C児たちは、年長児のリボンがひらめく様子や自分で好きなだけ使えるうれしさから長くしたかったのだろう。また、ぐるぐるとどんどん出すことや、友達も同じようにしていることでより楽しくなり、みんなでしているのだと思われる。
- ㊩ C児は実際に作ったりリボン棒を使って踊ってみたら、自分の思うようにひらひらと動かず、踊りにくいと感じ、不都合な長さだったと気付いたのだろう。「このくらいにしておくことにした」の言葉には、自分で納得して短くしようとする気持ちが込められている。また、踊りたいという気持ちからすぐにできる「ちぎる」という方法で短くしたのだろう。
- ㊪ D児の「わたしもこのくらい」の言葉にも、“友達もちぎっている。わたしも使いやすくしよう”と友達のしていることを見たり、使ってみたりしたうえで納得して長さを変えようとする意志が感じられる。

㊦ 自分の思うように遊ぶ

自分で出すことができるので、紙テープをぐるぐると引き出す面白さも感じながら、思うように長くしようと引き出している。

㊧ 言われたことと現状を照らし合わせて考え、行動する

保育者の言った「使いたい長さに切る」ということと、実際にたくさん出ていることを照らし合わせて考えて判断して保育者に伝え、戻している。

㊨ 友達と一緒に自分の思うようにしたいことをする楽しさを感じる

自分の思うように長くでき、友達も同じようにぐるぐる引っ張り出していることで楽しさが増している。

㊩ 実際に踊ってみて、紙テープが思うようにならないことに気づき、短くしようとする

紙テープを長くするのが面白くて作ったが、実際に踊ってみるとうまくいかず、長すぎると気づき、自分で納得して短くしている。また、すぐに踊れるようにちぎるという方法で短くしている。

紙テープを長く付けたが、自分の思うように踊れず、自分が納得できる長さに切ることで、自分にとって程よい長さを感じている。

㊪ 実際にしたり友達のしているのを見たりして、考える

自分で踊ってみたりC児が短くしているのを見たりして、自分なりに考え、納得してテープをちぎっている。

したいようにして遊んでいく中で、自分で気付いたり、考えたりすることは、幼児が納得して新たな考えを生み出そうとする思考力の芽生えにつながる。

健康な心と体

自立心

道徳性・規範意識の芽生え

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い



### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は年長児のリボン棒のように踊りたい、同じようなりボン棒のような物がほしいという思いで動き出している。紙テープが自分で思う長さに引き出せるようになっていたことから、ぐるぐる引き出す面白さを感じ、年長児のように長くして作っている。実際に踊ってみると、“あんなふうに踊りたい”と思っていたようには紙テープがひらひらと動かないことに自分で気づき、納得して短くしている。このように、こうしたいと思って自分で作った物を遊びに使い、自分で長さを考えたり決めたりしながら遊んでいく中で程よい長さや長すぎることなどを感じ取り、数量等の豊かな感覚が育まれていると思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

幼児は気に入った友達と一緒にする楽しさを感じながら、こうしたいという思いをもって遊ぶようになってきている。また、遊びに必要な物を自分たちで作って、気に入った友達と一緒に遊ぶようになってくる。

保育者は、幼児が友達と一緒に自分の思うように作る面白さを感じたり、作った物を遊びに使ってみて自分で気付いたりしていることに寄り添っていきることが大切である。

また、自分で考えたり自分で決めたりして使うことができるような材料や素材の量や出し方をするのが大切である。扱いやすいようにと適当な長さや量等にしておくばかりでなく、自分で実際に使ってみて、納得して自分で決めていくことができるような材料の出し方の工夫をする必要がある。



### 3 3年保育4歳児

3年保育4歳児(10) 5月 「125個」

5期〈ねらい〉「身近な環境に自分から関わり、楽しさや面白さを感じる」

#### 実践事例

⑦畑に実ったスナップエンドウを収穫することを保育者が伝えると「やったー」と喜んだ。畑に行くと、A児は「先生、ここにもあった。こっちにもある」B児は「上の方にあるから抱っこして。全部採るんだ」と収穫し始めた。⑧保育者がかごを用意し、収穫したスナップエンドウを入れられるようにすると「山みたいになってきた」「もっといっぱいになりたい」などと、さらに収穫することを楽しんだ。しばらくすると、A児がスナップエンドウがいっぱいに入った⑨かごを持ちながら「重くなったよ」と満足そうに保育者に言いに来た。すると、⑩B児が一緒にかごを持ち「先生、重くなったよ」とうれしそうに言った。保育者は「本当？先生も持ちたい」と二人のうれしい気持ちを受け止め、かごを持った。「すごい重たいね。いっぱい取れたもんね。でも、何個、取れたんだろうね？」と聞くと、⑪A児が「125個」と元気に答えた。しかし、⑫B児は不思議そうな表情を見せた。保育者が「125個。すごいね」と言うと、B児が⑬「すごいでしょ」とうれしそうにA児の顔を見てほほ笑み、⑭再び収穫し始めた。

#### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ 保育室の隣のスナップエンドウは、保護者が植えてくれたものであったが、幼児たちは普段から成長を見に行き、実が徐々に膨らみ始めていたことを知っていた。収穫できることを喜ぶ姿から“大きくなってきた”と気にかけてたり、“採っていいのかな”と思ったりしていたのではないかと思われる。
- ⑧ 収穫したスナップエンドウを一つのかごに入れることで、幼児にとって収穫した量が一目で分かり、スナップエンドウが山のように増えていく様子を楽しんだり、“もっと採りたい”という思いにつながったりしたと思われる。
- ⑨ A児は、スナップエンドウがたくさん入ったかごを見て、いっぱい収穫したと実感したのだろう。A児は“いっぱい”が“きっと重いだろう”という思いになり、実際にかごを持ち上げて確かめる姿につながったと思われる。
- ⑩ B児がA児と一緒にかごを持ったのは、自分も重さを感じてみたいという興味や関心からであったと思われる。実際に持ったことで、自分も重いと感じ、A児と同じように言ったのだろう。
- ⑪ A児は、かごいっぱいのスナップエンドウを実際に持ち、重いと感じたことで、たくさんあることを実感したのだろう。A児が「125個」と言ったのは、たくさん収穫できたうれしさから、A児にとってのいっぴいを意味していると思われる。
- ⑫ B児は、A児が言った「125個」という数がイメージできず、不思議そうな表情を見せたと思われる。しかし、保育者が「すごいね」と言ったことで、数は分からないが“125個はやっぱりすごいんだ”と思ったのだろう。
- ⑬ 保育者が認めてくれたことで“もっと収穫したい”“もっと、楽しみたい”という思いにつながり、再び収穫し始めたと思われる。

読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊦ 自分たちで収穫できることを喜ぶ

成長を楽しみにしていたスナップエンドウを、自分たちが収穫できることを知り喜ぶ。

㊧ 数や量が増えていく様子を楽しむ

収穫したスナップエンドウが増えていく様子を楽しみながら、さらに収穫することを楽しむ。

㊨ 自分なりに感じた量を重さで感じる

収穫したスナップエンドウがかごいっぱいになったうれしさを、重さで確認しようとし、実感する。

見てたくさんあると感じたものを、実際に持って重いと実感したことで、「たくさん」と「重い」を関連付けて捉えている。

㊩ 友達の思いに共感する

友達と一緒に楽しんだ経験から、友達と同じようにやってみたい、重さを感じてみたいと感じ、実際にやってみて共感する。

㊪ 自分なりに捉えた数を伝えようとする

保育者の質問を聞いて、自分なりに量を数として表し、“たくさん”ということ自分なりの数を使って表現する。

たくさん収穫できた喜びや楽しみ、満足感を表現するために、自分なりの大きな数を使って表現し、数量への感覚を豊かにしている。

㊫ 数の大きさを自分なりに感じる

友達の言葉からいっぱいの数であることを感じる。

㊬ 保育者に認めってもらったことで、より意欲をもって自ら関わる

保育者に認められたことで、もっとスナップエンドウを収穫したいという思いになり、再び集めようとする。

自立心

協同性

自然との関わり・生命尊重

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

保育室の隣にあり、ずっと気になっていたスナップエンドウを収穫できたことは、幼児にとって喜びや満足感を感じることができた経験であった。そのうれしい思いが、保育者に伝えたいという思いにつながり、「たくさん」を重さや具体的な数で表現することにつながった。

「たくさん」という捉えは、一人一人異なるが、量を自分の感覚で捉え、数字や言葉、身振り、動きで表現しようとすることを大切にしていけることが、数量への感覚を養い豊かにしていけることにつながっていくと考えられる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

幼児が喜びや満足感を体験できる感動体験や一緒にその喜びを共感してくれる友達や保育者の存在が必要である。また、保育者の言葉で、「たくさん」「いっぱい」であることを自分なりに重さや数で言い表すことにつながったことから、幼児の数量への感覚を刺激し、引き出していけるような保育者の意図的な援助も必要である。



3年保育4歳児(11) 9月 「お部屋の中には入って来れないよ」

5期(ねらい) 「身近な環境に自分から関わり、楽しさや面白さを感じる」

### 実践事例

A児が、幼稚園に自分で釣ったザリガニを2匹持ってきた。A児が、保育者に⑦「みんなで見たいし、触ってもいいよ」と言ったので、保育者は、ザリガニを大きなたらいに移し、みんなが見たり触れたりできるようにテラスに置いた。⑧入れ替わりたらいの周りには幼児が集まって来た。B児「怖いね」C児「初めて見た」D児「触ってみようかな」E児「ザリガニの背中ぶつぶつしてるよ」などと話をしながら、指一本で触れてみたり、友達が触る姿を見たりしていた。

しばらくして、保育者がたらいの中をのぞくとザリガニが1匹になっていた。「1匹しかないんだけど、みんな知らない？」と聞くと、何人かが遊びの手を止め、たらいの中をのぞきに来た。⑨「ザリガニ逃げちゃったの？こわい～」⑩「早く探さないとザリガニ踏まれちゃうよ」⑪「早く見つけないとAちゃんがかわいそう」⑫「こっちに行ったんじゃないの？」⑬「Fくんがさっき見てたから、聞いてみよう」などと言いながら、みんなで探した。

### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児は、自分で釣ったうれしさからザリガニを“みんなに見てもらいたい”“触らせてあげたい”と思い、保育者に言ったのだろう。
- ⑧ 周りの幼児は、“みんなが集まっている。面白いことがあるのかな?”と思い集まってきた。そして、ザリガニにそれぞれの思いで関わり、思いついたことを言葉にしたと思われる。B児は“ザリガニは怖いもの”というイメージだったのだろう。
- ⑨ 周りが騒いでいる様子を見に来てザリガニがいなくなったことを知り、ザリガニが踏まれぬかと心配したり、A児のことを思いやったりと、思ったことを言葉にしたのだろう。
- ⑩ ザリガニを探すことは、宝さがしの時と同じようなワクワクする感覚を感じたのかもしれない。みんなでザリガニを探しながら、幼児はそれぞれに思いついたことを言葉にしたのだろう。



## 実践事例

④ B児は、一段高くなった保育室の中から、友達が探している姿を不安そうにじっと見ていた。ザリガニが、たらいから少し離れた保育室前の靴箱のざら板の下から出てきた。幼児たちは⑤「見付かって、よかったね」「こんなに動いたんだね」「あと少しでお部屋の中に入っちゃうところだったね」「触ったらたらいに戻してあげないとね」などと、思い思いに言葉にした。⑥ B児は、安心してほっとした表情を見せた。保育者も、それぞれの幼児の気持ちに共感し、「よかったね」と受け止めた。

しばらくすると、保育室の扉に進入禁止の標識がかいてある紙が8枚も貼ってあった。⑦ B児が「ザリガニが逃げて、もう大丈夫だよ。お部屋の中には入って来れないよ」とうれしそうに話した。保育者は「いい考えだね。進入禁止のマークだから、ザリガニも入って来れないね。」と、⑧笑顔で受け止めると、再び進入禁止の標識を描き始めた。

## 幼児の姿の読み取り

- ④ B児は、怖さから保育室から出ることができず、早く見付けてほしかったのだろう。
- ⑤ ザリガニへの思いは一人一人違っていても、ザリガニが見付かったことで、どの幼児もほっとした気持ちになり、思ったことをそれぞれが言葉にしていると思われる。
- ⑥ B児のほっとした表情から、“見付かってよかった”“もう大丈夫”という気持ちがうかがえる。
- ⑦ B児の言葉からは“怖いから保育室に絶対入ってほしくない”という強い思いから、自分の知っている進入禁止の標識をかいて貼ったと思われる。
- ⑧ 保育者がB児の発想に面白さを感じ受け止めたことで、B児は自信をもち、もったかこうと思ったのだろう。



読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊦ 自分が経験したことやうれしさを伝える

自分が釣ったといううれしさを感じ、ザリガニをみんなに見せたい思いを保育者に言った。

㊧ 面白そうなことに関わろうとする

“みんなが集まっている。面白そう”という思いでのぞきに来て、ザリガニに自分なりに関わり、思いついたことを言葉で表す。

㊨ 何かが起きたことを知り、自分の感じたことを言葉で表わす

保育者の言葉を聞いて大変なことが起きたことを知り、ザリガニのことを心配したり怖がったりなどと自分なりに感じたことを言葉にしている。

㊩ みんなと一緒に探す

ザリガニを見付けたいという思いをもって、みんなで思いついたことを言葉にしながらか探すことを楽しむ。

㊪ 自分の思いを友達に託す

怖くて自分ではどうすることもできないが、安全と思われる保育室の中からザリガニを友達に見付けてもらうのを待つ。

㊫㊬ 自分の思いを言葉や表情で表し友達と思いを共有する

ザリガニが見付かったことを喜び、自分なりの言葉で保育者や友達に伝えながら、うれしさを共有したり、ザリガニをもっと大切にしようとしたり見付かってほっとしたりする。

いなくなったザリガニをみんなで探したり見付けたりしたことでより親しみがわき、生き物への関心が高まっている。そして大切にしようという思いをもち、生命尊重や道德性の芽生えにつながっている。

㊭㊮ 自分の思いを標識を使って表す

ザリガニが保育室に入ってほしくないという思いから、自分の知っている標識を使って、表わそうとしている。

ザリガニが自分の近くに来てほしくないという強い思いの中で、自分の知っている標識を使おうとしている。

自立心

協同性

社会生活との関わり

道德性・規範意識の芽生え

自然との関わり・生命尊重

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

この時期の幼児は、いろいろなことを感じたり思いをもったりしながら遊んでいるが、言葉や文字など分かりやすい方法で自由に表現する力はまだまだ個人差が大きい。B児にとってザリガニが逃げたことで感じた恐怖感は、とても大きかったのだろう。この事例では、ザリガニに絶対保育室に入ってきてほしくない思いから、何か良い方法はないか考え、進入禁止の標識を使ったと思われる。このような経験をする中で、自分なりに周りに伝える方法を考え表そうとする姿につながっていくと思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

幼児の小動物への思いや表し方は一人一人異なり、関われることをうれしいと感じる幼児もいれば、怖いと思う幼児もいる。そこで、保育者はそれぞれの幼児に応じて思いや表し方を受け止めていく必要がある。

また、幼児が興味や関心をもったことに対し、保育者自身も面白いと感じ一緒に楽しんだり、怖がるときには一緒に怖がったりするなど幼児の思いを受け止めていくことが大切である。

このように保育者は、それぞれの幼児がどのように感じたり考えたりしているのかを理解しようとする気持ちをもって関わるのが、幼児の様々な思いを表す姿につながると考えられる。



実践事例

C児は、恐竜の人形で遊ぶことが好きで、この日も⑦種類の異なる恐竜の人形を抱きかかえられるだけ持ってくる、床の上に並べて、④「大丈夫だ、行け!」「重いなあ」「もう少しだ」などと言い、人形を動かしながら遊んでいた。

ふと、目の前の恐竜を⑧一つ一つ指さしながら「1、2、3…」と声に出して数え始める。ふちから順番に数えていくものの、恐竜の人形は並べてあるわけではないため、指はあちこち行ったり来たりしている。「…8」で数え終わると、⑨次は、一つ一つ腕の中に抱えながら「1、2、3…」と数え始める。8体全て抱えたところで「…8」となり、少しうれしそうな表情で、腕に抱えた恐竜を、⑩再度、床の上に向きや場所を考えながら立たせていく。そして、全部床に立たせると自分が指揮官になったかのように進む方向を

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

⑦ C児は大好きな恐竜の人形を自分で保育室の棚のかごから恐竜を持ってきては、好きなように動かして遊ぶことを繰り返す日が続いていた。この日も恐竜の種類を選んで、抱きかかえられるだけ持ってきて遊び始める姿から、恐竜の遊具を使いたいときに使える安心感、それを受け止めてくれる保育者がいる安心感を得ていると思われる。

④ 友達との関わりでは、あまり自分の思いやイメージを表すことはないC児だが、大好きな恐竜の仲間だからこそ、自分の事のように恐竜に思いを重ねながら、「重いなあ、手伝ってよ」「よいしょ!もう少しだ」など、それぞれの恐竜の思いを言葉で表現したり、恐竜をイメージに合わせて動かしたり、恐竜同士の言葉のやりとりを楽しんだりしていたと思われる。

⑦⑨ これまでにC児が恐竜の数を数えることは見られなかった。いつもたくさんの恐竜を使えるとは限らない状況の中、この日は、抱きかかえられるだけ持ってきたたくさんの恐竜を使って遊べることのうれしさ、今遊んでいる一つ一つ違う種類の恐竜の仲間が全部で何体あるのか知りたいという気持ちに動かされて恐竜の数を数え始めたと思われる。

また、声に出して数えながら、一つ一つを指さしたり抱きかかえたりする姿は、身体感覚を伴った動きであり、その動きは大好きな恐竜を見落とさなくきちんと数えたいという思いから引き出されている。

⑨ C児がもう一度人形を腕に抱きかかえながら数えようとしたのは、床に置いてある状態では、指があちこちを指すことになり、これでは正確に数えられていないのではないかとC児なりに気づき、より確かな方法で数えようとしたためと思われる。

⑩ 方法を変えても結果が同じだったことから、大好きな恐竜が8体あることを確信し、満足することができたため、再び床の上に向きや場所を考えながら恐竜を並べ、イメージをもって遊び始めたと思われる。

### 実践事例

指さし、恐竜に向けて㊦  
「8匹の力を合わせて！」と言って、また恐竜を動かしながら遊び始める。

### 幼児の姿の読み取り

㊦ 「8匹の力を合わせて！」という言葉から、C児は8体の恐竜一体一体がそれぞれ異なるものであり、「8匹」を仲間と捉え、「8匹の力」を仲間が協力した大きな力と捉えていたと思われる。恐竜一体一体に対して思い入れがあるからその姿である。

### 読み取りのポイント

### 育ってほしい姿との関連

### 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

#### ㊦ 安心して自分の好きな遊具で遊ぶ

保育者を心のよりどころに、安心して使いたいものを使うことができ、じっくりと自分の遊びを楽しんでいる。

#### ㊧ イメージしたことを人形の動きや言葉として表す

人形に託した動きや言葉は、自分の思いや考えなどを実際に表現したり言葉で伝えたりする体験へとつながるであろう。

#### ㊨ 大好きな遊具がいくつあるのか知りたいと思う

たくさん使えるうれしさから、いくつあるのか知りたいという気持ちが芽生え、「たくさん」を具体的な数に置き換えようとする。

#### ㊩ 数える声のリズムや速さに合わせて指で指し示す

大好きな恐竜を見落としなく数えたい思いから、声に出して数え、そのリズムや速さに合わせ、一つ一つを指さしながら数える。

#### ㊩㊦ よりよい方法を考えて試してみようとする

1回目の数え方では正確ではないかもしれないと感じ、確かめたい気持ちから、新たな数え方を試そうとする。

自分にとって大事な物がいくつあるのか知りたいという願いから新たな方法を考えようとすることは、幼児が新たな考えを生ま出そうとする思考力の芽生えにつながる。

#### ㊰ 考えた方法が予想通りの結果となりうれしさを感じる

1回目と結果が同じだったことで恐竜が8体あると確信し、満足感を得ている。そのことが恐竜への思い入れをさらに強くし、具体的なイメージをもって遊び始める姿となっている。

#### ㊱ 数を量（力の大きさ）として捉える

8匹の恐竜をそれぞれ異なる恐竜の仲間と感じ、「8」を単なる数ではなく、集まった仲間の大きな力という集合数として捉える。

数えた「8」という数を大好きな恐竜の仲間の力の量と捉え、数量への親しみを感じ、感覚を豊かにしている。

健康な心と体

自立心

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は大好きなものに対し強い思い入れをもつと、それらと一体化して遊びの世界に没頭し、自分の思いを言葉や動きで表現しながら心ゆくまで楽しんだり満足感を味わったりする。その表現の一つとして、大好きなものを数えてみようとしたり、正確な数にもこだわり、数え方を考えたりする。事例の「8匹で力を合わせて」という言葉のように、幼児は一つ一つの数を具体物と重ねて親しみをもって捉え、こうした意味のある数の集まりをまとまりのある量として捉えていることが分かる。集合数を幼児なりに自分の感覚を通して実感を伴って捉えていく過程の姿と考えられる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

上記下線の幼児の数量の捉え方は、幼児がじっくりものに関わり遊ぶ経験を積み重ねるなかで育まれていく。大好きなものを自分の中に取り込み、自分のペースで遊ぶことができる時間と空間に加え保育者の温かいまなざしが必要である。また、このような幼児の気づきや試してみようとする姿などを受け止めたり、機会を見つけて周りの幼児にも伝えたりする保育者の援助も必要であろう。

実践事例

公園にどんぐり拾いに出かけた。幼児たちはどんぐりを拾い、  
⑦保育者に「見て見て」「袋縛って」と自分の袋がいっぱいになったことを伝えた。

翌日、保育者が拾ったどんぐりをかごに入れておくと、A児、B児はカップを持ってきて、その中に⑧どんぐりを一つずつつまみながら割れていないものや、汚れていないものを選んで入れていた。

二人はカップに入れながら⑨「これは真っ黒どんぐり」「振ると音がする、中に赤ちゃんが入ってるからお母さんだね」「帽子のもあった、おうち作ってあげようよ」とカップをおうちに見立て、どんぐりを入れようとした。⑩A児が「もっとカップが欲しい」と言ったので、保育者がいくつかカップを用意すると、⑪「これは大きい」「これは小さいから赤ちゃん」と言いながらカップに分け始めた。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

⑦ 幼児たちは自分でどんぐりを見つけたうれしさから自分の袋にどんどん入れていた。また、どんぐりが袋にいっぱい集まったことを喜び、全部持ち帰りたい思いから保育者に縛ってほしいと言ったのだろう。

⑧ 翌日、保育者がどんぐりをかごに入れ机の上に置いておいたことで、公園とは違い、改めて落ち着いて見ることができ、A児、B児はたくさんある中、一つずつどんぐりをつまみながらきれいそうなものを選んだと思われる。

⑨ A児、B児はどんぐりの色や帽子などの一つの違いに気付き、どんぐりを赤ちゃんやお母さんなどに見立てたことを自分なりに表現している。また、見立てたことでおうちを作ってあげたいと思ったのだろう。

⑩ A児は、いろいろな形や大きさのどんぐりをそれぞれ分けるにはカップが足りないと思い、「もっとカップが欲しい」と言ったのだろう。

⑪ 保育者にカップをもらったことでより分けやすくなり、A児、B児は様々な大きさのどんぐりがあることに気付き分け始めたのだろう。また、一つずつ持ったことで、持った感覚から重さや大きさを感じたり見比べたりしていたと思われる。様々などんぐりがあることに気付いたA児、B児は、自分たちで発見したうれしさから大ききごとに分けることを楽しんだのだろう。

## 実践事例

そこに来たC児がA児、B児が分けた内の一つのカップを見て㊦丸いどんぐりと細いどんぐりがあることに気づき「これ形が違わない？」と図鑑を持って来て見比べ始めた。C児はクヌギのページを開き、㊧「これ似てるね」とA児、B児に言うと、二人は「本当だ」とうれしそうに言った。そしてC児は保育者に「これどんぐりじゃなくてクヌギだよ」と喜んだ様子でクヌギと図鑑を見せに来た。A児、B児は別のどんぐりも㊨図鑑と見比べ、「あ、これはマテバシイ」「これはコナラだった」などつぶやきながら分け、図鑑の文字を見ながらそれぞれの名前を小さな紙に書いてカップにはった。

## 幼児の姿の読み取り

- ㊦ C児はA児、B児がどんぐりを特徴ごとに分けたことで、違いが分かりやすかったのだろう。また、同じ大きさのどんぐりが入ったカップの中を見て、一つ一つを比べたことで、大きさは同じでも丸い、細いなど形が様々であることに気付いたのでと思われる。そこで、C児は図鑑を取りに行き、形の違うどんぐりが載っていないかを探したのだろう。
- ㊧ C児は図鑑の中に同じものがあるのを見付け、A児、B児に伝えた。A児、B児がどんぐりには種類があることを知りうれしそうにしている様子を見て、さらに保育者にも伝えたくなくなったのだろう。
- ㊨ A児、B児はC児を見て、同じように種類に分けた。また、それぞれの名前が分かったうれしさから、カップに名前を書きたくなったのだろう。



読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊦ 興味をもっていっぱい集めることを喜ぶ

どんぐりが袋にいっぱい集まったことで、たくさん集まったと感じる。

㊧ 自分の気に入ったものを選ぶ

机の上に見やすく置いてあるどんぐりを落ち着いて見ることで、たくさんある中から気に入ったものを選び出している。

㊨ 気付いたことやイメージしたことを言葉で表す

一つ一つのどんぐりの特徴に気付いたり、そのことからイメージを膨らませて人や物に見立てたりしたことを言葉にする。

㊩㊪ 関心をもって見たり触ったりし、違いに気付く

どんぐりに家を作ってあげたいという気持ちから、一つ一つのどんぐりに触れながらじっくり見ることで、色や大きさなど様々な違いに気づき、比べながらカップに分けることを楽しむ。

気に入ったものが欲しい、分けたいという思いが一つ一つのどんぐりを興味をもって見比べることにつながり、形や大きさの違いを感じ取りながら自分なりの基準でカップに分けている。

㊫ 友達のしていることを見て、自分も関わろうとする

友達がしていることに興味をもって自分なりに気付いたことを伝えたり、経験から図鑑で調べたりして、より興味を深めている。

㊬ 保育者や友達と気づきを共有する

クヌギだと分かった喜びを保育者や友達にも分かってほしい、共有したいという思いから伝えようとする。

㊭ 仲間ごとに分け名前を文字で表す

どのどんぐりの仲間なのかが分かったうれしさから文字に書いて表し、表示を付けている。

どんぐりには種類や名前があることを知り、仲間ごとに表示を付けて分かりやすくする。

自立心

協同性

思考力の芽生え

自然との関わり・生命尊重

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は自分の興味をもったものが欲しいと思うと集めようとする。事例の幼児は、はじめは「みんな同じ」と見ていたが、自分の気に入ったものを集めるうちに、特徴や違いごとに分けるようになった。また、一つ一つを比べたり手で持ったりすることで、形や大きさを捉えながら、自分なりの基準で分けたり、それによって種類が違うということにも気付くことにつながったと思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

自然物は形、大きさ、重さなどが様々であり、その幼児の捉え方で自由に関わることができる。保育者が周りの自然物に関心を寄せて、幼児が触れることができるように環境の中に取り入れていくことが大切である。幼児が上記下線のような育ちにつながるためには、友達とじっくり比べたり調べたりできるよう、その幼児だけの空間を確保していくことも必要であろう。



3年保育4歳児(14) 11月 「誰が植えたか分かるように名前を書いたら？」

6期〈ねらい〉「自分の思いを出しながら、友達と関わって遊ぶうれしさを感じる」

### 実践事例

A児はじめ6、7人の幼児が、園庭に落ちていた⑦サツマイモのつるに小さな芋が付いているのを見付け、「大きくなるから植えよう」と砂場に植え始めた。

⑧B児は、砂場に植えているのを見て、「花壇に植えた方がいいんじゃない？」と言った。それを聞いたA児らは、砂場から芋のつるを掘り出した。すると、A児が⑨「先生！ちょっと大きくなって！」と言った。「えっ！本当？植えておいたから大きくなったこと？」と驚くと、⑩A児が「土の中に入れたから大きくなったんだよ」と興奮気味に言った。

保育者が「みんなのお芋が大きくなるの楽しみだね」と言うと、⑪B児らが「明日も来よう」「明日、ここで集まるって約束ね」と言った。すると、花壇の芋のつるをじっと見たB児が⑫「誰が植えたか名前を書いたら？」と言った。A児が「字書けないもん」と言うと、⑬B児は「Cちゃんなら書けるかも。Cちゃん、みんなの字書いて」とC児に頼んだ。⑭C児は、「いいよ。私書けるから」と答えた。

### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ 芋掘りを経験したA児らは、芋のつるに大きな芋ができていたことを思い出したのだろう。つるに小さな芋が付いているのを見付け、「土に植えたら芋が大きくなる」と思い、砂場に植えたのだろう。クラスみんなで芋掘りをしたうれしい経験が、遊びの中でも芋のつるを植えたい思いにつながったと思われる。
- ⑧ B児は「砂場より花壇の方がいい」と思い、言葉にしたのではないか。
- ⑨ A児らの言った言葉は、「さつま芋が大きくなってほしい」という期待から本当に大きくなったように見え、そのうれしさや驚きを保育者や周りの友達に伝えたいと思ったのだろう。
- ⑩ B児らの言葉には、「みんなで植えたから、明日もみんなで見たい」という思いが込められている。
- ⑪ 「自分たちのお芋」という思いから名前を書くことを思いついたのだろう。
- ⑫ B児は自分たちができなくても「C児なら書ける」、“C児に頼めばできる”と考えたと思われる。
- ⑬ C児は、自分が文字を書くことができ、B児らから頼りにされたうれしさから、「やってあげたい」と思い、「いいよ」と言ったのだろう。



## 実践事例

A児、C児は、⑦紙とペン、割りばしなど必要な物を保育室に取りに行き花壇に戻ると、早速みんなの名前を書き始めた。C児は、A児の名前を書こうとするが、⑧「Aちゃんの字、名札見ないと書けない」と言う。すると、A児が、C児の目の前で名札が見やすいようにスモックを引っ張り、⑨「ほら、これ」と名札を見せた。C児はA児の名札をじっと見ては、白い紙にゆっくりと書いた。

名前が書かれた紙が出来上がると、A児は満足そうにその紙を割りばしに貼り、花壇に立てた。他の幼児も自分の名前が書かれているのをうれしそうに見ていた。

## 幼児の姿の読み取り

- ⑦ A児、C児は立札を作ることを今までの栽培物の立札やごっこ遊びでの看板作りから知っていたのだろう。そのため、立札を作るために必要な材料が分かり、自分たちで持ってきたと思われる。
- ⑧ C児は書けない文字もあったが、“頼られたから、書いてあげたい”と思い、見て書くことに気づき、「Aちゃんの名札見ないと書けない」と言ったと思われる。
- ⑨ A児は自分のために書こうとしてくれているC児の思いが分かり、自分の名札をC児が見やすいように見せたのだろう。



読み取りのポイント

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㊦ 楽しかった感動体験を遊びに取り入れる

芋のつるを見つけたことをきっかけに、楽しかった芋掘りを思い出し、芋が大きくなることを期待して、友達と一緒につるを植えることを楽しむ。

今までの経験を基に自分なりに予測し期待しながら、友達と一緒に自然環境に関わっている。

① 自分たちの思いを実現するために適した場を考える

芋を育てたい思いから、砂場はみんなが使う場所ということに気付き、育てるためにはどこがいいか考えている。

㊦㊧ うれしさや感動を言葉で伝え、保育者や友達と共感する

芋が大きくなったうれしさや驚き、感動を思わず保育者や友達に伝える。感動や喜びを友達と共有しようと言葉で伝え合っている。

㊦㊧ 「自分たちの物」だと分かるようにしたい

自分たちが植えた芋のつるであることが分かるように、名前を書きたいと思う。

「自分たちの物」という思いから、「名前を書けばよい」と考え、文字を使おうとする。

㊦ 友達の力を借りて、実現しようとする

日ごろの様子から“C児なら文字が書ける”と友達のことが分かり、“書いてもらいたい”思いから頼み書いてもらおうとする。

㊦ 必要な物が分かり、自分たちで作ろうとする

立札を作るために必要な材料を分かり、自分たちで作ろうとする。

㊦㊧㊨ 頼られるうれしさを感じ、できることをしてあげようとする

友達に頼られるうれしさを感じ、友達の代わりに書いたり、書けない文字も書いてあげようと考えたりしている。また、友達のために文字が分かるよう名札を見やすくしている。

㊦ 書きたい思いから、自分なりの方法で見本を見ながら文字を書こうとする

文字を書きたい思いから、名札を見本にして書くとよいことに気付き、書こうとする。

自立心

協同性

道徳性・規範意識の芽生え

社会生活との関わり

思考力の芽生え

自然との関わり・生命尊重

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

### 必要感に基づく体験を通した数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は感動したり楽しかったりした共通体験を、その後の遊びに取り入れ、さらに楽しさを共有していく。事例では、自分たちが植えたつるについての小さな芋が大きくなることを期待しながら育てようとしている。また、植えた芋が“自分たちの物”という思いから、名前を書いておこうと考え、「文字」を使おうとしている。また、文字を書きたいという思いから、生活の中で目にする文字を探し書こうとしており、遊びや生活の中で文字に親しむ経験が必要な時に文字を活用する姿につながっていくと考えられる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

幼児が感動した体験を遊びに取り入れようとする姿を受け止め、その中で幼児の発想が実現できるように援助したり、幼児と一緒に楽しんだりする保育者の存在が必要である。

また、頼りにされたり共感してもらえたりする友達の存在は、更に興味や関心を持ったり取り組んだりする姿につながるため、大切な環境であると考えられる。そのためには、周りの幼児との温かいつながりを促すような保育者の援助も必要であろう。



実践事例

⑦「先生、ちょっと来て」とA児、B児に呼ばれたので行ってみると、A児が園庭に埋まっている石を指さし⑧「恐竜の化石があった」と興奮気味に言った。保育者は「恐竜の化石？それは大発見だよ！」と同じように興奮気味に答えると、B児が「ぼく、恐竜の化石掘りたい」と言うので「いいね。先生も掘ってみたい」と同意した。そして、化石掘りをしたことがあるB児に必要な物を聞き、保育者が近くに落ちていた木の棒と小さなほうきを準備すると、さっそく掘り始めた。保育者も一緒に掘り、やっと一つ掘り出すことができたので「化石博士。これは何という名前の恐竜の骨ですか」と聞くと、A児が「これは、ティラノザウルスです。⑨とがっているから歯の化石です」と言った。B児は「ティラノザウルスは肉食だから、歯がとがっていないといけないんだ」と言ったので、保育者が「へえ～。さすが博士」と褒めた。また、A児は石を見つけると、触りながら「これは、⑩長くてつるつるですね。ティラノザウルスの手の骨です」と、⑪爪を立てて敵を襲う動きをし、骨の場所を教えてくれた。その後も、背中の骨や足の骨、爪の骨などたくさん発掘した。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児、B児は“すごいことを発見した”と思い、誰かに伝えたくなった。保育者を呼んだのは、保育者に真っ先に受け止めてもらいたいと思ったのだろう。
- ⑧ A児は保育者に「化石博士」と言われたことで、得意になった。「化石博士」という言葉の響きがうれしくて、博士になったつもりを楽しんだのだろう。なりきることで、一つ一つの石の形から、それらしい骨の形に見立てて答えたのだろう。
- ⑨ A児は、手のどの部分かを保育者に伝えたかったのだろう。A児は分かりやすいように動きで表現して伝えようとしたと思われる。



## 実践事例

石をたくさん集め保育室に戻ったB児は、「先生、大きな箱が欲しい」と言ったので、保育者が「どれくらいの大きさ？」と聞くと、㊦「これくらい」といながら手を広げて大きさを示した。保育者が空き箱を準備すると、B児が恐竜の図鑑を持って来てティラノザウルスの骨のページを見ながら、空き箱の中で石を並べ始めた。保育者が「博士。何をしているんですか？」と聞くと、B児が㊧「同じ場所に化石を置くんだ」と言った。保育者が「化石で恐竜の形を作ってるの？」と聞くと、B児は「これは、とがってて歯の骨だからここでしょ。これは、細くて長くて手の骨でしょ」と㊨見比べながら次々に石を置いた。A児はB児に「これは、背骨だったよね」と聞いたり、「それ、爪だよ」と言ったりしながら㊩二人で石の形とティラノザウルスの形を確認しながら並べた。しばらくすると、「先生、しっぽの骨が足りない。探してくる」と言うので「どんな形なの？」と聞くと、「すごい長い骨だよ」といながら探しに行った。しばらくすると、㊪「先生、恐竜できたよ」とうれしそうに保育者を呼ぶので見てみると、図鑑のティラノザウルスと同じ形に石が並べてあった。「すごい！一緒だね」と保育者が認めると、周りの幼児ものぞき込み「すごい」と認めた。その様子を見て㊫二人は得意げに顔を見合わせた。



## 幼児の姿の読み取り

- ㊦ 保育者に聞き返されたことで、B児は「大きな箱」の大きさを具体的にイメージし、手を広げて答えたのだろう。
- ㊧ B児は歯や手の骨を図鑑と同じように並べると恐竜の形になるかもしれないと思いついたのだろう。
- ㊨ “恐竜の形にしたい”という思いから、石の形や大きさ、長さなどを捉え、図鑑と見比べ同じような骨の場所に置いていったと思われる。
- ㊩ A児は、B児が恐竜の化石を並べていることが分かり、一緒に恐竜を作りたいと思ったため、B児と一緒に並べたのだろう。
- ㊪ 恐竜の形にできた満足感や保育者に見てもらいたい思いから、保育者を呼んだのだろう。
- ㊫ 二人は自分たちが並べて作った恐竜を保育者や友達に認められたことがうれしかったのだろう。二人で一緒に作ったという思いから得意げに顔を見合わせたと思われる。

読み取りのポイント

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㊦ 自分たちの発見を知らせたり感動を伝えたりする

“すごいことを発見した”という思いから、保育者を呼び、発見や感動を伝えた。

㊧ 形の特徴を捉え、見立てたことを言葉で表す

石の形から歯や手の形に見立て、「～だから～」と理由を付け加えて言葉で表す。

㊨ 相手に伝わるように動きで表現する

どこの部分の化石なのかを身振りや動きで表し、伝える。

㊩ 必要感をもって具体的な大きさをイメージし、示す

手を広げて自分がイメージしている大きさを示す。

㊪ それぞれの部分が集まったことで同じものができるとに気付く

手の部分や背骨の部分に見立てた石を並べていくと、図鑑と同じ恐竜の形になることに気付きやってみようとする。

㊫ 形を見比べながら置く

図鑑と同じ恐竜の形にしたい思いを実現するために、長さや形を図鑑と見比べながら置く。

恐竜博士になりきり、図鑑と同じ恐竜の骨の形が作りたいと思ったことで、大きさや形を意識しながら見比べ、置いている。

㊬ 友達と石を並べる

友達と一緒に確認しながら石を並べる。

友達のしようとしていることが分かり、自分もやりたい思いから友達に確認しながら一緒に遊びを進めようとしている。

㊭ できたうれしさを言葉で伝える

恐竜の形にできたうれしさを保育者に伝える。

㊮ 認められたうれしさを友達と共感する

自分たちが作ったものを保育者や友達に認められたことを喜び、友達とそのうれしさを共感する。

協同性

思考力の  
芽生え

自然との関わり・  
生命尊重

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな感性  
と表現

### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

この事例では、幼児は「化石博士」と言われたことから博士になりきって石を見たり探したり、それらしく答えることを楽しんだ。博士になりきる楽しさが石の形や大きさに興味をもって見ることにつながり、恐竜の骨に見立てる姿になったと思われる。また、博士のつもりで友達と一緒に図鑑と石を見比べながら並べる姿からは、捉えた大きさや形を友達と共有しながら遊ぶ楽しさを味わっていると思われる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

幼児の発見や思いつきを受け止め、なりきって遊ぶことが楽しめるような保育者の言葉がけが大切である。また、なりきる幼児と一緒につもりの世界を楽しみ、さらにそのつもりで遊びを楽しむことができるように必要な物を一緒に用意していく保育者の援助が大切である。

また、保育者が一つ一つの物をよく見て違いに気付こうとする幼児の姿を認めていくことで、幼児はより深い興味と新たな気付きにつながっていくと思われる。



実践事例

お正月明け、カルタを用意すると、A児がすぐに見付け、㊦B児、C児を誘い、読み手になってほしいと保育者を呼びに来た。保育者が読み手になり、「ありがおかしをみつけたよ」とゆっくり繰り返し読むと、3人は他のカルタには触れないように探していた。すると、「ありさんみ一つけた！」とA児がうれしそうに取った。㊧何枚か取るうちに、一枚一枚の絵札の上で手を止めながら探し始めた。

何日も繰り返す中で、保育者が読むと㊨B児が「♪あーりが…♪」と節を付けて言い出した。するとA児たちも楽しそうに節を付けた。

C児は何枚か取るうちに、カルタを取ると、㊩しばらく絵札をじっと見つめた。そして、「今度はCがやる」とC児が読み手になると言い出した。㊪周りの幼児たちはC児を見た。そこで、「先生Cちゃんの隣で応援するね」と声を掛け、㊫C児の隣に座ると、みんなもC児が読むのを待った。

㊬C児は「み」の読み札を真剣に見つめた後、みんなを一人一人じっと見ては読み札を何度も見返した。取り役の幼児は聞き耳を立てながら待っていた。C児は㊭一息ついた後、「みさきちゃんの

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ㊮ 冬休みに家庭でも楽しんだと思われるカルタを用意しておく、A児はカルタ取りをしたいと思い、日ごろ一緒に遊んでいるB児、C児を誘った。読み手は自分たちではできないので保育者にしてもらおうと保育者を呼びに来たのだろう。A児は、これまでの生活から保育者がいつでも受け入れてくれるという安心感をもって保育者を頼ってきたと思われる。
- ㊯ 保育者が読む言葉から絵をイメージし、お手つきにならないようカルタを探していた。次第にいち早く取りたい思いから、一枚一枚の絵札の上で手を止めながら探し始めたのだろう。
- ㊰ 繰り返し読んでもらうことで読み札を覚え、言葉(の語呂)の楽しさを感じ、節を付けたのだろう。B児が節を付けると、いつも一緒に過ごし面白いことや楽しいことを共有しているA児たちはすぐにB児をまねて節を付けたのだろう。
- ㊱ C児が取ったカルタの絵札を見つめていたのは、絵札の文字が何か考えていたようだ。絵本を見るとき指で字をさしながら読める幼児もいるが、C児は今まで字を読んだことがなかった。そのC児が「今度はCがやる」と言ったのは「友達の名札を見れば自分も読める」と思っただけではないかと思われる。
- ㊲ 日ごろのC児を知っている他児は“C児にできるかな”という思いを抱き、C児を見たのだろう。保育者がC児の隣にいることで安心して、受け入れ待っていたのではないか。
- ㊳ C児が「友達の名札」と「読み札」を見比べ、同じ文字を見つけ、何度も見比べたのは、文字の形が一緒なのかを真剣に確認していたのだろう。

**実践事例**

み！」と大きな声で言った。  
すると、㊸取り役の幼児は、一斉に「みさきの名札」を見て、絵札と交互に見比べながら探した。C児はうれしそうに「そう」と答えた。すると、みんなは絵札ではなく、みんなの名札を見て、C児が次に何を言うのかを待った。

**幼児の姿の読み取り**

- ㊸ 大きく一息ついたのは、「よし、できる。一緒だ」という自信や思いが込められていたのではないか。「み」ではなく「みさきちゃんのみ」と言ったC児の言葉から「名札と一緒に」という思いが読み取れる。
- ㊹ 他児は、C児の読み手の方法が分かり、「みさきの名札」と絵札に書かれている文字と交互に見比べたのだろう。そのため、その後は絵札ではなく、みんなの名札を見たのだろう。

**読み取りのポイント**

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊸ 友達を誘い一緒にしたい遊びをしようとする

したい遊びを一緒にしてくれる友達や手助けしてくれる保育者の存在が基盤となり、自分のしたい遊びを楽しもうとする。

㊹ ルールを守り、したい遊びを楽しもうとする

お手つきにならないように気を付けながらも、早く取りたい思いから手をカルタの上で止めながら探す。

㊺ 自分なりの表現方法を取り入れ遊ぼうとする

何度も読んでもらう中で言葉（の語呂）が楽しくなり言葉に節をつけるB児の楽しさを周りの友達も共有し同じようにする。

㊻ 自分なりの方法で文字が読めることが分かる

何度もカルタ取りをする中で友達の名札を見れば文字が分かり、自分でも読み手ができると考えた。

文字に関心をもち、文字の形が一緒か何度も見返す中で、自分の方法で文字が読めるのかを考え確かめている。

㊼ 保育者の支えの中で友達がしたい思いを受け止める

保育者が隣に座った安心感からC児の“読み手をしたい”という思いを受け止め、C児の言葉を待った。

㊽ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉠ ㉡ ㉢ ㉣ ㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㉪ ㉫ ㉬ ㉭ ㉮ ㉯ ㉰ ㉱ ㉲ ㉳ ㉴ ㉵ ㉶ ㉷ ㉸ ㉹ ㉺ ㉻ ㉼ ㉽ ㉾ ㉿

読み札に書かれた「み」と同じ形の文字を友達の名札から探して「みさき」の名札を見つけ、何度も同じなのかを見直して一緒であると自信をもち大きな声で言ったのだろう。

自分が考えた方法で文字を読めることに自信をもち、そのうれしさから次の文字を読もうとし、文字への関心を高めている。

㊿ 友達の文字を読む方法を受け入れる

友達の考えた読み手の仕方が分かり、自分たちもその方法を受け入れて遊びを進めようとする。

自立心

協同性

道徳性・規範意識の芽生え

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

豊かな感性と表現

### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

この事例では、始めは絵札の絵からカルタを探していたが、繰り返す中で文字に興味をもち、日ごろ目にしている文字と同じ形であれば文字が読めると自分で文字を読む方法に気づいたのだろう。幼児は日ごろより目にする文字を身近に感じ、文字の形や読み方が分かっていく。この事例のように自分なりに文字が読めたという経験の積み重ねが文字への関心を更に高めていくと考えられる。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

この時期の幼児は、文字への興味・関心に個人差がある。そのため、保育者は一人一人の幼児が関心をもち始めたタイミングを見逃さず、じっくり考える場や時間を確保したり、それぞれの幼児の文字の取り入れ方を受け止めたりしていくことが大切であると考えられる。友達と遊ぶことが楽しくなり、友達の考えも受け入れるようになってきたこの時期、友達と一緒に楽しめる遊びを取り入れていくことも必要である。そして、友達としたい遊びが十分落ち着いてできる場や時間が確保することが大切である。

また、保育者は、幼児が保育者に援助を求めてきたときには繰り返しじっくり関わり、一人一人の幼児の考えた方法が実現できるように支えたり、周りの友達がその考えや方法を受け入れられるように仲介したりしていくことが必要であると思われる。



#### 4 3年保育5歳児

3年保育5歳児(17) 6月 「1個ずつ出して並べて数えたらいいじゃん」

9期(くねらい)「自分の思いや考えを互いに出し合いながら、友達と一緒に遊びを進めようとする」

##### 実践事例

年中時に植えたジャガイモをクラス全員で収穫した。㊦たくさん収穫でき、どれくらい穫れたか数えたいという提案があった。保育者が「どうやって数えようか?」と聞くと、B児が㊧「タライから1個ずつ出して並べて数えたらいいじゃん」と言った。保育者がシートの上に1個ずつ置いていくと同時に幼児が「1、2、3…」と数え始めた。結果は310個。㊨数え終わった後、みんな「お〜!」と歓声を上げた。C児は興奮した様子で、㊩「先生、紙に書いといて。忘れるといけないから。お母さんに教えたいんだ」と言った。

収穫したジャガイモは段ボールひと箱には入りきらず、ふた箱に分けて入れることにした。そこで「どうやって分けようかな?」と投げ掛けると、D児が㊪「大きいのと小さいのに分ける」と言った。保育者が「いい考えね。大きいのと小さいのをどうやって分ける?」と聞くと、E児が㊫「えーっと、まず、普通のを決めて、普通より小さいのはこっちで大きいのはこっちに入れる」と言った。

##### 幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ㊦ 年中時から大切に育て、収穫を待ちわびていた思い入れのあるジャガイモがたくさん収穫できたうれしさから、いくつ収穫できたのか具体的な数が知りたいという気持ちが芽生えたのだと思われる。
- ㊧ どのように数えたら数えやすいのか、これまでの経験を振り返り自分なりに考え、ジャガイモを1個ずつ出しながらか数えると数えやすいこと、数えたジャガイモを別の場に移すと混ざらず正確に数えられるということを読み出したり考えたりして、一対一対応で数えたと思われる。
- ㊨ 保育者は幼児たちが310まで数えるとは思わなかったが、いくつかが知りたいという気持ちが310まで数え通す姿につながったのではないかと。そして喜びや楽しさを分かち合える仲間関係ができているからこそ、幼児から自然と「おおっ」という言葉が発せられ、数え抜いた時の達成感やたくさん収穫できた喜びを分かち合えたと思われる。
- ㊩ 自分を大切に思ってくれている相手がいると感じているからこそ、大好きな人(母親)にもこの感動とうれしさを伝えたいと思ったのだと思われる。保育者ではなく自分で伝えたいという思いからどうしたら忘れないかを考え、紙に書くという方法を考えたのだと思われる。
- ㊪ シートの上に並べられているジャガイモを比較して、いろいろな大きさがあることに気づき、二つに分けるときに大きさを分けることを考えたのではないかとと思われる。
- ㊫ 大きさを分けるときには、基準となるものがあった方

## 実践事例

保育者が「でも、普通のってどれかな?」と聞くと、E児が㊦形の良く一目見たところ中くらいのジャガイモを一つ選んだ。保育者が「みんなもこれが普通でいい?」と聞くとみんなうなずき、ジャガイモを分け始めた。明らかに普通より大きい、小さいものはそれぞれの箱に迷わず入れていたが、㊧少し迷うと普通と決めたジャガイモの隣に置いたりくっつけたりして大きさを測っていた。普通より背は高いけれど、細いものもあった。そういうものは「高さはこっちのが高いけど、でも小さいな」と言って小さい方に入れていた。どの幼児も段ボールの中にジャガイモを㊨そっと入れていた。

## 幼児の姿の読み取り

- ㊦ 「普通の(大きさ)」を、中くらいの大きさのものと捉えたのは、全体のジャガイモを見て比較し、中くらいと思うジャガイモを選んだと思われる。また、自分がイメージするジャガイモの形に良く似ている形の良いものを選んだのではないかと思われる。
- ㊧ 大きさを比べるときには隣に並べて置くと分かりやすいことに気付いたのだと思われる。また、基準になるジャガイモと、長さ、太さを見比べて分けようとするものの、極端に形が違うものに対しては体積を考え合わせて分けようとしたのではないかと思われる。
- ㊨ 大切に育ててきたジャガイモであり、食べるのを楽しみにしているからこそ、ジャガイモを大切に扱ったのだと思われる。

読み取りのポイント

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㉗ 愛着のある物の数量に関心をもつ

年中の時から収穫を待ちわびていた愛着のあるジャガイモであったことが、具体的な数を知りたいという幼児の気持ちをかき立てたと思われる。

㉘ たくさんの数を数える時の良い方法を考える

ジャガイモを別の場所に移しながら、数と一対一対応させて数えることで正確に数えられるのではないかと考える。

㉙ 共通の目的に向かって行動しやり遂げた達成感を味わう

具体的な数を知りたいという強い気持ちが原動力となり、みんなで最後まで数え抜き、数を知ることができた。また、みんなで最後まで数え抜いたことが喜びを分かち合いうれしさを共有する姿につながった。

㉚ 感動を伝えたいという思いから文字を活用する

たくさん収穫できた感動を大好きな相手に伝えたいと思い、数を忘れないために紙に書いておくという方法を考える。

㉛ 大きさの違いに気付き、分類しようとする

たくさんのジャガイモを比較して、大きいものと小さいものがあることに気付き、二つに分けるときに大きい、小さいで分けようとする。

大小様々な大きさ、形のたくさんのジャガイモを比較することで、図形への関心や感覚を磨いているのではないと思われる。

㉜ 分類する時のよい方法を考える

大きい小さいで分けるときには、基準となるジャガイモがあると良いのではないかと考える。

㉝ 基準となるものを選ぶ

たくさんあるジャガイモの中から、目で直感的に判断して形の良い中くらいのジャガイモを選ぶ。日頃から目にすることの多い身近な食べものであったことから、そのものの形のイメージが幼児の頭の中にすぐに浮かび、形のよいものを選ぶことができたと思われる。

㉞ 大きさや形に興味をもち、感覚を磨く

長さや太さを気にしながら自分なりにいろいろな方法を試しながら分けていく。

迷うと、基準になるジャガイモの隣に置き、大きさや高さを比較しながら体積で捉えているなど、感覚を豊かにしていると思われる。

㉟ 食べ物を大切に思う

食べ物であることが分かり、愛着があるからこそ大切に箱の中に入れてようとする。

健康な心と体

自立心

協同性

道徳性・規範意識  
の芽生え

社会生活との  
関わり

思考力の  
芽生え

自然との関わり  
生命尊重

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな  
感性と表現

### 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は心を揺さぶられる体験をしたときに、それについてより深く関わりたいという気持ちが芽生える。その関わり方の一つとして、正確な数を数えたり、数えるための方法をみんなで考えたり、大切に扱おうとしたりする。事例のように一つのものに「1」を対応させて数えたり、数えたものを分けたりすることで数を理解したり、大きさを比較する方法を考えることで大きさを認識する感覚を得たりする取り組みは、数量感覚を捉えていく姿につながっていく過程の姿と考える。

### 育ちに必要と思われる環境と援助

思い入れのあるジャガイモとの出会いや、分ける必要性があったことが幼児の具体的な数を知りたいという気持ちを掻き立てた。この事例のように数、量、形への関心を深めていくには、幼児が日常生活の中で自然や身近な事物や事象に興味や関心をもち、積極的にかかわることのできる環境を用意することが必要であろう。

事例から“知りたい”“分かりたい”という好奇心や探究心が掻き立てられる活動が、自発的に考えたり判断したり、新たな考えを生み出したりする思考力の芽生えにつながると考える。しかし好奇心や探究心が掻き立てられる活動であれば何でもよいのではなく、考えれば分かる活動であることが重要ではないかと考える。そこで、幼児にとって簡単すぎず、難しすぎない活動ができる環境と援助が必要であると思われる。



波線：読み取りの要素

### 実践事例

幼児たちは、⑦育てている夏野菜を見て「背が高くなった」「花が咲いた」などと、それぞれ保育者に伝えに来るようになった。保育者は、一人の気付きが周りの幼児にも伝わり、野菜の成長に興味をもてない幼児も興味をもてるというなど考え、気付いたことを「おやさいニュース」として貼っておけるようボードを作った。

④A児は朝の身支度を終えると、自分たちの苗にジョロで水をやった。トマトの実を数えて、ニュースを書き始めた。⑤自分の知っている平仮名や片仮名を使って書いていくが、書けない文字が出てくると、保育者に『『え』はどうやって書く?』と文字を教してもらいながら書いたり、野菜の表示、絵本、図鑑に載っている文字を見に行き手本にして書いたりした。(「まえわ6こだたのに10こにかワてた」「まえわ14んこあたのに15こにかワてた」など)

B、C児は、⑥A児の書いたおやさいニュース「まえわ14んこあたのに15こにかワてた」を二人で声を出して読んだ。C児は「Bちゃんたちのトマトってどこ?見せて」と言い、二人でトマトを見に行った。④C児が「数えてみよう」と言い、二人で数を数えた。15個から、17個に増えていて、二人で「17個」と目を見合わせ、「Aちゃんに教えてあげよう」と言った。

### 幼児の姿の読み取り

⑦ グループのみんなで苗を植え、水やりをして愛情をもち育てているので、苗の少しの変化にも気付くのだろう。苗が成長した喜びやそれを発見したうれしさを保育者に伝えたくなったのだろう。

④ A児が、水やり、数を数える、ニュースを書くということを日課のようにしていた姿から、愛着をもち世話をしていると、昨日との違いに気付き成長にもさらに興味をもつのだと感じた。また、プチトマトは一つの枝に10個ずつほど並んで実がなるので、思わず数えたくなるうえに、数日で実の数も増えていくので継続して数えてみたくなる環境であったと思う。A児は、実の数が前に数えた時から増えているか知りたくなり、数えてみると増えていたうれしさから、結果をみんなに知らせたくなり、「おやさいニュース」に書いたのだろう。

⑤ みんなに伝えたい気持ちから、自分の知っている文字を駆使して書こうとしていた。また、知らない文字は保育者に聞いたり、野菜の表示や図鑑の字を見たりして手本にして書いていた。書きたい文字は、何を見たら分かるかを見当をつけて見に行っていた。調べたり教えてもらったりして自分で書いた「おやさいニュース」をボードに貼ることができ、充実感を味わっているので、さらに繰り返し継続して数えてはニュースを書く姿につながっていると思われる。

⑥ B、C児は、これまでの経験からボードを見ると、何か面白いこと、新しい情報、自分の知らないことなどがあることが分かっている、ワクワクした気持ちで二人で声を合わせて「おやさいニュース」のボードを見て読んだのだと思われる。

④ C児はA児の「おやさいニュース」から情報を得て知るだけでなく知ったことを確かめてみたくなり、実際に自分たちでも数えてみている。また、A児がトマトの成長を楽しみにし実の数を数えていることを知っているので、A児が数えたときの15個から17個に増えていることを、A児に教えたくなったのであろう。

## 実践事例

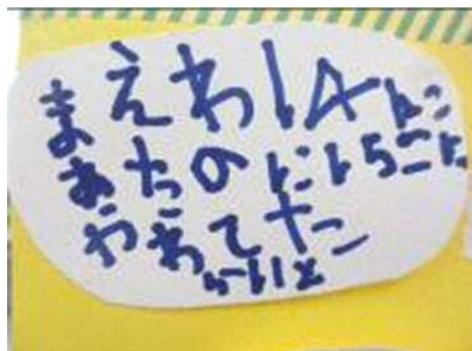
6月19日

A児は、プチトマトの⑦実を下から指で指しながら「1, 2, 3…」と数えていく。「35！」と言うと、すぐに、もう一度1から数え直した。2度目も同じく「35」だった。「34から35に変わった」と言った。保育者が「35かあ！一つ増えたんだね。つきぐみさんも全部で35人だから、一緒だね」と言うと、A児はにこっと笑い、⑧「そうだ！みんなに一個ずつ食べさせてあげよう」と言った。

A児は、テラスから保育室へ戻ると、すぐにおやさいニュース用の紙と鉛筆を取り、ひらがな五十音表も自分で持って来て書き始めた。⑨「トマトがあかクナテタ トマトガマエワ34んこだタのに35こにかワてた」と書いてボードに貼った。

## 幼児の姿の読み取り

- ⑦ 一番下の実から指をさして数え始めたのは、枝になっている実を「たくさんある」と捉え、重複して数えてしまわないように、一番下のトマトを起点として数えていったのだろう。
- ⑧ A児にとって35個というのが意味のある数だったと思われる。何度か耳にして知っていたであろう「クラス全員で35人」の「35」とぴったり同じであったことがうれしくて、「みんなに食べさせてあげよう」と言ったのだろう。  
また、「みんなに」という言葉から、これまでは自分の苗がどう成長したかA児個人にとっての楽しみであったが、35個という数によって、クラスみんなに食べさせたい、クラスみんなの楽しみにしたいという気持ちの変化がうかがえる。
- ⑨ これまで、何度もニュースを書いてきて、平仮名の「が」と片仮名の「ガ」、「わ」と「ワ」、など表したいことを同じように表すことができることを感じ取っていたのであろう。使ってみたい気持ちが高まっているため、平仮名と片仮名が混じった文章になったのではないか。



読み取りのポイント

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㊦ 植物の成長に触れ、感動を言葉にして伝える

グループのみんなで育てている苗の成長をうれしく思い、一番心通わせている担任に伝える。

㊧ 植物に愛情をもち、見通しをもって関わろうとする

植物は水をやらないと枯れてしまうことが分かっているので、見通しをもって苗に愛情をもち毎朝世話をします。

㊨ 伝えたい必要感に基づき文字を活用する

実が増えたうれしさをみんなに伝えたい気持ちから、知らない文字も聞いたり見当をつけて調べたりして、自分なりに表した。

㊩ 文字から情報を得ることを楽しむ

A児の書いた「おやさいニュース」で、A児の発見したことを知る。

㊪ 文字と言葉で伝え合いを楽しむ

実を数えてみると、ニュースにあった数より増えていることが分かった。ニュースを書いたA児が実が増えたことを喜ぶだろうと考え、A児に教えてあげることにした。

実物がなくても、文字から得た情報を基にして関わることを楽しんでおり、情報に基づき判断したり、活用したりする感覚を豊かにしている。

㊫ たくさんの数を数える時の良い方法を考える

なっている実を、感覚で「たくさん」ととらえ、重複して数えてしまわないように、一番下の実を起点として数える。

多くの数を正しく数えるためには起点を定め、数えようとすることで数に対する感覚を豊かにしている。

㊬ 物の数と人の数を対応させて考える。

トマトの実35個とクラス35人を対応させて、全員に一つあると考える。喜びを友達と共有したい思いをもつ。

㊭ 文字の役割に気付き、活用する

平仮名と片仮名はそれぞれ同じように言いたいことを表すことができると分かり、平仮名も片仮名も使って自分の言いたいことを表そうとする。

健康な心と体

自立心

協同性

道徳性・規範意識  
の芽生え

社会生活との  
関わり

思考力の  
芽生え

自然との関わり  
生命尊重

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな  
感性と表現

## 必要感に基づく体験を通した文字、数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は心を動かされる出来事に触れると、その思いを共有したくて保育者や友達に言葉で表そうとする。この事例では、ニュースを書いて貼っていたが、言葉で話す以外にも文字で伝わるうれしさも味わっていた。自分のニュースを読んだ友達が喜んだり数え直したりと反応を返してくれるうれしさから、更に文字を使う意欲が高まっている。また、文字を読むことで情報が得られる楽しさも味わっており、文字の役割を分かって活用する姿である。

幼児は興味のあることに自ら関わっていく中で様々な変化や発見をし、更に興味・関心を深めていく。事例では、成長して増えていくトマトの実の数を楽しみにして数えていた。数える中でいくつからいくつに増えたか、大きい数はどう確かめるか、物と人の数の対応などを考えており、数量を捉えていく過程の姿と考えられる。

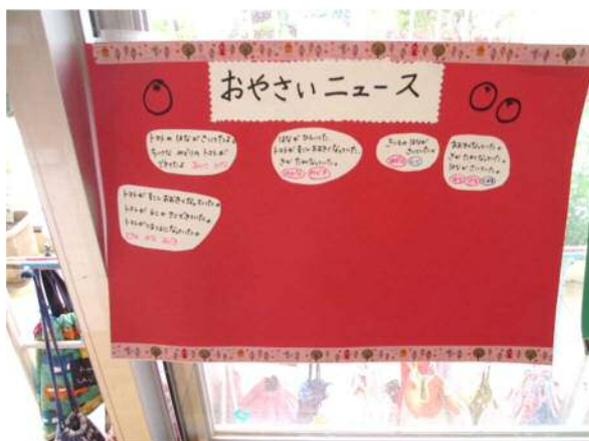
## 育ちに必要と思われる環境と援助

自分の気付きを発信する手立てを用意し、伝えたい意欲を高め、伝わったうれしさや満足感を味わえるようにすることが大切である。

今、幼児が関心をもっていることに深く関わっている物（絵本や図鑑）を身近に用意し、幼児が自分に必要な物として活用できるようにすることにより、幼児の興味や関心が広がったり深まったりしていくと思われる。

色が変わったり、大きくなったり、数が増えたりしていくような変化のある自然物は、不思議に思ったり興味をもったりしやすく、継続して自ら自然にかかわったり、様々な気付きを得たり、数や大きさに関心をもったりする姿につながると思われる。

幼児が、様々な事象から気付いたり考えたりできる時間を保障し、幼児の驚きや喜びに共感することが大切な援助である。



実践事例

A児ら10人ほどの幼児が、㉞遠足で見たイルカショーを思い出しながら、トレーナーとイルカの役に分かれて遊んでいた。お客さんに見せる内容が決まると、年中児を誘ってショーさながらのアナウンスやジャンプなどを見てもらい、㉟「楽しかったね。2回目もやろうよ」「やりたい!」「やるやる」と2回目を行うことになった。A児が「いつからにする?」と㊱時計を見る。10時5分。B児たちは「もう1回できるね」「まだまだ遊ぶ時間だもんね」と言う。そして、C児が「長い針が2からにする?」と聞くと、B児は㊲「2ってすぐだよ。3と4の間くらいは?」A児も「4は?だって準備もあるし」と考えを出し合う。他の幼児も「いいよ。4ね」「分かった」と10時20分から2回目を始めることに決まった。

2回目の公演までの間、イルカ役の幼児たちはフープを回したりくぐったりしていた。㊳それぞれのフープがぶつからないように周りを見ながら回していたが、フープがぶつかったり思うようにできなかつたりした。すると、C児が㊴「イルカさんは2匹に分かれてたよね」と言った。D児やE児も「ご飯もらう時も2匹一緒だった」、「挨拶の時もそうだったよ」と答えた。C児が「じゃあ、二人チームになるのは?」と聞くと、周りは「いいね」「なろう」と二人

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ㉞ 水族館では、イルカの迫力あるジャンプや技に歓声をあげたり、友達と声を合わせて応援したりしていた。遠足での共通の感動体験をもとに、イルカの動きやトレーナーの動き、言葉などを思い出しながらイメージを共有し、再現していたと思われる。
- ㉟ A児たちは、アナウンスのせりふや全員そろってジャンプをすることなど、水族館での様子を思い出しながら表現し見てもらっていた。技がうまくいくたびにお客さんから拍手をもらい、そのうれしさが次への意欲となり2回目もしたいと思ったのだろう。
- ㊱ A児たちは時計を正確に読めるわけではないが、日ごろの生活から、時間を決めるには時計を利用するとよいことや、長い針と短い針の位置が時間の長さを表すことを分かっている。また、「まだ遊ぶ時間」ということから、見通しをもって遊びを進めていると思われる。
- ㊲ B児は「2」を5分後と理解していないものの、長針の動く幅から「すぐ」ととらえ、準備にはもう少し時間がかかると考えたのだろう。また、B児は、「2」と言ったC児がショーを早く始めたいと思っているのだろうと考え、もう少し先の「3と4の間」と言ったのではないか。A児は、準備にもう少し長く時間がかかりそうだと考え、B児の「3と4の間くらいは?」という言葉の「4」という考えに合わせようとしたのではないか。互いの意見を聞き、理解した上で考えを出し合いながら始まりの時間を友達と相談して決めようとしている。
- ㊳ C児たちは、日ごろから縄跳びやリボンダンスなど道具を使いながら体を動かして遊ぶことが好きである。その経験の積み重ねにより育まれた感覚により、フープが回る範囲と友達との距離を考えて動いていたのではないか。
- ㊴ C児は、思うようにフープを回すことができない困った状況とお客さんにうまく回す姿を見せたいという思いから、どうするといいか思いめぐらすなかで、水族館で見たイルカがペアで動いていたことを思い出したのだろう。水族館では2匹に分かれていたことを伝え、他の幼児も「そうだった」と同意してくれたことで安心し、C児は二人チームになるという考えを改めて友達に提案したと思われる。

組をつくりはじめた。しかし、イルカ役の幼児は奇数だったため、1組だけが三人チームになった。3人チームになったG児は「ここのだけ3人」と気になる様子だったため、F児が「三人でもいいじゃん」と言ったが、G児は㊦何となくすっきりしない表情だった。しばらくして、E児が、「あ、3匹のイルカもいた！」と言い、他の幼児も「ああ、ジャンプするとき3匹だった」と言い、三人チームに分かれ始めた。

㊦ G児は、「二人チーム」と言って分かれたのに自分たちが三人チームになってしまった不安と不満から、「ここのだけ三人」と言ったのだろう。それは、F児が「三人でもいいじゃん」と安心させようと言葉を掛けても納得できない様子だった。日頃の友達関係から、幼児たちはG児も楽しく遊びを続けられるような良い方法を考えていけるだろうと思われたので、保育者は様子を見守ることにした。

E児が「3匹のイルカもいた」と言ったのは、イルカショーの最後のジャンプで3匹が同時に成功させた場面を思い出したのだろう。自分たちで楽しく遊びを進めようとする気持ちと、水族館で見たショーを再現したい思いが共有されていることから、三人チームならうまくいくのかやってみようと動き始めたのだろう。



**読み取りのポイント**

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㊦ 共通の感動体験をもとに友達とイメージを共有して遊ぶ  
水族館遠足で心に残ったイルカやトレーナーの動きなどを思い出し、友達とイメージを共有しながら動きや言葉に表すことを楽しむ。

㊧ 周りの反応にうまくいった手ごたえを感じ、意欲をもつ  
友達とタイミングや動きを合わせ行った出し物がうまくいったうれしさや充実感を味わい、もっとやろうという気持ちを共有する。

㊨ 時計の針の動きと時間の長さを感じ、見通しをもつ  
時計の針の動きや針が指す数から時間がどの位あるか感じ取り、友達と予定を立てることで見通しをもって遊びを進めようとする。

㊩ 考えを友達と伝え合い、相談して決める  
時計の針を見ながら時間の長さの感覚を言葉にして友達と伝え合い、始める時間を相談して決める。

気心の知れた友達関係の中で、自分なりの考えを言葉で伝えている。一緒に遊んでいる仲間と共通理解しておくことよいことを相談し、自分たちで予定を立てて遊びを進めようとする。

㊪ 扱う物の大きさや動きに必要な広さを捉え、考えて動く  
これまでの経験から、道具を使って遊ぶときにどのくらいの広さが必要かを考えて行動する。

㊫ 友達との遊びがうまく進むように、経験をもとに考える  
遊びがうまく進むためにどうするといいか思いめぐらし、これまでに見たことと結びつけて考えたり、それを友達に伝えたりする。

㊬ チームの分かれ方を考える  
皆が納得できるようなチームの分かれ方を考える。友達のアイデアに、うまくいかどうかやってみようとして行動する。

共通の目的に向けて一緒にチームの分かれ方を考える。二人チームではうまく同じ人数にならないことから、「三人チームではどうだろう」と実際に分かれてみることで試してみる。

健康な心と体

自立心

協同性

社会生活との  
関わり

思考力の  
芽生え

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな  
感性と表現

**必要感に基づく体験を通した数量などへの関心・感覚の育ち**

この時期の幼児は、これまでの生活経験の中で、時計の針が動く幅や指す数で時間の長さや一日の生活のどの時間なのかということを捉えていることも多い。また、友達と共通の目的に向けて一緒に遊びを進めようとするときに、それにかかる時間と片付けまでの時間とを合わせて考え、何をするかという内容や時間の配分をしながら見通しをもつようになる。

気の合う友達との遊びでは、様々な場面で場の広さを考えたりチームに分かれたりする。仲間との遊びをもっと楽しくしたいというような思いのもと、考えを伝え合ったり、実際に動いて試したりしながら、その状況に応じた場の広さや人数、人数の分かれ方などの感覚が養われていく。

**育ちに必要と思われる環境と援助**

保育者は、幼児が意見を出し合ったり受け入れ合ったりする姿を見守りつつ必要ときに援助しながら、自分たちでイメージを共有しながら遊びを進めていく充実感を味わえるようにする必要がある。また、時計やカレンダーなどを用いて一日及び一週間の予定を分かりやすく知らせ、幼児が自分なりに考えて遊んだり行動したりし、友達と見通しをもって生活していくことができるように工夫することが大切である。

実践事例

弁当時、㊦クラスの半数ほどが「幼稚園の裏におばけの名札が落ちていた」という話題で盛り上がっていた。保育者が「おばけの名札？名前が書いてあるの？」と聞くと、A児が「うん。とべらって書いてあったよ」と言った。そこで、弁当後にA児ら数人と裏庭へ行ってみると、㊧土で汚れた四角い板に「とべら」と黒い字で書いてある物が落ちていた。保育者は、すぐに園に植えてある木の名札であることが分かった。保育者が名札を拾おうとすると、A児が㊨「触っちゃだめ。おばけが怒るよ」と言った。保育者も「ええ！怖い！おばけだからどこにいるか分からないもんね」と拾うのをやめた。すると、B児が㊩園舎の壁にあいた二つの穴をさして「これ、おばけの目かも」と言うと、㊪みんなが「キャー」と叫んで後ずさった。C児は、とべらの札のそばにある㊫ヨウシュヤマゴボウの切株を指さして、「これ、おばけの指じゃない？」と言った。A児が㊬「本当？どれ」と言って見ると、急に「動いた！」と言って走り出した。みんなも「キャー」と叫びながら札から遠くまで走って逃げた。その後、㊭落ちている物、植物などいろいろな物を「これがおばけの～(体の部位)かも？」と予想しながら札の近くへ戻ってきた。

札の近くにあるイチジクの葉にB児が触るとその木の反対側の枝がゆらゆらと揺れた。それを見て、B児が「㊮あっちまで動いたから、これがおばけだよ！」と言った。㊯みんなも手前の葉に触ってみると反対側の枝が揺れるので、「本当だ」と言った。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素



- ㊦ 初めは数人が見つけたことだと思われるが、弁当時にクラスの半数ほどが知っていたのは、「おばけ」という興味をもちやすい話題であったため、話したい、聞きたい、知りたいという思いを掻き立てられ、多くの友達に情報が伝わったからだろう。
- ㊧ 四角の板に大きく字が書いてあることから誰かの名札であるとイメージしたのだろう。汚れた板、黒の字、「とべら」という言葉の響きなどから不気味さを感じたのではない。また、園舎裏という場所の雰囲気も合わせて、寂し気で怖そうなイメージをもち、おばけの名札ということになったのだろう。
- ㊨ 得体の知れないおばけのイメージが膨らみ、触っておばけが怒っては危ないと思い、こう言ったのだろう。
- ㊩ 「どこにいるか分からない」という言葉を聞いて、おばけがどこにいるかを具体的に考え始めたのだろう。「おばけの目かも」と言ったのは、二つ並んだ丸い穴から目をイメージしたからであろう。
- ㊪ B児の言葉を聞いて全員が同じように怖がっているの、そこにいる全員が同じイメージをもっていると思われる。
- ㊫ 「おばけの指」と言ったのは、ヨウシュヤマゴボウの切株が、赤紫色で10数本の細い幹が地面から10cmほどのところで切られていて、指に形が似ており、色からも不気味さを感じおばけをイメージしたからだろう。
- ㊬ 「おばけの指じゃない？」というC児の言葉を聞き、自分でも確かめようとしている。また、「おばけかもしれない」というドキドキ感から、切株が動いたように見え「動いた」と言ったのだろう。みんながドキドキ感を共有しているので、一人が逃げると同じように逃げたのだろう。
- ㊭ おばけっぽいものをそれぞれが探して、「おばけかもしれない！」とみんなで怖がるのが楽しくなっていたと思われる。また、体の部位に形や素材が似たものを取り上げていたので、形や素材の特徴を感じてイメージしていると思われる。
- ㊮ B児は、自分が触っていない反対側の枝が動くことに気付き不思議なので、イチジクの木を「おばけ」と考えたのだろう。また、みんなに伝える時に、おばけであると考えた根拠「あっちまで動いたから」を、きちんと伝えようとしている。
- ㊯ B児の言っていることを聞き、同じように自分たちもやってみて、触っていない葉がゆれるからおばけであることに納得している。

D児は、㊦葉にポンポンとリズムを付けて触りながら「私ごとべらですって言ってる」と言う。保育者が、「ええ、怖いおばけでしょ。食べちゃうぞって言ってるかもしれないよ」と、怖がって見せると、A児が「そんなことないよ。㊧とべらってね怖くないよ。みんながタッチしてうれしいんだよ」と言った。保育者が「そうか、これ、喜んでるんだね」と言うと、A児は「そうだ、㊨名札きれいにしてあげよう」と言って、札を拾い上げ、手洗い場で泥をきれいに洗い流し、イチジクの根本にそっと置いた。保育者が「とべら、喜ぶかな」と言うと、A児は「うん。㊩とべらちゃんね、かわいそうな子なの。昔幼稚園にいたけど、汚いってみんなから嫌われちゃっておばけになったんだよ」と言った。D児「㊪そうだよ。きれいになったから、また幼稚園に戻ってくるかも」E児「とべらちゃんってかわいい名前だもん、きつとかわいい子だよ」A児「お姫様かもね」B児「木になって王子様を待ってたのかも」などと話しながら、イチジクの葉を撫でていた。

片付けの時間が近づき、B児が「そろそろ戻らなきゃ」と言うと、A児が「待って、㊫とべらちゃんが寂しくなっちゃうから・・・そうだ！私の絵をかいたらとべらちゃん寂しくないよね」と言ってイチジクの木のそばの地面に自分の絵をかき始めると、みんなも同じようにかき始めた。かいた絵のそばに「㊬いし（いっしょ）にいるよとべらちゃん」「だいすき」などとメッセージも添えた。かき終わると、「㊭とべらちゃん、また来るからね。寂しくないよ」「また遊ぼうね」「大好きだよ」などとイチジクの葉をそれぞれ撫でてお別れをした。

㊦ イチジクの木が「おばけ」と分かったことから、こう言ったのだろう。また、「私ごとべらです」という言葉のリズムに合わせて葉にタッチしていたのは、枝を揺らし木が話しているように表現したのだろう。

㊧ とべらの正体がイチジクの木であると思えたことから、得体の知れないものではなくなったため、「怖くない」と言えたのではないか。また、“おばけはどこ？”と探しているうちに、だんだん「とべら」に親しみがわいてきたのだと思われる。初めはすべての物が気味悪く怖く見えておばけが「怒るかも」と言っていたが、親しみの気持ちがわいたので、触っていないのに動く不思議な木も“うれしい”と思っていると表現したのだろう。

㊨ とべらに親しみがわいたので、泥で汚れているのをかわいそうに思い、きれいにしてあげたくて札を洗い、大切に扱ったのだろう。

㊩ とべらに「ちゃん」とつけて呼んでいることから、親しみの気持ちが読み取れる。札が汚かったこと、おばけだと思っていて自分も初めは嫌いだったことなど見たこと考えたこと経験したことから、とべらの物語のイメージが膨らんで、このように話したのだと思われる。これまで絵本を読んだり、みんなでお話しを聞いたりしてイメージをもったり膨らませたりする楽しい経験があるので、このようにとべらの物語をイメージし、話したのだろう。

㊪ A児のとべらのイメージを聞き、B、D、E児も同じとべらの物語のイメージをもち、さらにそれぞれがイメージしたことを伝え合っており、イメージを膨らませていく楽しさを味わっている。

㊫ 「とべらちゃん」の立場に立って考え、自分たちがいなくなると一人になり寂しいだろうと思ひ、寂しくない方法を考えて自分たちの似顔絵をかくことにした。

㊬ 絵をかくうちに、とべらへ伝えたい気持ちも書きたくなり、「いしょだよ」「だいすき」などと書いたのだろう。文字で気持ちを伝えられることを理解している。

㊭ とべらへの思いを言葉にして伝えた。



読み取りのポイント

育てほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに  
育てほしい姿

㊦ 見たことを言葉で伝えたり、友達の話に興味をもって聞いたりする

「おばけ」という興味をもちやすい話題で、話したい、聞きたい、知りたいという思いを掻き立てられるため、多くの友達におばけの名札の情報が伝わっていた。

㊧ 響きや雰囲気からイメージしたことを自分なりに表す

「とべら」という言葉の響き、落ちていた場所や札の雰囲気から不気味さを感じ、怖い物をイメージして「おばけの名札」と表現した。

幼児は「とべら」という文字を感覚でとらえている。響き、字体、色、雰囲気、様々な要素から不気味さを感じつつイメージを膨らませ、ドキドキ感を楽しんでいる。こうした感情や体験を伴いながら文字に触れていくことが幼児の文字に対する感覚を豊かな物にしていく。

㊨ イメージを膨らませて、考えを伝える

おばけの名札かもしれないという思いからおばけがいるかもしれない、触ったらおばけが怒るかもしれないと、イメージを膨らませて、危ないかもしれないことを伝える。

㊩㊪ 話を聞き、自分なりに考えたことを話す  
物の特徴を捉え、似ている物を見つけてイメージしたことを伝える

「どこにいるか分からない」という言葉を聞き、おばけがどこにいるかを具体的に探し始め、目の特徴に似ている穴を見て、「おばけの目」と言ったり手の指の特徴に似ている幹を「おばけの指」とイメージして言った。おばけのイメージをみんなで共有して楽しんでいる。

㊫ 話を聞き、イメージを共有しながら動くことを楽しむ

一人の言葉でみんなが同じように“おばけの目かもしれない”とイメージを抱き、一緒に後ずさっており、同じイメージの中で動くことを楽しんでいる。

㊬㊭ 友達の言ったことを自分でも確かめようとする  
イメージを膨らませ、共有しながら動くことを楽しむ

友達の言葉を聞き、本当にそうなのか確かめようとした。どれがおばけだろう？とドキドキしながら探しているの、切株が動いたように見えた。イメージを共有しているので、一人が逃げると同じようにみんなも逃げた。

㊮ 気付いたことや考えた根拠を言葉で伝える

触っていないのに枝が動いていると気づき、その不思議さからイチジクの木をおばけと考えた。みんなに伝えるときにも、なぜおばけだと思ったのかの根拠も伝えている。

㊯ 心を動かす出来事に触れ、自分なりに表現する

やっとおばけの正体が分かったことがうれしくて、とべらになって話した。揺れる枝が話しているように見えたのか、言葉のリズムに合わせてタッチし、木が話しているように表現をした。

健康な心と体

協同性

社会生活との  
関わり

思考力の  
芽生え

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

豊かな  
感性と表現



㊦ **身近な事象に関わりながら、親しみをもつ**  
 得体が知れなかった時には怖かったが、とべらの正体が木であることが分かったので怖くなくなった。また、おぼけはどこにいるかと探しているうちに、親しみの気持ちもわいていったのだと思われる。

㊧ **相手の立場に立って行動する**  
 親しみをもったことから、とべらの気持ちになって考えられるようになり、汚れた物をきれいにしてあげたいと思い、名札を洗った。

㊨㊩ **言葉による伝え合いで、イメージを膨らませる**  
 見たこと考えたこと経験したことから、とべらの物語のイメージが膨らんで、このように話した。また、それを聞きイメージを共有しながらさらにイメージを膨らませ伝え合っている。

文字の刺激から共通のイメージをもち、とべらに関わっていったが、それぞれのイメージしたことを言葉にしていってさらにその共通のイメージを膨らませていった。

㊪ **見通しをもち、相手の立場に立って行動する**  
 自分たちがいなくなればとべらが一人になり寂しい思いをするだろうと先の見通しをもち、自分たちがいない間も寂しくない方法を考え、絵をかいた。

㊫㊬ **気持ちを文字や言葉で伝える**  
 “一緒にいるから寂しくないよ” “大好きだよ” という気持ちを伝えたくて、地面に文字を書いたり話したりした。

- 健康な心と体
- 協同性
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 自然との関わり 生命尊重
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- 言葉による伝え合い
- 豊かな感性と表現

**必要感に基づく体験を通した文字などへの関心・感覚の育ち**

幼児ならでは、文字を感覚でとらえそれを表現する姿を保育者は受け止め、一緒に楽しんでいくことが大切である。

幼児は、伝えたいことが心にあふれ、相手に伝えたいからこそ、その気持ちを表す。この事例では、その方法が、言葉や行動、絵、文字であった。様々な方法で相手に思いを伝え、伝わったうれしさを感じることで、対象とのさらなる関わりや親しみが生まれる。その関わりの中で、また伝えたいことや思いが生まれ、言葉や文字を使って表す機会も増えていくのだろう。こうした経験の積み重ねが、気持ちや伝えたいことを文字で表そうとする姿へつながっていくと思われる。

**育ちに必要と思われる環境と援助**

とべらちゃんを思う気持ちを、言葉、行動、絵、文字で表していた。伝えたい思いは親しみのある相手があってこそで、ここまで親しみを感じられるようになったのは、とべらに関して友達と自由にイメージを広げ、とべらに心ゆくまで関わったからだろう。不思議に思う気持ちや一人一人のイメージを保育者が受けとめたり共感したりすることが大切であると思う。

この事例でもそうであったが、幼児の書く文字は鏡文字であったり、拗音（しょ）促音（っ）濁点（゜）が抜けてしまっていたりして、正しい表記ではないことも多い。しかし、この時期にそこにこだわり正しい表記を教えることよりも、気持ちを表したい相手がいる、自分なりに表し、分かってもらえたいうれしさに保育者が共感することにより、幼児の文字で表したいという意欲がより育まれていくことを大切にしたいと考える。

実践事例

1年生との交流授業で風で走る車で遊ぶ体験をした。⑦翌日、A児と保育者が製作材料を使い車を作っていると、⑧「僕もやる」とB児ら4人が集まって来た。空き箱や、フィルムケースの蓋を使い、それぞれが車を作り始めた。みんなの車ができあがると、広い遊戯室で走らせた。最初は小学校で遊んだように、床に車を置き、うちわで扇ぎ走らせていたが、⑨

⑩A児が「積み木で坂を作ったらもっと速く走るんじゃない?」と言うと他児も賛成し、大積み木と、板積み木1枚で坂を作り走らせた。しばらくして⑪A児は、大積み木を2段に重ね、板積み木を2枚つなげ車を走らせた。しかし、坂を長くすると、車が途中で落ちてしまい、困った表情をうかべた。

すると、⑫B児が「壁を作るといいんじゃない?」と言って、正方形・長方形の積み木を横や縦に組み合わせ合わせて板の横に並べ始めた。他児も「そうすれば、横に落ちないね」「さっきより、速く走って、遠くまでいくようになったね」と何度も車を走らせた。しばらくして、⑬B児が「そうだ!タイヤを変えたら、もっと速く走るようになるかもしれない」と、タイヤのフィルムケースのふたにフィルムケースの筒の部分をつけた。B児が「見ててよー」と車を走らせると、さっきより速く遠くまで走った。それを見たA児達が「すごーい!」「今までで一番遠くまでいったね」と言った。B児は「すごいでしょ」と自分の車を見せた。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児は、1年生との交流授業で風で走る車で遊んだ楽しさと、1学期に車を作り楽しく遊んだ経験が重なり、さっそく翌日に車を作り始めた。小学校の体験を自分の遊びに取り入れ楽しもうとする気持ちが表れている。
- ⑧ A児の姿を見て、同じように車を作って遊んだ経験のあるB児らも車作りを始めた。小学校の交流授業という共通体験や1年生への憧れを共有していることが、みんなの車ができるまで待って一緒に走らせようという姿につながっていると思われる。
- ⑨⑩ A児の「積み木で坂を作ったらもっと速く走るんじゃない?」という言葉には、以前坂を作って車を走らせたことが楽しかった、もっと遊びを面白くしたいという思いが表れていると思われる。また、他児が賛成したのはA児の思いが分かり同じように遊びを面白くしたいと思ったからではないか。坂にすると物は速く動くという仕組みをこれまで砂遊びで水路を作ったり、積み木の坂でどんぐりを転がして遊んできた経験から感じとったことを自分の遊びに取り入れていると思われる。
- ⑪ 積み木を2段、板を2枚にしたのは、何度も車を走らせているうちにもっと速く、遠く走らせたいという思いをもつようになってきたからではないかと思われる。速くするには坂に角度をつけ、その角度が積み木を2段に積んだくらい(30度程度)がちょうどよいこと、積み木の板を使うとスムーズに車が走ること板を2枚つなげると車が加速し遠くまで走ることなど、いろいろ試しながら考えていると思われる。
- ⑫ 正方形や長方形の積み木を坂になっている板積み木の高さに合わせて組み合わせさせて並べる姿は身体感覚を伴った動きであり、その動きは車を落ちないようにするために壁を作ろうという必要感に基づいていると思われる。また、他児の「そうすれば横に落ちないね」「さっきより速く走って遠くまでいくようになったね」という言葉にはB児の考えが分かりうまくいったことを喜ぶ気持ちが表れている。
- ⑬ B児はタイヤを太くすると車が安定して走ると予想した。壁を作る考えが上手くいき、友達に認められた満足感が新たな考えを生み出そうという意欲につながったと思われる。「見ててよー」という言葉には自分の考えがきっと上手くいくであろうという自信が表れているのではないかと。



読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

㊦ 小学校の交流授業での情報を自分の遊びに取り入れる。  
自分のこれまでの経験と交流授業で興味をもったことをとりまぜ自分で車を作って楽しもうとする。

㊧ 友達の姿を見て自分も仲間になって楽しもうとする  
小学校での共通体験や友達と遊ぶ楽しさを実感してきたことが、みんなの車ができあがるのを待つ姿につながっている。

㊨ 遊びをもっと面白くしたいという思いが出てくる  
車をより速く走らせたいという思いが、坂をつくるとよいのではと考えたり、友達に伝えたりする姿につながっている。

㊩ 友達とかかわりながら互いの思いや考えを共有する  
友達と一緒に遊びを楽しんできた経験から友達の言葉を聞いてイメージすることができ、考えを共有することにつながる。

㊪ より遠く速く車を走らせる方法を考えて試してみる  
これまで積み木遊びや砂遊びで性質や仕組みなどを感じ取ってきた。それを基に予想したり試したりしているのであろう。

車を滑らかに走らせるには坂の角度はどれくらいがよいか、これまで遊びの中で捉えてきたことを活用し、物が転がりやすい材質や坂の角度と走る距離などの感覚を豊かにしている。

㊫ 形を組み合わせたり高さを比べたりする  
積み木遊びで様々な形を構成してきたことを活用して、斜めになっている坂の高にあわせて壁を作っているのであろう。

㊬ 新たなことを考え、友達と目的を達成した喜びを味わう  
自分の考えが上手くいったことを認められたうれしさが新たな考えを生み出す意欲につながっているのであろう。

車が落ちないように壁を作りたいという必要感から坂の高さと比べながら正方形・長方形の積み木を縦・横に組み合わせたり、車の土台（タイヤ）を太くすると安定して走るといったこれまでの経験を活用したりしている。

健康な心と体

自立心

協同性

社会生活との関わり

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

必要感に基づく体験を通した数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は遊びをもっと面白くしたいという必要感があると、これまで遊びの中で感覚的に捉えてきた物の性質や仕組み、形の構成など、たぐり寄せて活用していく。自分で考え、予想したり試したりを繰り返しながら友達と一緒に遊びを進めていくうちに、自分とは違う友達の考えに気付き自分の考えをよりよいものにしていこうとする。事例の「もっと速く遠くまで走らせよう」という言葉のように遊びをもっと面白くしたいという気持ちが原動力になり、斜面の傾斜、スピードと距離、重心、形の組み合わせなど物の性質や仕組み、図形などに興味をもち感覚が磨かれていっている。

育ちに必要と思われる環境と援助

幼児の物の性質や仕組みを感じ取ることや図形への感覚は、幼児がこれまで興味をもった様々な遊びにじっくりと取り組み、もっと面白くなるよう考えたり試したりする経験を積み重ねてきたからである。幼児のやってみよう、試したいという思いがわいたときにすぐにできる場の確保や時間の保障、材料を整えておくことや、友達と関わりながら自分とは違う考えがあることに気付き、取り入れ合うことができる仲間関係づくりが大切である。

3年保育5歳児(22) 2月 「みんなが見れる大きいカレンダーを作ろうよ」

11期(ねらい) 「友達と共通の目的に向かって取り組む中で、目的を達成する喜びを味わう」

実践事例

A児ら7人はリボン棒の踊りを考えていた。すると、A児が⑦「私リボンノート作って、メモしておくね」と言い、それぞれノートを作った。ノートには⑧7人の立ち位置を上から見て図にしたものや、隊形移動の仕方を表した矢印、また、それぞれの名前にリボンの色で塗ったものや、①、②という順番に踊り方の説明と絵などを描いた。

週明け、7人は集まると自分のノートを開き、「そうそう、思い出した」と言って踊り始めた。さらに、B児が⑨「ノートにカレンダー付けたらどう?」と言うと、C児「いいね、予定が分かるもんね」と言い、ノートにカレンダーのようなマス目がほぼ等間隔の表と数字を書いた。そして、⑩「今日は練習したから○ね」と言って今日の6日のところに「○」と書くと、他の幼児も同じように書いた。B児が「明日たんぼぼクラブ(未就園の会)の小さい子たちが幼稚園に来るって先生が言ってたからリボンショー見せてあげようよ」と言う、自分のノートのカレンダーの翌日の7日に「たんぼぼ」とそれぞれが書いた。するとアイドルごっこをしていたD児が「Eちゃんアイドルの仲間なのに抜けないでよ」と怒った。アイドルごっこリボンショーごっこの二つの遊びをしていたE児は「ごめんね、でも明日リボンショーの本番だから今日は練習したいの」と言うD児らは「そうなんだ、それならいいけど」と弱い声で言った。その様子を隣で見ていたB児が⑪「いつがアイドルさんの本番にする?」と聞くと、D児らは「Eちゃんはもうすぐお引っ越しするからその前の19日にしようよ」と本番の日を決め、それぞれのカレンダーの19日に「あいどるほんばん」と書いた。D児は嬉しそうに「カレンダー私たちも作りたい」と言うと、⑫C児が「みんなが見れる大きいカレンダーを作ろうよ」と言ったので、D児は「アイドルの子もリボンの子も見れるもんね」と言った。大きいケント紙に25日ま

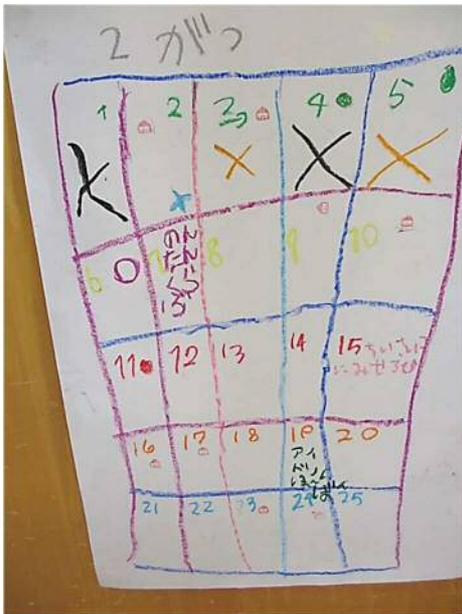
幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ A児は自分たちが考えた踊り方などを忘れたくないと思い、自分で覚えていられる方法として紙に書くことを考えたのだと思われる。また、踊り方だけでなく色々なこと覚えておきたいという気持ちから1枚の紙ではなくノートを作るとよいことを思い付いたのだろう。
- ⑧ 立ち位置や動きは文字で書くよりも円や直線など図や矢印で表した方が、また色は色を塗った方が、踊り方は絵で描いた方が分かりやすいと考えたのだと思われる。
- ⑨ B児とC児は普段目にしてるカレンダーが便利であると知っており、自分のノートにも取り入れたいと思ったのだろう。また、一つ一つのマス目が同じ幅になるように考えながら同じような間隔を空けて表を書いたのだと思われる。
- ⑩ ○と×という記号で練習した日としていない日を表すことで、文字で書くよりも分かりやすくなり、友達と情報を共有しやすくなることにつながった。
- ⑪ 幼児たちはE児がもうすぐ引っ越しをするため幼稚園に来ないことや、すぐでは準備ができないと考えたことから、19日が最適だと決めたのだと思われる。また、リボンショーごっこの子たちも仲間のE児がリボンに来られない日を分かっておきたいという気持ちから、アイドルごっこの予定もカレンダーに書いたのだろう。
- ⑫ C児とD児は大きいカレンダーがあればみんなが予定を分かって便利だと考えたのだと思われる。

でのカレンダーを書き、練習をした日は「○」19日に「あいどるほんばん」と書いた。さらに幼稚園が休みの日にはおたより帳に押すお休みの印のはんこを押してカレンダーを完成させると、廊下のよく見えるところにはった。すると㊦クラスの子はそのカレンダーを見ながら「19日はアイドル本番だって」「見に行きたいね」と言いながら微笑みながら言った。

㊦ クラスの友達が書いたカレンダーに何が書いてあるのか興味をもって見たことで、友達のしていることを知って楽しそうだなと感じている。



読み取りのポイント

育ってほしい姿との関連

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

ア 大切なことを書いて表す

忘れたら困ると思うことを覚えておくためには、紙に書いて残しておくことが有効であると考えた。

イ より分かりやすい表現の仕方を考えて表す

色や文字、図形、絵など表したいことが一番わかりやすい方法を考え、事柄に合わせた表現をしている。

ウ 生活の中で便利なことを遊びに取り入れる

カレンダーの役割を理解して活用している。

エ 空間を捉えながら書き表す

カレンダーのマス目がすべて同じになるように、上下左右の間隔をそろえながら線で書く。

オ 記号や標識を使って分かりやすく表す

記号や標識を使うことで、文字で書くよりも一目で分かりやすくなり、幼児達の認識が共通になる役割をしている。

これまでの園生活の中で記号や標識に親しむ体験を積み重ねてきたことが基になっていると考える

カ 先の見通しをもって計画を立てる

今日の日付や友達の引っ越し、本番までの準備期間を考慮して、本番をいつにすると良いかを考えている。

キ みんなで情報を共有しようとする

みんなで見るができるようなカレンダーを作ることで、情報を全員で共有しやすくなると考えた。

標識や文字の役割に気付き、必要感に基づいて活用しようとする姿と考える。

ク 友達からの情報を取り入れる

カレンダーに書いてある情報から、友達のしていることを知って興味をもち、見に行こうと行動に移そうとしている。

健康な心と体

自立心

協同性

社会生活との関わり

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

必要感に基づく体験を通した数量などへの関心・感覚の育ち

幼児は楽しいことは毎日したい、また自分なりにうまくできたことや、いい考えは誰かに見てほしい、認めてほしいと思えばそれが自信や次の遊びにつながっていく。事例では、カレンダーに自分たちが必要な情報を書くことがその情報を友達と共有し、先の予定を分かち合っ楽しみをしながら、主体的に友達と遊ぶことや友達との予定を調整する役割を果たしている。幼児は友達と一緒に大切なことを覚えていたいという必要感から文字を活用しようとする姿と考えられる。

育ちに必要と思われる環境と援助

自分たちで遊びを進めている場面を見守り、友達としたいことを実現する充実感が味わえるようにしつつも、したいことがすぐにできるような物を用意したり、実現し認めてもらうことが自信につながるような機会をさりげなくつくり出すことが必要だと思われる。

実践事例

修了が近付いてきたある日のこと、⑦最後のおやつには自分たちで選んだものを食べたいという声があがり、生活グループごとに食べたいものを決めた。おやつの時間になり、買ったおやつを、分け合って食べ始めた。A児たちのグループ(5名)は、クッキーと棒状のスナック菓子を一箱ずつ分け合うことになった。まず、クッキーを、A児の提案で1個ずつ取っていくことにした。A児→B児→C児→D児→E児の順で取っていくと、⑧3周したところでA児が「どうしよう。あと3個しかない」と言った。D児が「ええ、それじゃあ、わたしとEちゃんの分がないってこと?そんなの嫌だよねえ、Eちゃん」とE児に言うと、E児がうなづいた。しばらく考えていたがクッキーを分けるのはやめ、スナック菓子を分け始めた。A児が先ほどのように取っていきこうとすると、⑨D児が「でも、また途中でなくなっちゃうかもしれないよ」と言った。C児が「じゃあ、全部出して数えてみる?」と提案した。ほかの幼児たちも「いいねえ」「やってみよう」と賛成し、皿に並べてみるとB児が「こっち(短いもの)よりこっち(長いもの)のほうがいいよね」と言った。E児が「どうしよう」と言うと、⑩C児が「まず、大きいやつから並べて見てみない」と端をそろえて並べ、比べていった。

幼児の姿の読み取り

波線：読み取りの要素

- ⑦ 幼稚園での生活が終わりに近づいていることを感じ、残りの日々を友達と大切に過ごしたいという思いをもったため、“最後のおやつには自分たちで選んだものを”と考えたのだろう。
- ⑧ A児は、人数と残りのクッキーの数を比べ、クッキーが同じ数だけ全員に行き渡らないことに気付いた。そして、それはD児とE児の分がないということと結びついていることが「どうしよう。あと3個しかない」と困っている言葉から伺える。
- ⑨ D児はクッキーの数が割り切れなかった経験から、同じ方法では同じ結果になることを予想した。そのことを友達に伝えることで、問題を共有しようとしている。D児の言葉を受けて、C児はどうしようかと思いを巡らせ、先に数えて見当をつけるという手段を思いついて提案した。その提案を聞き、ほかの幼児たちは賛同した。このやりとりから、おやつをみんなが納得するように分けたいという思いを共有し、同じ数だけ行き渡る方法を考えるという共通の目的をもっていることが伺える。
- ⑩ 長いものから並べて分類することで、何か良いアイディアが見つかるかもしれないと考えたのだろう。また、長さを比べるときに端をそろえているのは正確に測ろうという思いがあるからであろう。

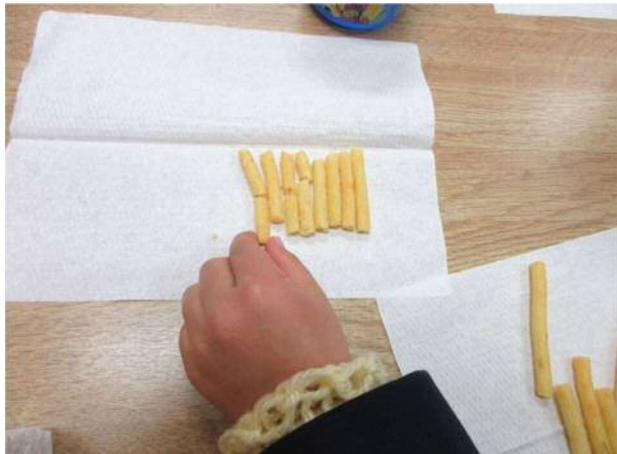
## 実践事例

D児「これ（とても短いもの）、かわいそうだね」と言うと㊦ A児「そうだ！これとこれを一緒にしたら（つなげたら）、こっちの（長いの）と同じくらいじゃない？」と、短い2本を縦に並べて、長いものと長さをそろえた。㊦ B児「わあ！なるほどね！」D児「これなら、同じくらいでいいよね」、C児「うん」と納得し、組み合わせて長さをそろえていった。

それが終わると、好きなものを順に選んで取り、どの子もうれしそうにおやつを食べた。

## 幼児の姿の読み取り

- ㊦ 長いものと短いものを見比べて、その差を埋めると長さが同じになると思い付いたのではないか。
- ㊦ 友達の発言に耳を傾け、賛同したり共感したりしている姿から、友達と考えを出し合ったことでみんなが納得できる方法を見つけられたうれしさや、目的を実現できそうだという期待感を共有していることが伺える。そのうれしさや期待感が、組み合わせて長さをそろえるという目的の実現のための方法を友達と一緒に試そうという行動を後押ししている。



## 読み取りのポイント

## 育てほしい姿との関連

## 幼児期の終わりまでに 育てほしい姿

### ア 見通しをもち、やりたいことを決めてやろうとする

修了が近付いてきていることを感じ、残りの日々でしたいことを考え、自分たちでできることを決めていく。

### イ 人と物を対応させて数え、足りないことに気付く

クッキーが残り3個になったとき4、5番目の友達の分がないことを予想する。おやつが足りない友達のことを思い、足りないことを困ったと感じる。

### ウ 経験から予想したことを伝え、問題を共有する

経験をもとに同じ方法では割り切れなくなるかもしれないことを予想し、それを友達に伝えて問題を共有しようとする。

### エ 分類することで見当をつけることを提案する

長さを比べ、長いものから並べていくと何かつかめるかもしれないと予想し、提案して、やってみる。

長さを比べるためには、同じ場所を起点にするとよいことを、これまでの園生活の中で感じ取り活用していると考える。

### オ 長さを比較し、組み合わせてそろえることを思いつく

長いものと短いものを比較し、長さの違いに着目して同じ長さにする方法を考え、短いものを組み合わせることを思いつく。

必要感に基づき長さを比べたり、組み合わせて長さをそろえたりすることで数量や図形に対する感覚が磨かれていくと考える。

### カ 友達の発言に耳を傾け、賛同したり共感したりし、目的が実現できそうなことを喜び合う。

友達の考えを聞いたり見たりして理解し、目的が実現できそうなことを喜び、その方法を一緒にやってみる。

健康な心と体

自立心

協同性

道徳性・規範意識  
の芽生え

思考力の  
芽生え

数量や図形、標識  
や文字などへの  
関心・感覚

言葉による  
伝え合い

## 必要感に基づく体験を通じた数量などへの関心・感覚の育ち

幼稚園で最後のおやつに、特別な思いを一人一人がもち、分け合おうとしていた。クッキーが人数分で割り切れないと気付いたとき、自分の分が足りなくなるかもしれないというD児達の気持ちを、他の幼児たちは“友達も食べたいだろう”と自分と重ねて感じていたのだろう。そのため、みんなが納得するように分け合おうと、それぞれが自分なりに、クッキーを同じ数だけ取って残りは置いておく、棒状のスナック菓子の長さをそろえるなど、数や量が平等になるような具体的な方法を考えた。そして、その考えを友達に提案したり友達の考えを聞いたりして、数や量、長さを比較したり予測したりし、みんなで同じ目的に向かって気持ちを寄せ合いながら分け方を決めようとした。これまで一緒に生活するなかでつながりを感じ、一人一人を大切に思えるようになっていたので、思いや考えを伝え合って、みんなが納得できる方法を見つけようとする事ができたのだろう。

## 育ちに必要と思われる環境と援助

したいと思ったことを実現するために考えたり工夫したり、友達の考えを聞いたりする力を育てたい。そして、友達と思いや考えを出し合い、仲間と目的を共有して自分たちで遊びや生活を進めていく楽しさや充実感を味わえるようにしたい。そのためには、互いに思いを伝え、分かり合ったり気持ちに寄り添ったり共感したりして一緒に遊びや生活を進めることがうれしい、楽しいと思えるような友達関係を築けるように支えること、幼児自身が考えを巡らす姿を見守り、気づきを待つことが援助として大切である。

## IV 調査研究の成果と課題

### 1 調査研究の成果

— 必要感に基づく体験を通じた数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 —

#### (1) 実践事例の読み取り・分析をするなかで

- 実践の中から幼児の言動などを切り取り事例として記述する際には、実践事例を執筆する保育者の主観を交えず、幼児の様子や表情、言動を客観的に書くようにした。そのことにより、複数の委員で実践事例を検討する際、執筆する保育者の主観にとらわれず、多面的に話し合うことができた。
- 実践事例を複数の目で多面的に読み取る中では、保育者の経験や考え方により様々な視点や見方がある。執筆する保育者が幼児の言動などから数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚の育ちを読み取る際、育ちを読み取りすぎてしまい実際の幼児の実態と離れてしまったり、それとともに必要と考える保育者の援助がずれてしまったりすることもあった。それぞれが自分なりの言葉で話し合いを重ねていくことにより、読み取りを深めることが大切であった。

また、このような話し合いを重ねることにより、幼児が夢中になって遊ぶ中で感じ、考え、捉えていることを、保育者自身が読み取る際の見方や考え方の広がりにつながることも分かった。
- 実践事例検討会では、数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚の育ちを丁寧に読み取りながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考えていった。日々の遊びから実践事例を切り取る際、はじめは数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚を育みやすいと思われる遊びに目を向けることが多かった。しかし、検討会で話し合いを重ねる中で数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚の育ちは、一見関係がないように思われがちな幼児の遊びや生活の中にも様々に見られることが分かり、実践事例を見取る保育者の感覚も豊かになったと感じる。

#### 本調査研究で収集した実践事例一覧

時期	実践事例番号	タイトル
3年保育 3歳児	5月 (1)	「これなあに？」
	5月 (2)	「だって、ポコポコってならないもん」
	9月 (3)	「『えき』って書いて」

3年保育 3歳児	9月	(4)	「これはお父さん恐竜の歯だ」
	10月	(5)	「わたし、クレープが作りたい」
	11月	(6)	「こんなに長いよ」
	11月	(7)	「これ滑り台屋根！」
	11月	(8)	『かえるさんへ』って書いて。『大好きだよ』って書いて」
	2月	(9)	「このくらいにしておくことにした！ちょっと長すぎかも」
3年保育 4歳児	5月	(10)	「125個」
	9月	(11)	「お部屋の中には入って来れないよ」
	9月	(12)	「8匹で力を合わせて」
	11月	(13)	「これ形が違わない？」
	11月	(14)	「誰が植えたか分かるように名前を書いたら？」
	12月	(15)	「先生、恐竜できたよ」
	1月	(16)	「みさきちゃんのみ」
3年保育 5歳児	6月	(17)	「1個ずつ出して並べて数えたらいいじゃん」
	6月	(18)	「34から35にかわった」
	11月	(19)	「あ、3匹のイルカもいた！」
	11月	(20)	「いっしょにいるよ とべらちゃん」
	12月	(21)	「もっと速く、遠くまで走らせようよ」
	2月	(22)	「みんなが見れる大きいカレンダーを作ろうよ」
	3月	(23)	「これなら同じくらいでいいよね」

## (2) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の育ちの視点から

### 数量への関心・感覚がどのように育まれていくのか

3歳児事例(2)5月「だってポコポコってならないもん」では、園に慣れて自分で動き出した3歳児が水でしたいように思いのままに遊ぶことを繰り返すうちに、いつの間にか水の量と重さが比例する関係に感覚的に気付いていく。また、それを「ポコポコってならない」と自分なりの言葉で表そうとしている。

3歳児実践事例(6)11月「こんなに長いよ」からは、空き箱や広告を丸めた棒などの材料を思いのままにくっつけたりつないだりして繰り返し遊び、それを見立てて遊ぶうちに、短いものをつなぐと長くなるという長短の関係性を感じている。またそれを「こんなに長いよ」と言い、自分なりに長さを表現しようとして「こんなに」という表現をしている。

更に、3歳児実践事例(11)2月「このくらいにしておくことにした！ちょっと長すぎかも」

では、それまでは保育者が扱いやすい長さに切った紙テープを使って繰り返し遊んできたところを、幼児が使いたい長さに自分で切って使うことができるようにしたところ、初めはうれしさから引っ張り出して長くすることを喜んでいたが、遊びながら自分に扱いやすい長さに気付き、自分の用途に適した長さを感じ取るようになっていく。また、それを「このくらいにしておく」とか、適した長さを表現したり「長すぎかも」と表したりしている。

保育者をよりどころに安心して過ごすようになる3歳児は、自分から動き出し心動いたものをしていようとして遊ぶことを繰り返すうちに、それが身近なものになっていく。その中で、いつの間にか遊びや生活に必要な関心・感覚や気付きが育まれていくと分かった。

キーワードは

心動いたものをしていようとすることを繰り返す中で、感覚的に捉えていく

4歳児実践事例(10)5月「125個」では、ずっと成長を楽しみに育ててきたスナップエンドウを収穫するという心躍る面白さから、実際に自分の手で次々に採るうちにかごの中が見た目にも増えてきて、さらにどンドン採ることを楽しんでいる。そして、見た目の多さを実際に持って確かめようとしていて、量と重さが比例することを予測するようになってきた。そして「重たくなったよ」と抽象的な言葉で表していたのを、「何個？」と聞かれたことで「125」という自分なりに「多い」イメージの数で表し直すことで、自分なりに意味づけをして納得しているのであろう。

4歳児実践事例(12)9月「8匹で力を合わせて」では、恐竜の人形を自分の仲間の一匹として愛着をもって繰り返し遊ぶ中で、その日は格別たくさん使うことができ、自分が満足感を得ているこの「たくさん」の恐竜は何匹だろうかと、そこにある集合体は一つ一つのまとまりであり「たくさん」と捉えていたものの正しい数を知りたいと思うようになってきた。そのために試しながら新たな数え方を生み出そうとしている。また、「8匹」という数字に「力を合わせて」という言葉を加えて、8匹という数が自分にとって意味があることを表そうとしている。

自分の好きな遊びやものにこだわり、興味や関心を深めていく4歳児は、大切にしているものに思いをもって関わることを通して、量や数を捉えようとするようになってくる。やってみること(収穫する・遊ぶ)、目で見ること、持ってみること、集めて抱えてみることなど体を使って数や量を実感する体験をしながら、その大切なものの数を正確に知ろうとして、数え方を考えようとする意欲も育まれていくことが分かった。

キーワードは 思い入れあるものと身体機能を使って関わり、体感する

5歳児実践事例(17) 6月「1個ずつ出して並べて数えたらいいじゃん」では、年中時に植え“ずっと大切に育ててきた”という待ちわびる思いとたくさん収穫できた喜びが重なったこと、学級の友達との関係も深まってきて共通の関心になったことなど、様々な要因が重なって、「どれくらいあるのかをみんなで確かめる」という活動を生み出した。数の数え方を見ると、4歳児では、自分なりの方法で数えて納得していたが、5歳児になると、自分にとっても仲間にとっても分かりやすく納得のいく方法を提案しようとしている。また、ジャガイモを箱にしまうときにも、大小で分けようとしたり、その分け方の基準としてみんなが納得のいくような普通の大きさのものを選んだりして、誰がやっても分かる方法を提案していて、数を確かめることや大きさを比べて分けることなどを、大切なものを捉える情報として、使うようになっていくことが分かった。更に、“お母さんにも伝えたい”と紙に書いておこうとする姿は、やはり、数値化することがそのものを捉える情報として有効であること、情報は言葉だけでなく文字化することで正確に伝わることも気付き始めていることが分かった。そのことは、5歳児実践事例(18) 6月「34から35にかわった」でも捉えられた。実践事例(17)のジャガイモと同様に、「成長を楽しみに大切に育ててきた」トマトだからこそ日々の変化に気付き、それを自分が本当の数を知りたい欲求とみんなに知らせたい欲求に突き動かされて、正しく数える方法を試行錯誤しながら見付けだしている。更には、そこで自分が気付いたことをみんなに伝えるためには、どんな言葉の表現や文字がよいかを、様々な手段や方法を駆使して表し伝えようとしている。35個実ったときには、“35人のクラスだからみんなまで食べられる”と結びつけ、クラスの仲間を大事に思う気持ちの育ちが、“ニュースに書かなくては”という意欲につながったことが分かった。

自己の力を十分に発揮し合いながら生活するようになる5歳児は、仲間との関係の深まりと共に、興味や関心、感動や喜びを共有することで、「みんなにとって大切なものやこと」として情報も共有したいと考えるようになってくる。自分の知りたいことはみんなが知りたいことという育ちが生まれてくる。そのために「数える」「並べる」「比べる」「分ける」などをみんなで行ってみようとする。そして、その方法も、自分の経験から得た方法を提案したり友達が考えた方法を取り入れたりして、共有しながら育まれていくことが分かった。

キーワードは

友達関係の深まりと情報の共有化。「知りたい」から「伝えたい、分かり合いたい」へ

このように、幼児は、幼稚園生活を通して発達や興味・関心に応じた遊びや活動の中で、大切な遊具や材料、自然物などに対して、自分なりにあるいは友達同士で強い思い入れをもったり関心を広げたり深めたりしながら、そのものの数や重さ、量や大小などを捉えようとするようになる。また、その関心や感覚を、自らあるいは友達との関わりから、主観的な捉

えから客観的な情報として変化させていく。そして、その方法を獲得しようとして積み重ねてきた気付きの中からいろいろな方法を駆使し、更に感覚を豊かにしていくことが分かった。

### 図形への関心・感覚がどのように育まれていくのか

3歳児実践事例(4)9月「これはお父さん恐竜の歯だ」では、虫を恐竜に見立てるというその子なりの発見や発想が発端となった。大きなとがった石を見て“お父さん恐竜の歯”とひらめいたり、大きな石の塊を“恐竜のトゲトゲ”(背中の突起)、小さなとがった石は“赤ちゃんの歯”と思ったりしていて、偶発的な出会いの驚きから、**見立てやつもりを楽しみながら、身近な自然物のもつ形の面白さを感じ取っている。**

3歳児実践事例(5)10月「わたし、クレープが作りたい」でも、木製遊具をジェットコースターに見立てて遊び、保育者の「チケットください」をきっかけにして、「遊園地ってことね」とイメージが膨らみ、そばに落ちていたイチョウの葉をチケットに見立てている。さらに、イチョウの葉の色や形手触りからクレープを思い浮かべ、クレープづくりに発展していく。その中では、そばに落ちている木の実をジャムや果物に見立てることを思いついていく。

園生活に慣れ、自分で動き出すことで人やものへの興味を広げていく3歳児にとって、身近な環境の中にも、新鮮な出会いがたくさんある。幼児たちは、自分がこれまで見たり触れたりしてきたものと、偶然出会った別のものを、その特徴から直観的に結び付けて連想し、見立てて遊ぶことを楽しむようになる。そして、遊びを通して、そのもののもつ特徴を、形だけでなく手触りや色、匂いなど諸感覚で感じっていく中で、ものへの関心・感覚を豊かにしていくことが分かった。

キーワードは **直観的なひらめきと諸感覚を通しての関わりをきっかけにして**

4歳児実践事例(13)11月「これ形が違わない？」では、ドングリをたくさん集める面白さを味わい、たくさんあることで存分に触れてみて、その色や大きさ、音から「お母さん」や「赤ちゃん」に見立てるうちに、大きさや形ごとに分けることが面白くなっていく。4歳児にとっても、**見立てたりつもりになったりしてイメージを膨らませていく**ことは、そのものへの興味や関心を深めていくことにつながると分かった。更には、形や大きさの違いが種類の違いへと興味が広がり、名前があることにも気付いたりしている。

また、4歳児実践事例(15)12月「先生、恐竜できたよ」では、3歳児と同じように園庭の石を恐竜の化石と見立てている。その中では、より具体的に細かく特徴を捉え見立てることを楽しみながら並べていき、「ティラノザウルス」を作り上げた。それは、**一つ一つの形を組み合わさって別の形を作っていく**ことを感じとっている育ちであろう。

慣れ親しんだ環境の中で、発見したり試したりすることが面白くなってくる4歳児は、拾ったり集めたりして身近なものとの出会いを楽しんだり、触ったり比べたりしながら見立てやつもりを楽しんだりして、そのものの特徴を細かく捉えるようになっていく。その中で、形への関心・感覚も、一つ一つとしての捉えから、集まったり組み合わせたりしたものとの形へと膨らませていくことが分かった。

キーワードは **個と集合・組み合わせの関係の気付きへ**

5歳児実践事例(17) 6月「1個ずつ出して並べて数えたらいいじゃん」では、並べたものを大小で分けるために、「普通の」と捉えたジャガイモと比べながら、似たようなものだが少しずつ異なる一つ一つのジャガイモの形をよく見ようとしている。その中では、迷ったときには隣に置いてみて「普通の、より背は高いけれど細いから小さい方の箱に入れよう」としている。ものの形を立体的に捉えようとしていて、**体積の概念**も育まれていると思われる。

経験の積み重ねから得た考えを生かしながら生活するようになる5歳児は、3・4歳児のような形そのものの面白さを感じることから、「箱に入れるために」といった**目的に応じて、形をしっかりと捉えようとして関心・感覚が育まれていることが分かった。**

キーワードは **必要感と平面から立体の感覚へ**

このように、幼児は、身の回りにある様々なものを自分の知っているものに見立てたり、つもりを楽しんで関わったりして、そのものの特徴を諸感覚を使って捉えながら、関心・感覚を豊かにしていく。これまで、幼児にとっての必要感は「遊びを面白くすること」であったが、5歳児になると、目的に応じて順番に並べる、分類する、比べるといった方法を使おうとし、数量の関心・感覚と関連させながら形に対する関心・感覚も育まれていくと分かった。

### 標識や文字への関心・感覚がどのように育まれていくのか

3歳児実践事例(1) 5月「これなあに？」や実践事例(3) 9月「『えき』って書いて」では、それが自分にとって**思い入れのあるもの、思い入れのある場所を示している**と知って、身の回りにある表示に興味をもったり表示を使ったりして、所属意識が芽生えていくことが分かった。また、りんご組の「り」も「えき」も文字で表してはいるが、文字としての認識はあまりなく、表示として捉えているように思われる。

3歳児実践事例(8) 11月「『かえるさんへ』って書いて。『大好きだよ』って書いて」では、

大好きな兄弟から手紙をもらったことで、うれしくて読んでもらったり、保育者に書いてもらったりしている。また、自分でも文字を書いているつもりでぐにゃぐにゃを書いてみて、模倣からその子なりの文字への関心を示し始めている。年長組から郵便物が届くという遊びの広がり、あこがれの年長を真似るということにつながっていることが分かった。3歳児も後期に差し掛かり、園生活を十分楽しむ中で、身近に感じる人や興味を示すことが増えてきた。その中で、文字への興味も育まれつつあることが分かった。

周りの人やものへの興味や関心を広げ、いろいろな遊びを楽しむようになる3歳児は、自分にとって思い入れのあるものや場所が見付かることで、標識や文字への関心・感覚が育まれると分かった。また、遊びや生活の中に様々な文字が使われていることに触れながら、文字を使うことへの興味ももつようになっていくと分かった。

キーワードは **生活や遊びの充実からの気づきと興味**

4歳児実践事例(11) 9月「お部屋の中には入って来れないよ」では、ザリガニが逃げるといふ自分にとっては大変なことが起きたことから、**必死の思いを何とかザリガニに伝えよう**として進入禁止マークを使って表そうとしている。4歳児なりに**標識の意味や使い方を分かっている**ことが見て取れる。また、この事例では、テラスに置いたザリガニの入ったたらいの周りに「入れ代わり幼児が集まっていた」とあるように、“友達が集まっているところには何か面白いことがあるそう”と、**周囲の様子から情報を得ようとする**育ちも見られる。このような育ちは、次の事例にもつながっている。4歳児実践事例(14) 11月「誰が植えたか分かるように名前を書いたら」でも、自分たちが植えた大事な芋のつるを守りたい思いや、仲間のものであるという気持ちから自分たちの名前を書いてもらって立て札にしている。これも、「誰が植えたか分かるように」と幼児が言葉で表しているように、そのためには**文字で表示する方法がある**ことが分かっている姿である。

自分の遊びを面白くしようとして、好きなものや友達との関わりを深めていく4歳児は、周囲の環境にあふれている文字・表示などに目を止め、意味を知り、それを自分なりに使ってみようとするようになる。また、「字、書けないもん」「名札見ないとかけない」と言っているように、別の事例の3歳児に見られたぐにゃぐにゃでも“文字を書いているつもり”の姿から、“**誰が植えたか分かるように**”という目的も見られるようになってくる。数量と同様に、自分に対しても周りに対しても情報を伝えるという本来の意味で使おうとするようになってきたことが分かった。

キーワードは **文字や標識の役割や使い方に気付く**

5歳児実践事例(18) 6月「34から35にかわった」では、保育者が、幼児たちの育ちを踏まえて「おやさいニュース」を貼るためのボードを作ったことで、自分が気付いたトマトの変化をみんなに知らせようとした。伝えたい思いから、野菜に付いている表示を見たり絵本や図鑑に載っている文字を手本にしたりして、気付いたことを自分なりに正確に書こうとしている。それは、文字化することで自分自身の気付きを確かなものにする経験にもなっている。「伝えたいこと」は文字や数字などで表すことができること、必要な情報は身近にあるものから得ることができることも分かり、それを利用する力も育ってきたことが分かった。

5歳児実践事例(20) 11月「いっしょにいるよ とべらちゃん」では、裏庭に落ちていた黒く汚れた木の名札を“誰かの名札だろう”“とべらって何だか不気味だな”“おばけだよ”とイメージしたことから、仲間の中で情報を行き交わせながらどんどんイメージを膨らませていく。木の名札が落ちていた場所にある壁の穴やヨウシュヤマゴボウの切株やイチジクの枝、木の名札の薄汚れ加減、「とべら」という耳慣れない響きなど全てが、目からも耳からも情報として伝わることで、それぞれが自分の想像したことや感じたことを言葉にし合いながらさらに想像を膨らませて「かわいそうなとべらちゃん」に思いを寄せていく。そして、片付けの時間になったときに、そこに残していくとべらちゃんが寂しがらないようにと、木札のそばの地面に自分の顔を描いて寄り添おうとしたり、「いっしょにいるよ」「だいすきだよ」とメッセージを地面に書いて安心させようとしたり、「また来るからね」「寂しくないよ」と声を掛けたり、とべらに見立てた葉っぱを撫でたりして、自分たちの気持ちを様々な方法を使ってとべらちゃんに伝えようとしている。これまでの事例にみられた「ジャガイモの数を書いて伝える」「トマトの変化をニュースに書く」ことは、自分なりの気付きを書いて知らせたいという育ちであった。この事例からは、“寂しくないよ”“大好きだよ”と、自分の気持ちを文字で表そうとするようになってきたことが分かった。

仲間と互いの気持ちや考えを尊重し合いながら生活するようになる5歳児は、この時期になると、相手を思いやる気持ちの育ちと共に、その思いを伝える方法として文字を使うこともできるようになってくると分かった。また、書いて伝える行為自体を楽しんでいると感じる。

キーワードは 情報の伝え合いから感情の交流へ

5歳児実践事例(22) 2月「みんなが見れる大きいカレンダー作ろうよ」では、仲間ですり棒の踊り方を、立ち位置を上から見た図にしたり、隊形変化を矢印で記したり 仲間の名前をリボンの色で塗り分けたり、踊り方に番号を振ったりして、これまで自分の中に蓄えてきた情報の表し方を駆使しながら各自のノートに書いている。自分の覚えのためではある

が、それは、“自分がしっかりと踊ってみんなのショーをよくしたい”という**共通の目的や願いが込められている**ことが伺える。また、目標の日が、誰から見ても分かるようにカレンダーにして表し、必要な情報を「○×」といった記号で表している。さらには、別のグループの取り組みにも影響することに気付いて、他の遊びに取り組んでいる仲間にも分かるように大きなカレンダーにすることを思い付いている。その中には、引っ越しをする仲間の予定も含めて、互いが必要と思われる**情報を、誰が見ても分かるように示そうと工夫する姿**が見られる。

互いの力を発揮し合いながら生活を充実させていく5歳児は、学年の後期になると、仲間同士で共通の目的に向かって、必要な情報を、体験を通して得てきた様々な方法(表・文字・数字・記号など)を駆使して、表すようになることが分かった。また、5歳児11月実践事例(20)と同様に、自分でノートに書くこと、数字や文字、記号などで書き込んでいくこと自体が、幼児たちにとって夢中になれる充実した活動になっていくと感じた。

キーワードは

**協同性の育ちと情報の共有化「確認したい」から「互いに確認し合いたい」へ**

以上のことから、年齢の小さい時期には、自分の遊びや生活の中で豊かな体験を通して、数や量、図や形、文字、標識といったものに、別々に関わりながら、その関心・感覚が育まれている。それが、5歳児になると、それらを柔軟に関連付けながら意図的に遊びや生活の中で使おうとするようになることが分かった。さらに、仲間とのあるいは学級での様々な取り組みの中で、そのときどきの必要感で繰り返し使っていくことから、関心・感覚が豊かになっていくことが分かった。

そして、事例が示すように、協同性の育ちとともに情報を共有する必要が生じてきており、自分にとっての必要感が、友達や大切な仲間同士での必要感になっていくことが分かった。

幼児たちは、幼稚園で様々な体験を通して、数量や図形、標識や文字などに関わりながら関心・感覚を育てていく。その「様々な」とは遊びや活動の種類の豊富さのみならず、“面白いな”“不思議だな”“すごいな”“怖いな”“うれしいな”“心配だな”“かわいそうだな”“大好きだよ”など、様々な心揺さぶられる感情体験をすることがとても大切であることが分かった。

### (3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連の視点から

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5つの領域のねらい及び内容に基づき幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿である。

そして、実際の指導では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は個別に取り出して指導されるものではなく、幼児の自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に  
 応じて育っていくものである。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児に  
 なってからではなく、それ以前から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期  
 にふさわしい指導を積み重ねていく必要がある。

本市の実践事例の分析では、各年齢の実践事例から幼児の姿を読み取り、読み取りのポイ  
 ントをひろい出しながら(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の育ちと相互に育ち  
 つつある、その他の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても分析した。「幼児期  
 の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児後半の姿であるため、3歳児や4歳児の実践事  
 例では、その時期のどのような姿が5歳児後半の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」  
 につながっていくのかを考えた。

ここでは、各実践事例の「読み取りのポイント」を「幼児期の終わりまでに育ってほしい  
 姿」とどのように関連付けて考えたのかを示している。

【実践事例】	
3年保育3歳児(6)「こんなに長いよ」(11月)より	
読み取りのポイント	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連
㊦ 繰り返したいことをして遊ぶ	<p>《健康な心と体》                      したいことが思うようにできるうれしさを感じながら、繰り返し遊びを楽しむことは、心と体を働かせ主体的に遊びや生活に取り組む姿につながり、その中で健康な心と体が育まれていく。</p> <p>《自立心》                      幼児は、日ごろから保育者に自分の気持ちを受け止めてもらっている安心感や信頼関係を基盤に、身近な環境に主体的に関わりながらしたい遊びを楽しもうとし、自分の力でやろうとする気持ちをもつようになっていく。</p>
㊧ 自分の思ったように長くなったうれしさを表す	<p>《自立心》                      幼児は信頼する保育者にうれしい気持ちを受け止めてもらうことで満足感を味わったり、そのことを支えに意欲的に行動しようとしたりする。</p> <p>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》                      長くしたいと長さに興味をもちつなげて貼ったら、思うように長くなったことがうれしくて、興味を深めている。</p> <p>《豊かな感性と表現》                      「こんなに長いよ」という表現に長くつなげた誇らしさやうれしい気持ちが込められており、信頼する保育者に聞いて受け止めてもらうことで、自分なりに表現することの喜びを感じている。</p>
㊨ 長さを見せようと、立ち上がって自分の前に立てる	<p>《思考力の芽生え》                      どのくらい長いかを保育者に見せるにはどうするとよいかと考え、自分の体の前に立てて背の高さと比べてみることを思い付いている。</p>
㊩ 自分の背の高さと比較する	<p>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》                      保育者の言葉により、改めて自分の背の高さと棒の長さを見比べ、長さを感覚で捉えている。</p>

④ 気になる友達と同じ物をほしくなる	<p>《協同性》</p> <p>気になる友達の存在を意識し同じようにしてみたい気持ちから、同じ物を作ることにより、友達への意識や親しみが増していく。</p>
⑤ 同じ物を同じ数使って作ると、同じような長さの物ができると感じる	<p>《思考力の芽生え》</p> <p>気になる友達のしていることをよく見て、同じ数の棒をつなげれば同じ長さになるのではないかと感じやってみようとしている。</p> <p>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》</p> <p>同じ物を同じ数つなぐと同じ長さになるのではないかと、数や長さを感覚的に捉えている。</p>
⑥ 気になる友達との触れ合いを心地よく感じる	<p>《協同性》</p> <p>友達が自分と同じように棒を作ったことにうれしさを感じ、棒を並べて比べることで友達とつながる心地よさを味わっている。</p> <p>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》</p> <p>横に並べて長さを比べてみることを通して、長さを実感している。</p>
⑦ 気になる友達と同じようにできたうれしさを伝える	<p>《協同性》</p> <p>気になる友達と同じ物を持つうれしさ、それが同じくらいの長さであるうれしさを共感し、友達とのつながりを一層心地よく感じている。</p> <p>《言葉による伝え合い》</p> <p>友達の「同じくらい」という言葉を繰り返すことで、友達と同じであるうれしさを言葉で表している。</p>

【実践事例】	
3年保育4歳児(12)「8匹で力を合わせて」(9月)	
読み取りのポイント	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連
⑦ 安心して自分の好きな遊具で遊ぶ	<p>《健康な心と体》</p> <p>保育者を心のよりどころに大好きな遊具を必要なだけ持ってきて、自分のしたいように動かしながら心ゆくまで遊ぶことを楽しんでいる。</p> <p>《自立心》</p> <p>保育者との信頼関係を基盤に大好きな遊具にじっくりと関わりながら遊ぶ中で、自分なりに主体的に様々な活動を楽しむようになっていく。</p>
⑧ イメージしたことを人形の動きや言葉として表す	<p>《言葉による伝え合い》</p> <p>人形に思いを重ね、人形の気持ちや思いを言葉で表現し、人形同士の言葉のやりとりを楽しんでいる。</p> <p>《豊かな感性と表現》</p> <p>イメージや言葉に合わせて人形を動かし、場面や人形の気持ちを表現している。</p>
⑨ 数える声のリズムや速さに合わせて指で指し示す	<p>《健康な心と体》</p> <p>声に出しながら人形を数える速さやリズムに合わせ、人形を一つ一つ指で指し示している。</p> <p>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》</p> <p>大好きな人形がいくつあるのか知りたい気持ちから、「たくさん」を具体的な数に置き換えようと、一つ一つを指で指しながら数える。</p>

㊦㊧ よりよい方法を考え て試してみようとする	<b>《思考力の芽生え》</b> 一回目の数え方では正確ではないかもしれないと感じ、確かめようと 新たな数え方を試そうとすることは、幼児が新たな考えを生み出そうと する思考力の芽生えにつながる。
㊨ 考えた方法が予想通り の結果となりうれしさを 感じる	<b>《自立心》</b> 考えた方法がうまくいったうれしさを感じることで、意欲や自信を もって行動しようとする姿につながっていく。
㊩ 数を量(力の大きさ)と して捉える	<b>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》</b> 大好きな人形の数を、数だけでなく集合した力としても捉えている。

【実践事例】	
3年保育5歳児(18)「34から35にかわった」(6月)	
読み取りのポイント	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連
㊦ 植物の成長に触れ、感 動を言葉にして伝える	<b>《自然との関わり・生命尊重》</b> 自分で育てた野菜の成長に気付き喜びを感じる姿は、自然への愛情 をもつ姿につながり、その中で生命尊重の気持ちが育まれていく。 <b>《言葉による伝え合い》</b> 幼児は、感動したことを心を通わす相手に伝えようとする。それを 受け止めていくことで言葉による伝え合いを楽しむようになる。
㊧ 植物に愛情をもち、見 通しをもって関わろうと する	<b>《健康な心と体》</b> 生活の見通しをもって自分のやりたいことに向かおうとしている。 <b>《自然との関わり・生命尊重》</b> 植物は水をやらないと枯れてしまうことが分かり、行動する中で変 化を感じ取っている。
㊨ 伝えたい必要感に基づ き文字を活用する	<b>《自立心》</b> 「おやさいニュース」を書くために知らない文字を見当を付けて調 べるなど、やりたいことを自分の力で行うために考えたり工夫したり している。 <b>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》</b> これまで遊びや生活の中で文字に親しむ体験を重ねてきたことで、 知らない文字も調べたり教えてもらったりして書きたいという意欲 をもつ。
㊩ 文字から情報を得るこ とを楽しむ	<b>《社会生活との関わり》</b> 「おやさいニュース」から、新たな情報を得ることを楽しむ姿は、 情報を取り入れ、活用していくことにつながる。
㊪ 文字と言葉で伝え合い を楽しむ	<b>《協同性》</b> A児がトマトの实の数に関心を持ち続けていることがC児たちにも 分かっている。互いの思いを共有する姿につながっている。 <b>《言葉による伝え合い》</b> A児の「おやさいニュース」から情報を得た喜びが心を通わせたり言 葉による伝え合いを楽しむ姿につながる。
㊫ 多くの数を数える時の 良い方法を考える	<b>《思考力の芽生え》</b> 多いと感覚的にとらえた数を正確に数えるには、起点を決めるとよ いのではと考えたり予想したりと多様な関わりを楽しんでいる。 <b>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》</b> これまで遊びや生活の中で数量に親しむ経験を重ねてきたことが、 数えてみたいという意欲につながっている。

<p>㊦ 物の数と人の数を対応させて考える</p>	<p>《協同性》          学級の人数とトマトの実の数が同じであることが分かり収穫の喜びを友達と共有したい思いをもつ。          《道徳性・規範意識の芽生え》          学級の友達も収穫を楽しみにしていることが分かっているので、全員が食べられる数収穫したら一緒に食べようと決めている。</p>
<p>㊧ 文字の役割に気付き、活用する</p>	<p>《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》          平仮名や片仮名を読んだり書いたりして親しむ体験を重ねる中で文字の感覚が磨かれていっている。          《豊かな感性と表現》          トマトの実が35個になったという喜びを自分なりの表現で友達に伝えるように表している。</p>

以上の取り組みから次のことが分かった。

- 実践事例の読み取りから幼児の育ちのポイントをあげ、それらが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とどのように関連しているのかは、新しい幼稚園教育要領や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針 中央説明会資料(幼稚園関係)(平成29年7月)(内閣府, 文部科学省, 厚生労働省)」を何度も読み返しながらかえてきた。これまでの経験を基に、幼児の姿と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながりを感覚的に捉えるにとどまらず、関連していると考えた根拠を文字にして表すことにより、保育者の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への理解が深まった。このような積み重ねにより、日々の実践や振り返りの中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識することができるようになっていく。そして、幼児の育ちつつある姿を捉えることができるようになることで、幼児の学びの質が変わってくると考える。
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚を豊かにしていると思われる実践事例を読み取る中で幼児の育ちを分析すると、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の育ちは、他の九つの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とも複雑に絡み合いながら共に育っていくことが改めて分かった。自立心や人間関係など「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の他の項目の育ちがあるからこそ興味や関心をもつこともあれば、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚とともに育つ姿もあり、一つだけを取り出して考えたり指導したりするものではないことを再確認することができた。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育要領第2章のねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿と示されている。3歳児、4歳児の実践事例を読み取り分析していく中でも、3歳児や4歳児において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながっていくだろうと思われる姿を読み取ることができた。3歳児や4歳児から、「幼児

期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した幼児期にふさわしい指導を積み重ねるためには、保育者がその姿につながるであろう育ちを捉えることが必要である。その上で幼児の発達の見通しと目の前の幼児の実態に応じた指導を丁寧に積み重ねることが大切であることを再確認した。

#### (4) 幼児期にふさわしい評価の視点から

新幼稚園教育要領では、評価について、「(1) 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること」とし、一人一人の幼児の行動の仕方や考え方などに表れたその子らしさを大切に、育っていく過程を重視する必要があること、つまり深い幼児理解に基づいた評価を行うことの重要性を示している。さらに「(2) 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が引き継がれるようにすること」とし、各園の複数の教職員で、評価の判断の根拠となっている考え方を突き合わせながら、より多面的に幼児を捉える工夫をする必要があることを示している。

幼児期にふさわしい評価について、この2点から考えておきたい。

##### ① 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進めることについて

幼児の遊びや生活の過程を丁寧に捉え、幼児理解を深めるには、幼児の表面に表れた言動を深く読み取り、幼児一人一人がどのように環境に働き掛け、そのことから環境の何に興味や関心をもち、自分なりにどのように試行錯誤し何を見付けようとしているのか、その繰り返しの中で何に気付いたのか、更にどのような関連性を予想し確かめようとしているのかなどに心を寄せる必要がある。今回の研究テーマである「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」では、具体的に幼児は数量等にどのように関心をもち、どのような感覚で捉え、体験を重ねる中でどのように豊かにしていくのか、明らかにするとともに、保護者や地域社会への発信や小学校の教師等と共有する上で、幼児の育ちの姿を把握することは必要なことであろう。

##### こうした意味から、上記 (2) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の育ちの視点から

でまとめたキーワードは、まさに、幼児期における数量や図形、標識や文字等への幼児の興味・関心の在り方の一例を示したものと言える。これまでの保育においても、幼児期の数量や図形、標識や文字などへの理解について把握してきたつもりではあるが、ある意味、小学校の教科学習的な捉えになりがちであった。

幼児は、自分の直感で自分の中に取り込んだり、ものへの思い入れの強さや好奇心・探究心から数量等への関心も高くしたり、人との関係性の深まりから感情を通して捉えようとしたり、よりよい解決を図る上で自分の体験から得た知識や感覚を手繰り寄せ、絡め併せて解決の糸口を見付けようとしたりするようになる。年齢の低い時期には、そのもの、その場面に限定された自己中心的な捉えであったことが、体験を重ね年齢も上がるにつれ、他の場面においても同じような考えが通用するようになる法則性や規則性にも気付いたりしていく。

しかし、低年齢期の幼児の自己中心的な考えが無用のものであるわけではなく、むしろ、そうした思考の過程をいくつか踏んだ発達の姿が必要であろう。また、数量や図形等に理解が深まったからといって、それらを応用して単なる数字上でのみ操作したり、抽象的な問いから答えを見出したりすることが可能になったりすることが重要ではないだろう。また、個人差も大きい時期であることから、同時期に他の幼児にも同様な理解を促すことは無理なことであろうし、それを願ったとしても、その幼児にとって確かな知識及び技能の基礎にはならないであろう。こうしたことは、幼児期にふさわしい評価を考える上で、最も重視すべきことである。自分にとって関係が深く、遊びや生活の必要感に基づいた関心・感覚であるからこそ、幼児期に納得して実感をもって自分の中に取り込んでいくのである。このような幼児一人一人の特性を保育者がいかに捉え、伝えるか、特に保護者や小学校教員へ理解を促すことが重要なことである。

新幼稚園教育要領では、幼児期の教育における幼児の「見方・考え方」を「身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる」となっているが、このまま伝えても、周りには幼児の育ちのプロセスは伝わりづらいであろう。どのように関わっていたのか、そこで、どのような意味に気付いたのか、どのように自分の中に取り込もうとしているのか、どのような試行錯誤をしようとしているのか、そのプロセスの中で少しずつ変化していることはどのようなことか、その変化から何を考え出そうとしているのか、友達同士で刺激し合っていることとは何かを、具体的に捉えることが重要なことであろう。評価する保育者はその視点を幼児の姿から捉えることができるようにしたいものである。

## ② 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行うとは

評価をするに当たり、幼児理解に基づいた評価を行うことが重要なことと示されたが、その評価が主観的な読み取りに終わるのではなく、高い妥当性や信頼性に基づくものであることが求められている。では、どうすれば、妥当性・信頼性を高くできるのでしょうか。

(1) 実践事例の読み取り・分析をするなかで で、述べたように、今回の調査研究で記録をとる場合、保育者の主観を交えず、幼児の様子や表情、言動を客観的に書くようにした。そのことにより、複数の委員で実践事例を検討する際、保育者の主観にとらわれず、多面的に話し合うことができることが分かった。こうした、記録を心がけることにより、一保育者の読み取りに偏りがあったとしても、保育者集団が自分なりの経験知から互いに読み取りを深め、協議する中で、その場面に対する読み取りの精度が高まり、より多面的な方向からその幼児を深く理解することができる。

例えば、3年保育4歳児(10) 5月 「125個」の事例で、当初、記録者は、「幼児がスナップエンドウを収穫できたうれしさから、たくさん取れたことを保育者に伝えたくてA児にとっての大きな数「125」を使って表現することにつながった。たくさんという捉えは、一人一人違うが、ときには量を数で表してみる経験を積み重ねていくことで、数量への感覚を養い豊かにしていく」と捉えていた。しかし、協議をする中で、この4歳児にとっての「125」という数字は、実際に数えてみた結果の数ではなく、収穫した際の印象的な「たくさん」を表すのに一番ふさわしい数として、これまで自分が知っているいくつかの数字の中から選び出した数を言葉に出したのではないか、つまり、「125個」は「たくさん」の代わりでもある言葉のようなものであり、この時期、量を数で表してみる経験が大事なのではなく、「たくさん」を自分なりの感覚で捉え、言葉や身振り、動きなどで何としても表現したくなるという心の動きが大事なこと、「125個」の数が示す意味「たくさん」を実感できたA児の感覚こそ重視したいことである。決して、数で表す経験が、この時期、必要なことではない。

いわゆる学力テストのように数値で測れない幼児期には、この多面的な幼児理解が妥当性・信頼性の高い評価となり得る。しかも、具体的な幼児の姿を基にすることで、確固たる根拠をもった評価となりうるのではないだろうか。

### ③ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育要領には、個別に取り出されて指導されるものではないこと、遊びの中で一体的に育むものであることが示されている。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の姿は、まさに、単独で育つ姿ではなく、様々な体験が積み重なってこそその結果として表れてくる姿でもある。

例えば、3年保育5歳児(22) 2月 「みんなが見れる大きいカレンダーを作ろうよ」から考えてみたい。リボン棒の踊りのショー、アイドルのショーごっこをする幼児たちがその本番の日までの見通しをもつためにカレンダーを作ることにした事例である。

幼児同士が、その中で気付いたこと・考えたことを挙げてみる。(詳しくは、75ページから77ページを参照)

○必要なことを忘れないようにするにはメモに書き記すことが有効なことに気付き、活用する。

○メモの中でも、自分たちが忘れないように予定を書き記すには、カレンダーにするとより分かりやすいことに気付く。

○カレンダーを作るにあたり、カレンダーの特徴としてマス目が等間隔であることに気付き、空間を捉えながら表を作ろうとする。

○カレンダーに練習の有無を○×で表記したところ、文字で書くよりもメンバー間で確認したり情報を共有したりするには便利な表記であることに気付く。

○ショーの本番の日程を決めるに当たり、その条件等を予想して、未就園児の子供が園に来る日は見てもらうには都合のよいこと、一緒にしようとする友達が引っ越しを予定していることから、その前がよいことなど、適切な日を見通して選ぶようとしている。

○予定を相談する過程で、互いの思惑の差を感じて、トラブルになりそうになるが、自分の考えや理由をはっきりと相手に伝え分かってもらおうとする様子、相手の気持ちを察して受け止める様子、状況を感じて気持ち良く解決する糸口を見付けたりしようとしている。

○一枚の大きなカレンダーに表記すると、互いが理解しやすいことに気付く。

○自分たちの覚えとして考えたカレンダーが、学級の他の幼児への情報の発信になっていることに気付く。

カレンダーを作る過程で、幼児同士の様々な気付きが生まれている。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の視点からは、カレンダーの特徴的な等間隔のマス目やその並び方、標識や文字やなどの機能の便利さに対する気付きやその活用になるであろうが、それは、自分たちの情報を共有する上でのカレンダーの有効性に気付いたからであり、これまで自分たちの生活の中で繰り返し使用してきた出席ノートとの関連性から捉えての気付きでもある。そして、カレンダーに記す日程を考える上で、自分たちの周りにある様々な状況を見通して考え、自分たちにとってかけがえのない「本番」の日付を書き込んでもいっている。その過程には、友達との気持ちの行き違い・トラブルの不穏な空気も感じて、相手に何とか自分の気持ちや考えが伝わるように精一杯の言葉で伝えたり、状況を察して聞いたりもしている。5歳児のこれまでの「人」とのつながりの深さから考え方が豊かな感情と共に広がってのこ

とである。また、その人を取り巻く「ことがら」や「状況」への気付きが働いているとも言える。さらに、自分たちのメンバーでの共有に役立つ機能が、学級の他の幼児へも影響を及ぼしていることから、新しい考えをも生み出していつている。

幼児たちは、これらを見越してカレンダーづくりを始めたわけではない。こうした姿は、何にも増して、幼児たちのしたいことに夢中になっている世界、つまり、遊びへの探究の気持ち動いているからである。自分たちのリボンダンスやアイドルショーへの必要感に基づいた体験が、次への体験につながり、新しい体験をも生み出したのである。そして、幼児の環境への「主体的な関わり」、人との「対話的な関わり」があってそれぞれの学びが絡み合っ、新たな学びが生まれてきている。その学びの深さに関わっているのが、幼児のものや人、ことがらや状況への捉え方の深まりとも言える。この深まりの様相を把握することこそ、幼児理解に基づいた評価として必要なことであり、幼児の発達を姿を理解すること、指導する上で幼児と共にいかに教育環境を創造するか、その具体を捉えることになると思う。

#### (5) 環境の構成及び保育者の援助の視点から

実践事例の読み取りと分析を通して、次のことが分かった。

#### 3 歳児 〈環境の構成〉

保育者をよりどころにして、園での自分の世界を作っていく3歳児は、一人一人が安心・安定感をもって自ら動き出し、興味を引かれるものに自分のしたいようにして思いのままに関わることやそれを繰り返すうちに自分の遊びに合う使い方をするようになる。その中で数や量、形や標識や文字への感覚も育まれることが分かっている。そこで、以下のように環境の構成を心掛けたい。

- 「まごごとのごちそう」のような家庭でも親しんできた好みの遊具、目にしただけで“触ってみたいな”“面白そう”と思えるような遊具など、ようやく動き出した3歳児が無理なく扱いきやすい遊具を準備しておく。【実践事例(1)より】
- 積み木やブロックなどのように、並べる、そろえる、積む、崩すなど思い付くままに扱うことで、異なる形に変化し、欲求や面白さを満たすことができる遊具を取り入れる。【実践事例(7)より】
- 上のような遊具が、思わず使いたくなるように準備されていて、自分が満足いくまで遊ぶことを楽しめるような場所があることが大切である。
- 水、砂、土など、感触が心地よく、自分なりの関わり方ができて、面白い動きや音で驚

きや不思議さ、快感などを感じることができる可塑性のある自然物と、それらを入れたり出したりして欲求を満たすことができる様々な容器やジョロやスcoopなどの遊具、それを使うことができる場があることが必要である。【実践事例(2)より】

- 石や木の葉、木の実など、色や形、手触りなどが幼児の興味を引き、ふと思い付いたときすぐに手にして見立てたりつもりを楽しんだりできるような自然物が幼児の周りあたりまえにあることが大切である。【実践事例(4)、(5)より】
- これまでの体験を通して育まれてきている、見立てる、つもりになる、構成するなどというような育ちを自然に発揮することができるように、可塑性があつて少し手を加えることでいろいろに変化する紙や紙テープ、箱、ロール芯などの素材や材料とハサミ・セロファンテープ、接着剤などを準備する。【実践事例(6)、(9)より】

### 3歳児〈保育者の援助〉

環境の構成の視点でも分かるように、保育者が自分のことを分かってくれて心を寄せることができる存在になることが必要であることは言うまでもない。保育者を抛りどころにしながら、環境に関わろうとするとき、魅力的な環境が周囲にあつて関わり始めても、関心・感覚の育ちを育むときのポイントとなる「繰り返し遊んだり使ったりする」「思い入れをもつようになる」「諸感覚を通して関わることを楽しむ」ためには、一人一人のしていることを「意味あること」と肯定的に受け止めて、以下のような具体的な援助をしていくことが必要である。

- 【実践事例(1)】で「これなあに？」と不思議に思ったことを聞いてきた時、【実践事例2】で「もっとお水欲しい」と遊びを続けようとして訴える時、【実践事例(3)】で「そんなに入れないよ」とどうしたら楽しく続けられるか困っている時、【実践事例(6)】で「見て、こんなに長いよ」と認めてほしくて言った時など、幼児が「先生」に援助を求めてきた時に、タイミングをはずすことなく、一人一人の思いに添った関わりをする。
- 3歳児は、【実践事例(2)】の「ボコボコってならない」、【実践事例(6)】の「こんなに長いよ」、【実践事例(9)】の「このくらいにしておくことにした」のように、自分なりの数や量や重さの捉えを、自分なりの言葉で表すことが多い。大人からは単なる擬音語だったり何気ない言葉に思えたりするが、「感じたことを言葉で表そうとしている姿」と捉えて意味を理解し、“面白いな”“そんな表現をするんだな”と、感心したり大切な育ちであると受け止めたりしていく。
- 周りの幼児にも少しずつ親しみを感じるようになり、一人の世界で楽しんでいたことが

周りに広がることでより関心や感覚が膨らむようになってきたら、【実践事例(3)】で保育者が「なんだかここ覗きたいだね」とワクワクするような雰囲気ですぐ声を掛けたり、【実践事例(4)】で、A児の「恐竜がいた！」に、「恐竜かな！」と保育者も同じ言葉で表したりしたように、一人の幼児の楽しんでいることや発見したことが本人だけでなく、さりげなく周りにいる幼児にも伝わるようにしていく。

#### 4歳児〈環境の構成〉

自分の好きな遊具やお気に入りの場を拠点にして遊びを膨らませていく4歳児は、“面白かった”“次はこうしてみようかな”“明日もまたやりたいな”と、少しずつ継続して遊んだりじっくりとそのものに関わったりするようになり、その中で関心が深まり様々な感覚が育まれる。そこで、継続したりじっくり関わったりすることのできるものや場を、意図性をもって構成することが大切である。

また、4歳児は、友達と一緒に遊ぶ楽しさや面白さを求めるようになっていく。その中には、友達から刺激を受け自分の遊びを楽しめるものにしたり、自分の楽しんでいることに友達に興味をもってくれることで、楽しさが膨らんだりする。このように友達との遊びを楽しむ中で、数や量や形、文字や標識への関心や感覚も育まれていくことを踏まえ、環境の構成や援助を心掛けたい。

- スナップエンドウやサツマイモのような、栽培から収穫まで時間の経過と共に、大きくなるとか数が増えるといった目に見えての変化を感じることができ、触れたい、集めたい、持ちたい、比べたいといった様々な欲求を満たすことができるような栽培物。また、それを食べてみるといったワクワクする体験を伴うことで、幼児たちの中に充実した経験として蓄えられていくことができる遊びや活動を取り入れる。【実践事例(10)、(14)より】
- 自然環境の中でも、小動物や昆虫などの飼育物との出会いも大切にしたい。小動物や飼育物が身近にあると、偶発的な出来事がたくさん起こり、様々な体験が生まれる。実践事例の幼児は、“ザリガニは怖いから部屋に入ってほしくない”という必死の思いで進入禁止マークを貼る。このような発想は保育者の予測の付かないところで生まれてくる。自然物が幼児にもたらす体験や気付きは、既成の遊具には変えられないものがあることを再確認することができた。【実践事例(11)より】
- 4歳児にとっても、木の実などの自然環境との様々な出会いは必要である。3歳児は、その時々驚きや面白さを味わうことで満足するが、4歳児は、実践事例の中で、ドングリを夢中になって分けることを楽しむうちに分類や種類に気付いている。自然物のもつ色や形、音などの面白さは、既成の遊具では味わえない。タイミングを逃さず取り入れ、そ

れを使っていろいろな遊びを思い付いたり関わり方を工夫したりできるように、他の遊具や材料も併せて取り入れながら環境を整えていきたい。【実践事例(13)より】

- 実践事例の恐竜の人形のように一人一人が思い入れをもって関わることで、自分の遊びが面白くなるような遊具が必要である。特に4歳児は、“大切な仲間と一緒に戦うぞ”“うちの犬と散歩に行きましょう”など、つもりの世界を自分なりにあるいは友達と楽しむことができる遊具を取り入れたい。3歳児でもそのような遊具を多く取り入れるが、遊ぶことを積み重ねながら思い入れも深くなり、遊び方も広がっていくことを踏まえて、自然物と同様に、他の遊具や材料と組み合わせながら遊べるように環境を作りたい。

【実践事例(12)より】

- 実践事例では、保育者や友達とかるたとりを繰り返し楽しみながら、文字への関心を増していった。文字や数字を使ったトランプやすごろく、かるたなどは、友達とのつながりができて一緒にすることが楽しくなる時期にタイミングよく取り入れるようにしたい。幼児の周りには、様々な数字や文字の環境があるが、どのタイミングでそれらに関心をもったり遊びや生活に取り入れたりするようになるかは、一人一人異なる。“友達と一緒に遊びたい”気持ちが出てきたときに、“友達と一緒にするから楽しい遊び”を取り入れ、一人の興味や関心が友達にもつながることを大切にしていきたい。【実践事例(16)より】

#### 4歳児〈保育者の援助〉

- 【実践事例(10)】では、たくさんとれたスナップエンドウをうれしそうに持ち、幼児が「重くなったよ」と言いに来たタイミングを保育者が捉え、“重さをどんなふうにも数として捉えるのかな”という思いをもって「すごい重たいね。何個とれたんだろうね」と尋ねてみている。また、【実践事例(13)】では、ドングリを分けることを楽しみ始めた幼児に多めにカップを渡し、どの程度形や大きさの違いを意識するだろうかと着目している。幼児が遊びや活動の中で表すほんのちょっとした言葉や動きにも関心・感覚の芽生えや気付きが込められていることを心に留めて関わり、幼児の育ちにつなげていきたい。
- 【実践事例(11)】では、小さなさつま芋を見つけた幼児たちの“土に植えたら大きくなる”“大きくなってほしい”という、一番の関心をキャッチして、保育者は「植えておいたから大きくなったってこと？」と驚きを表している。また、【実践事例(15)】では、保育者は「恐竜の化石？それは大発見だよ！」「先生も掘ってみたい」と幼児の気付きを大発見と価値づけたり、こだわりを表す幼児を「博士」と呼び、石探しを「発掘」と言ったり“発掘に必要な道具”を用意したりして、一人一人の望む役割をして、幼児の興味や関心を後押ししている。【実践事例(16)】のかるた遊びでは、幼児たちの要求から保育者は根気よく読

み手を続ける。そのうちに、幼児が自分から「読み手になる」と言い出す。「先生は、隣で応援するね」と言い、困るようなことが起きたときには援助できるようにしている。その子なりの思いやりしたいことがはっきりしている幼児には、その子のこだわりが育ちにつながることを意識して、的を得た関わりを心掛けたい。

### 5歳児〈環境の構成と保育者の援助〉

互いに自己発揮し合いながら自分たちの遊びや活動を充実させていく5歳児は、2年ないし3年近くの遊びや生活を通して体験から得た、それまでの育ちをよく見取り援助することが大切である。また、一人一人の関心や気付きが幼児同士で行き交いながら仲間や学級全体の関心や気付きになり、それがまた、一人一人に還元され学びが深くなる。それを踏まえて、保育者は、幼児たちから生み出される遊びや活動に加えて、仲間と目標や目的に向かう充実感や達成感が味わえるような遊びや活動を提示し、様々な気付きを引き出したり促したりしていきたい。

- 5歳児では、【実践事例(17)、(18)】のような、長いスパンの中で、様々な体験ができるような活動を意図的に取り入れることが大切である。保育者から提案したり投げ掛けたりするときに、幼児の主体性を優先して、その活動の「取り組みを決定すること」「どのように取り組むか計画すること」「必要と思われるものの準備」「実際の取り組みの中身を考えること」などは、幼児たちの主体性にできるだけ委ねていくよう心掛けたい。5歳児前期では、分かりやすくワクワクするような内容で、自分で考えることもみんなで話し合うことも楽しめるような取り組みであることを心掛けたい。そこで、満足感や充実感を味わうことから、自分たちで考えて進めていくことに自信を得られると思われる。そして、幼児にとって初めてのことや知らないことが出てきても、“やってみよう”“どうすればいいか知りたい”“分からないことは聞いたり調べたりしよう”と、幼児たちが知る楽しみも味わいながら活動を進めるようになっていくと思われる。
- 幼児たちが思い付いて始める日常の遊びや活動についても、幼児の発想や考えを認め、その実現に向けて環境の構成や援助をしていくことが大切である。【実践事例(21)、(22)】のように、保育者は、幼児たちがこれまでの体験から得た気付きを尊重するように援助していくが、幼児たちでは方法や材料などぴったりくるものが見付からない場合がある。保育者は幼児たちの向かっていこうとする方向をよく見て、充実感や達成感が得られるように、適切な材料や道具を示したりアドバイスをしたりしていきたい。
- 5歳児は、これまでの経験から、園環境についてもよく知っており、自分たちの遊びや活動に取り込むことができる。また、これまでに遊んだり使ったりしてきた遊具や材料、

道具などについても、“このようなときにはこれを使うといいな”「先生、〇〇を使いたい」というように、自分が知っていて扱えるものを使おうとする。保育者は、幼児たちが選択したものがそのときの幼児の取り組みに適しているかをよく見極め、**より適したものと新たなものを提示することで選択肢の幅を広げたり満足感が得られるようにしたり**することを心掛けたい。

## 2 今後の課題

- 今回の調査研究では、名古屋市立幼稚園 11 園の研究協力園の実践から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである「(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に視点をあて、その発達を具体的な実践事例から読み取り、その姿を踏まえた幼児期にふさわしい指導の在り方や教材の工夫、幼児理解に基づく評価の在り方を考えてきた。  
 今後は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の他の 9 の姿についても、実践を通して理解を深めていきたい。
- 今回の調査研究で、研究協力園の保育者が日々の生活や遊びの場面から実践事例を切り取り、読み取り分析する難しさを改めて感じた。このことは、日ごろから幼児の姿を記録して振り返る積み重ねが十分にできていない現状を振り返る機会にもなった。一人一人の幼児のよさや可能性を理解するとともに、自身の指導を振り返り指導の改善に生かすためにも、記録の方法や園内研修のあり方を工夫していきたい。
- 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である。しかし、遊びを通してどのようなことが育っているのかを十分に伝えられていない課題がある。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から、様々な事例を分析し、遊びの中で育っていることを明確にし、保護者、地域、小学校の教育に携わる人などに向けて、分かりやすく伝え、発信をしていきたい。
- 今回、事例を集め育ちを読み取る中で、自分にとっての必要感が仲間や学級の友達にとっての必要感へ変わっていくことは分かった。しかし、今回、3 歳児後期から 4 歳児に見られるようになるお気に入りの友達や大好きな相手との遊びや活動の事例が十分取れておらず、特定の相手との必要感からの育ちが捉えられていないことに気付いた。大好きな特定の友達との遊びや生活に十分満足すると、友達との関係も広がっていく。育ちを確かめる根拠として、大きな反省点である。

## おわりに

今回の幼稚園教育要領をはじめ、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂・定で共通して示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、「(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」については、ある危惧を抱いていました。この姿が示す意味を保育者が真に理解しないと、これまで幼児教育の長い歴史の中で重視してきた「幼児期にふさわしい生活の展開」「遊びを通した総合的な指導」「幼児一人一人の特性に応じた指導」が簡単に崩れ去ってしまうのではないかということです。幼児期の教育・保育の基本に立ち返り、自らの実践で明らかにするとともに、保護者はもちろんのこと、幼児教育に関わる全ての方々と認識を一つにすること、特に、幼児期の教育・保育から高等学校まで学校教育において育みたい資質・能力を一貫してつないでいく上で、幼児期から児童期への学びの連続性を明らかにすることは重要です。

実践を深く読み取り分析する中で、幼児の数量や図形、標識や文字等に対する関心・感覚とはどのようなものなのかが見えてきました。それは、単なる読み書き・計算ではなく、幼児自身が学ぶ喜びに満ち溢れたものでした。必要感に基づく体験を通しての関心・感覚は、人との関わりの親密さ、ものへのこだわりの強さ、周りの状況を捉える鋭い感覚などと深く関わっていること、どちらが先かということではなく、そうした様々なことと絡み合い影響し合って「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は豊かに深まっていくことが幼児期の学びの特性であることも感じました。生涯にわたって学び続ける原点の幼児期だからこそ大事にしなければならない姿であると同時に、どれだけ保育者がそうした姿を読み取り、見届けられるかにかかっていると感じずにはられません。

いよいよ、4月からは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の施行となり、これらを踏まえた実践が求められます。

保育者の専門性を磨く上でも、一人一人が自己の感覚・感性も磨き続けていきたいものです。

平成30年3月

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部

教授 津 金 美 智 子

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、名古屋市教育委員会が実施した平成29年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。